
Akashic Records ~ Edgar ~

誠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A k a s h i c R e c o r d s \ E d g a r \

【Nコード】

N 4 1 4 1 Z

【作者名】

誠

【あらすじ】

この物語はとある墓からとある人物の死体を掘り起こした一人の盗賊から始まる。

誰一人として、無関係な者はいない。

愛しい人が死んだなら、あなたならどうするだろう。

0・この物語において出会いは終結に他ならない

この物語は一人の盗賊から始まる。

少年は大貴族、クロムウエル家の嫡男であり、その容姿たるや神も嫉妬する程であると謳われていた。しかし、ある日突然に少年は誘拐され、そのまま盗賊としての道を歩むことになる。華やかな幼き日も忘れて暗闇で生きることになった少年と”彼女”が出会ったのは、夏も終わりがけた肌寒い夜の墓地だった。

「駄目よ、死者の眠りを妨げては。」

「…用があるのは一緒に埋まっている金や銀だけだ。」

背後に彼女が立っているのにも関わらず、少年は土を掘り返し続ける。淡い紅色の鰯雲が月明かりで薄ぼんやりと青黒い空を流れる、そんな、夜。

「その金も、その銀も、愛する人の死を悼む人々がその人のためだけに埋めたものよ。」

「金や銀にしてみたら、腐った死体と土の中より俺みたいな恵まれない子供に貰われたほうがよっぽどマシだろうよ。」

一見、彼女の言葉など気にしていないように見える少年だが、頭の中では考えていた。もし、女が邪魔するようであれば殺す他あるまい、と。そして、彼女は言った。

「…やめなさい。」

少年はゆっくりと立ち上がった。その手には土で塗れたナイフが

あった。殺してしまおう、そう、少年は考えた。

「私が死んだら、その墓を暴けばいい。」

振り返ろうとする足が止まり、ナイフを握る手にも変に力が入る。

「…お前が死ねば、好きにしていんだな。」

「ええ、金銀を盗るなり、死体を刻むなり、好きになさい。ただ…」

感覚的に、女との距離は2、3歩。間髪入れずに首を掻く切る…少年の心臓は大きく鼓動していた。

「私はこの墓地の墓守よ。死者の眠りを見守る義務がある。だから、私の目が黒いうちは…」

この血の巡りをじっくりと感じてから、少年は勢いよく振り返った。そして、間髪入れずに彼女の首を…

「…墓荒らしなんて、やめなさい。」

掻く切れなかった。少年はナイフを強く握りしめたまま、その場に立ち尽くしてしまったのだ。

「あなたの綺麗なブロンドの髪や白い手から、土と血の匂いがするのは…悲しいわ。」

吸い込まれていた。目の黒いうちは、と豪語する彼女の瞳の黒いこと、黒いこと。小さな光が闇夜に浮かぶ月のように輝いていた。黒髪が風に靡く度、暗がりではんやりと発光しているかのように月明かりに照らされた白い肌が見え隠れする。その様はまるで、消え

かけた蠟燭の火。

「……」

ゆらゆら揺らぐ、小さな光。今にも消えてしまいそうな不安感。少年の目は、彼女に釘付けになってしまった。

「……いい子ね。」

彼女は優しく微笑んだ。その笑顔に少年は身体を強張らせる。恐れ、ではない。驚きを含むそれは、明らかな安堵であつた。そして彼女は、少年を抱きしめた。

じんわりと伝わってくる温もり。少年の手元からスルリとナイフが滑り落ちる。大きく見開かれ、彼女の肩越しに墓地を漠然と眺める目からは涙が零れ落ちた。

彼女の温もりの中で、少年は思い出していた。家族に囲まれた温かく華やかな幼い日々。それが突如失われた、絶望。ほんの数年前とはいえ、少年にとっては遠い遠い過去の記憶。それまで胸の内にしまってきた、思い出さなくなつた記憶だ。思い出せば悲しみや苦しみがどつと湧き上がってくることを、少年は幼いながらにわかつていたのだ。それが、堰を切つたように涙となつて溢れ出す。

「……辛かつたのね、悲しかつたのね。でも、もう大丈夫よ。死者には温もりを感じる身体も、涙を流す術もないけれど、あなたは違う。生きているのだから。私が……いるのだから。」

少年は感じていた。彼女の憂が匂わす黒い影を。この温もりは決して光ではない、四方八方何も見えないばかりか、遠近感さえ鈍らせる暗がりである。そう感じていながらも、少年は彼女の背中に震える手を回した。闇に溶けてしまつても構わないから、この温もり

を手放したくないとばかりに彼女の胸に顔をうずめ、泣き叫んだ。そして、それまで直視しようとしなかった誘拐されたという事実と向かい合い、ようやく愛情に満ちた過去と思い出に涙ながらの別れを告げる。

幼いからこそ母性愛には貪欲で、少年だからこそ痛みに敏感。少年は彼女に甘えると共に、彼女を受け入れていたのかもしれない。

少年の泣き声と森のざわめきだけが響く夜の墓地。ローズウッド家の墓の前で抱きしめ合う二人は、こうして傷を舐め合うようにして出会ったのだ。それを見ていたのは墓から半分程顔を出す白骨化しかけたローズウッド夫人と、空に浮かぶ満月だけ。

二人の出会いとは極めて暗く、死の匂いに包まれたものであった。

しかし、この出会いはなんの始まりでもない。冒頭で説明した通り、この物語は一人の盗賊から始まる。一人の盗賊と、一人の死者から。そして、満月のようにただ終わりへと向かってゆく。

「…まさか、そんな。」

そして、二人が再会したのも満月が浮かぶ夜の墓地であった。

「なんで、ミハエルが…」

青年になった少年は驚きを隠せずにいる。それもそのはず。

「どうしてクロムウエル家の墓に、ミハエルが埋まってるんだよ…」

少年…いや、カイザが掘り起こした墓には、幼き日に墓地で出会

った彼女が眠っていたのだ。

カイザは思わず彼女の頬を撫でた。何故なら、その死体はあまりに綺麗で眠っているようにしか見えなかったからだ。撫でた頬は冷たいが、柔らかい。

「…どうして。5年も前に埋められたはずなのに腐ってもいないなんて。」

カイザが墓石に目をやると、そこには見知らぬ人物の名が刻まれていた。

「…エドガー…って、誰だよ…」

そう、ここから全ては始まるのだ。カイザがかつて嫡男であったクロムウェル家の墓を暴き、眠っているかのように死んでいるミハエルを掘り起こしたまさにこの時、月は満ちた。

…何故、プロローグに関係のない二人の出会いを語ったか。それは、物語の始まりではないが、物語の…

「…死んだのか、ミハエル。」

カイザはまだ実感が湧かないようだ。涙も出ない、言葉も出ない。カイザはミハエルを見つめてまた、立ち尽くしていた。

そして二人は果てしない思い出の輪へ還ろうとするのだ。物語の… 結末へ。

1・首謀者はその計画を隠したまま眠る

月が満ちる日から一ヶ月と数日前の話だ。

「カイザ、ちょっとこい。」

盗賊の一団で埋め尽くされた騒がしい酒屋の一角で、男はカイザを呼びつけた。カイザは一緒に食事をしていた仲間と目配せをして、席を立つ。

「なんですか、マスター。」

「お前、明日からウェルスに向かえ。」

ウェルスは盗賊団のいる街から北へ真っ直ぐ行ったところにある港町だ。

「俺、1人ですか。」

「そうだ。」

マスターと呼ばれる男はカイザと視線を交えることなく酒瓶を手にした。カイザは普段と違う雰囲気にならず戸惑い気味だ。いつもなら豪快に笑って仕事へ送り出してくれるはずなのに、ましてや1人で長旅に出されるのだ、カイザの心には一抹の不安が過る。危ない橋を渡らせて自分を始末するつもりなのではないか、と。

「……」

「なんだ、」

浮かない顔をするカイザに気づいたマスター。そこでやっと、二

人の目が合う。その時、カイザは少し安堵した。マスターの目にはなんら悪意を感じなかったからだ。こんなゴロツキの一団だ、上も下も感情剥き出しで考えていることが顔に出る連中ばかり。表情を見れば何を思っているかがある程度わかる。

「いえ、なんでも…」

安堵はしたものの、疑問が芽生えた。マスターは何やら複雑な表情をしていたのだ。心配しているような、覚悟を決めたような、やはり今まで見たことのないマスターが、そこにはいた。

「…そうか。で、仕事の内容だが…」

「はい、」

「墓荒らしだ。」

マスターはカイザと目を合わそうとしない。カイザは、マスターから目が離せない。

この一団に置いて、盗みと墓荒らしは新人の仕事であり、決して入団して10年経つカイザに回されるような仕事ではなかった。そのうえ、カイザはミハエルと出会ってから墓荒らしはしていない。彼女との約束を守り続けていたのだ。それが、古株になった今になって破綻しようとしている。

「…なんで、俺が？」

「…」

「マスター！」

マスターは酒瓶を片手に黙り込む。カイザが不満に思うのも当たり前だ。しかしこの沈黙の間、役不足だと怒る彼に対する謝罪の

言葉を選んでいたわけではない。

「…暴く墓は、」

約束を破れと言われて動じている彼のことを面倒くさがっていたのでもない。

「クロムウエル家の墓だ。」

過去を捨てた彼のことで悩みに悩んだほんの数秒…それが、あの沈黙だ。

カイザは荒くなる息を抑えながら、マスターを見つめる。まだ、事を把握しきれていないために少し混乱していた。

一人の長旅を強いられ、墓荒らしを任せられ、その目標がクロムウエル家の墓だと言う。

何故、クロムウエル家の墓荒らしを自分が？

カイザはまだ落ち着きを取り戻したわけではなかったが、頭に浮かんだ疑問を言葉にした。

「なんで…俺がしなくちゃいけないんですか。」

言葉にしてみると先程怒りのままに口にした質問と内容は変わらない。しかし、今度は意味合いが変わってくる。

「俺がクロムウエル家の人間だったってこと、わかってて言ってるんですか。」

そう、墓荒らしという新人の雑用をクロムウエル家のカイザ

にあえてやらせようとするマスターの意図を、聞いているのだ。

マスターは眉を寄せて、重たい口を開いた。

「…わかっている。」

「だったらなんで…！」

「その墓の下に埋められたのが、行方不明だったクロムウエル家の長男坊だつて情報が入ったんだよ！」

マスターが声を荒げると、騒がしかった店内がしんと静まり返った。

「行方不明の…長男…？」

「…お前だよ。」

カイザは首を小さく横に振りながら、力なく笑った。

「そんな…だつて、身代金を払ってもらえずに俺は捨てられたつて…」

「俺だつて、わけがわからねえんだよ。お前の墓が建てられたのは5年前。それまで行方を搜索されてたんだ、お前は。」

捨てられたわけじゃなかった。自分の家族はずっと探してくれていた。それなのにどうして、墓なんかできてるんだ。それも、5年も前に。

「情報屋もクロムウエル家の話になるとどうも話が噛み合わなかったんだ。だから、お前自身の目で見て…」

それは、一瞬の出来事だった。注目を浴びる静まりかえった空気の中、カイザはマスターの心臓にナイフを突き立てた。吹き上

がる血しぶきと、どよめく店内。

「カイザ！てめえ何したかわかってんのか！」

「マスター、マスター！」

既に死んでいるというのに、必死に呼びかける子分共を見てカイザは笑った。

「どうして…俺をここに留めたんだよ。身代金でもなんでももらえばよかっただろ。貰えないなら、殺せばよかっただろ！そしたら、そしたら俺は…」

マスターの死に逆上した者共が一斉にカイザへと襲いかかる。カイザはそれをヒラリと避け、マスターが飲みかけていた酒瓶を手にしてテーブルの上に立った。

「お前らのせいで…お前らのせいで俺は亡霊になったんだ！みんな、道連れにしてやるよ！」

カイザは酒瓶を叩き割り、そこに蠟燭を一本、落とした。その瞬間に炎は勢いよく天井まで伸びて、店内は逃げ惑う盗賊で溢れた。カイザはテーブルに並ぶ酒瓶を狂ったように放り投げる。壁や天井、逃げようとする盗賊は酒にまみれ、火は勢いをつけてゆくばかり。一つしかない出口に向かってなだれ込み、仕舞いには順番を巡って殺し合いが始まった。その時カイザは出口から離れたテーブルに立ち尽くし、火に取り込まれようとしているマスターの死体をじっと見つめていた。

カイザにとって、盗賊団で過ごした十数年は常に気を張る安らぎのないものであった。家に帰れないかもしれないという恐怖と闘う幼き日々、悪事に手を染めねば生き抜けない少年時代、いつ殺

されるかわからぬ日々に怯える青年期。炎に巻かれ、地獄絵図のような殺し合いを目の前にしてカイザはやっと、張り詰めていた糸から解放されたのだ。いや、マスターを一突きにした際、既に糸は切れていたのかもしれない。

「カイザ…」

弱々しく自分を呼ぶ声に、安心していたカイザは我に返った。辺りは火の海、その中でユラユラと争う盗賊達の姿が見える。誰も、出口と反対の此方など見ていない。

「カイザ…」

声の主は、マスターだった。彼はまだ生きていたのだ。カイザは少し驚いたが、もう虫の息であることを察するとマスターに歩み寄った。マスターを見下ろすその顔は何の色もない、無慈悲な笑顔。

「…なんですか、マスター。苦しいんですか？」

「カイザ…」

「楽にしてあげますよ、」

カイザがナイフを振り上げると、マスターは血を吐きながら言った。

「マザー…クリストフに…会え。リノア鉱山を仕切ってる…山賊の…」

「だから、なんで、俺が？」

カイザは鼻で笑った。そんなカイザを真っ直ぐに見つめて、

マスターは静かに涙を流した。

「行けば…お前の力に…」

「俺の力って、今更何をしてくれるっていうんですか。俺はね、死ぬんだ。あんたと一緒に。」

マスターの涙を見ても、カイザは煙で濁った目をして口元だけで笑うばかり。それでもマスターはカイザに語りかけた。段々と細くなる声。彼の命の火は徐々に小さくなってゆく中、二人を覆う炎は勢いを増してゆく。

「お前の両親は…お前を、捨てた。」

「さっきと話が違うじゃないですか。」

「真実を…その、手で…その目で…」

真実…カイザにとって、それはもう興味の無い物だ。盗賊になった頃から、真実などどうでもよかったのだ。むしろ、知りたくなかったのだ。カイザの顔から、笑顔が消えた。

「どうしていいのか…迷ったんだ。馬鹿な俺でも…」

「…」

「すまな…い、カイ…ザ…頼りない、マスター…で。」

「やめてください…」

涙でぐしゃぐしゃのマスターの顔を、カイザは泣きそうになるのを堪えて睨んだ。何故、泣きそうなのか…彼自身、理解できないでいた。

「生きる…カイ…」

「やめろ!」

カイザは、ナイフでマスターの喉を突き刺した。震える手で、深く、突き刺した。固く瞑った目をそっと開きマスターを見ると…光を失った目は、悲しそうにカイザを見つめていた。

「そんな、顔をされたら…恨むのを躊躇ってしまっじゃないですか。マスター…」

カイザは涙目になりながら、悲しそうな笑顔を浮かべた。

もう、出口もない。周りは赤一色に染め上げられた。カイザは崩れ落ちようとしている店内を見渡して、立ち上がった。

「…誘拐したこと、恨みます。育ててくれたこと、感謝します。俺は…もう少し、生きてみます。」

何故、泣き出しそうなのか。何故、こんな言葉が口から出たのか。何故…マスターに言われるがままに生きてみようと思ったのか。カイザはわからない。

燃え盛る炎の中、夢中で外へ飛び出した。服に燃え移った火を地面で叩き消し、ふと、顔をあげた。

暗闇で空高く燃え上がる。火の粉がキラキラと散って、煙が空を赤黒く染める。マスターを、燃やしてゆく。

「…カイザ！」

「生きてやがった！」

火事で騒々しい店前にいた残党が、カイザを捕らえようと向かってくる。

カイザは人混みに紛れてその場をやり過ごした。

「この火事って…あの盗賊団がやったのか。」

「酷いことするよ、あのゴロツキ共。」

「この際だ、兵隊さん達に頼んでみるか。盗賊を根絶やしにしてください、つてよ。」

住民達の怒りの声を聞きながら、カイザは街を出た。

生き残ったところで、クロムウエル家には戻れない。行くあてもない。人々に忌み嫌われる盗賊なんて。

カイザは、とぼとぼと森を歩きながら決意した。何も失う物のない自分だ、せめて…自分の墓とやらくらい、拝ませてもらおう。両親が自分を愛してくれていたという証を目に焼き付けて…死のうと。

そして彼は、ミハエルと再会するのである。クロムウエル家の自分の墓で、エドガーと名付けられて埋葬された彼女と。結局、カイザはマスターの言っていた通りに真実を探すことになる。暗闇の中、手探りで手繰り寄せるそれが一本に繋がっているとも知らずに…追憶の彼女を追いかけて、生きると言われた意味を探す。意味なんてものに固執して運命に踊らされるカイザが、マスターの言葉の意味を知るのはもう少し後。それまではただ、冷たくなったミハエルと…無言の道中。

2・足りないピースは時として人を導く

「なあ、なんで墓守なんてしてるんだよ。」

時刻は夕暮れ。空が赤く染まり、森の影が大きくなって暗闇になろうとしている、そんな時刻。カイザはローズウッド家の墓に腰掛けて、墓地の手入れをするミハエルを眺めていた。

「なんでって…私を拾ってくれた人が墓守だったからよ。」

「その人は？」

「ずっと前に、死んだわ。」

ミハエルは立ち上がり、空を見上げた。森の影の中にポツカリと穴があいたかのように墓地の真上には空が広がる。

「その人も、先代の墓守に拾われたのよ。みんな、寂しかったのね。」

「…ミハエルは、寂しくないのか？」

ミハエルは心配そうに見つめるカイザを見て、微笑んだ。

「寂しくないわ。死に囲われたこの場所だつて、一步外へ出れば生命で溢れてる。でも…」

ミハエルは笑顔を曇らせ、墓を見下ろした。

「こうして他人の眠りを見守り続けても、私が死んだ時、私の眠りを見守ってくれる人がいないのかと思うと…少し、寂しいわ。」

「…寂しいんじゃないか。」

「そうね、私も先代達と同じね。」

ミハエルは”寂しい”と言いながら笑う。寂しくないと言葉にするくらいだ、自虐的なわけでもない。ただ彼女は純粹に、”違う”と思ったけど同じだった”という結論に対して微笑んだのだ。彼女を好いているカイザには、それがひどく、寂しげに見えてしまう。慈悲深く、孤独なミハエル。彼女が発する不思議な温もりと不安定な憂にカイザは惹かれていた。初恋、というよりは姉への愛情に近いかもしれない。その気持ちは次第に、彼女の死を見守りたいという思いに変わってゆく。聞こえが悪いが、つまり、ずっと一緒にいたい、ということだ。

――――――――――

「…なあ、ミハエル…」

ウェルスを出て数日。カイザはクロムウェル家の墓を暴き、彼女をそのまま連れ出していた。

山間の河原でミハエルを岩に寄りかからせ、その隣に腰掛けるカイザ。

「その…なんだ、」

カイザは信じられずにいた。透き通るように白い肌も、黒々とした艶のある髪も、ましてや容姿さえ昔と全く変わらない彼女が、死んでるなんて。眠るように柔らかく目を瞑る彼女を目の前して、墓地に埋め直してはいけない気がしたのだ。しかし…

「…久しぶり、だな。」

本当は、彼女に会えて嬉しくてたまらないのだ。せつかく再会できたのにまた埋めてしまうのは忍びない…それこそ、本心だった。

脈拍もなく、呼吸もしていない彼女に向かって少し緊張気味に言葉をかけるカイザ。

川向かいの林からは小鳥の囀が聞こえる。細かく波打つ川の水面には、二人の影が揺らめいている。一見、一組の男女にしか見えない二人だが…死体と話す自分の姿は、カイザの目にどう映っているのだろう。

「なんで、クロムウエル家の墓に入ってたんだよ。俺の墓なんか…」

川上から流れてくる心地よく冷たい風が、彼女の髪をサラサラと撫でる。

「それに、エドガーって誰なんだ…？」

寝息が聞こえてきそうな安らかな寝顔は、まるで夢でも見ているようだ。

「…本当に、死んでいるのか？」

ミハエルは何も応えない。

わかっていた。わかりきっていたことなのだ。どんなに話しかけても彼女の瞼が開くことはない。しかし、カイザは心のどこかで腐りもせずに姿を留める彼女が突然目を覚まし、また昔のように優しく微笑んでくれることを期待していた。それこそ、夢のようなことを。

カイザは小さく溜息をついて立ち上がった。この場を離れ、目的地へ向かおうとしている。

彼女に白い布を被せて背中におぶり、紐で自分の身体に縛り付けた。ウェルスで調達した旅の荷物も手にして、カイザは山道を歩き出す。

目的地とはマスターが死んだ酒屋のある街とウェルスのちようどん間に位置する華の京、カトリーナだ。そこに向かう理由は、ただ一つ。

「……絶対に取り戻してやるからな。ミハエルの死を悼む人々がミハエルのためだけに埋めた……宝物。」

窃盗品のほとんどが流れ込んでくる、別名野犬の京、カトリーナ。

ミハエルが入った棺には丁寧に宝物箱が用意されていたが、中は空っぽだった。大きな輪のようなものが埋め込まれた跡があり、何かがそこに収まっていたことは明白であったため、カイザが掘り起こした時、既に墓は荒らされていたと考えたのだ。その奪われた何かを取り戻すために、カイザはカトリーナへ向かっていた。

二人が出会って一ヶ月経つか経たないかの頃。カイザはミハエルといつものように森の中にある墓場で会っていた。

「ミハエルはどこに住んでるの？」

会いに来ているからこそ、疑問に思ったことをそのままに聞いてみた。

「…ここからすぐ、ノースに家はあるわ。」

ノースは墓場からも近い、小さな田舎町だ。

「そっか…俺は今ハウルに宿をとってる。」

その頃、カイザが属する盗賊団はノースのすぐ隣の町にいた。それもあって二人は出会ったわけだが、カイザは盗賊団の移動と共に町を離れなければならない。この時、彼はミハエルが自分を止めてくれることを望んでいた。

「そう、すぐ隣ね。」

彼女は雑草を抜きながらカイザに微笑みかけた。

「いつでも遊びにいらっしやい…とは言っても、遊べるものなんて家にはないけれど、手料理くらいならご馳走するわ。」

期待していた言葉ではなかったが、嬉しかった。盗賊団ではろくな食事も与えて貰えず、いつも市場の品を盗んではひっそりと1人で食事していたからだ。そして、彼女の近くにいけると思うと心が弾んだ。

「ぜ、絶対な！」

「ええ、あまりいいものは出せないけれど、精一杯もてなすわ。カイザは私の大事な友人だもの。」

彼女の言葉に、カイザの頬も緩む。秋も盛りの、木枯らしが吹く墓地で。

「一泊で頼む。」

山を出てすぐに位置する寂れた田舎町にカイザはいた。一日歩き通してその日は宿をとることにしたのだ。

「…お客さん、その背負っているのは？」

「死体だ。葬儀する場所まで運ばなければならない。」

宿の主人は怪訝な顔をしてカイザの背中におぶさるそれを見つめた。

「悪いが、他所をあたってくれ。他のお客さんから苦情がくるんだな。」

「しかし、他に宿は…」

「町外れの西瓜畑にある。そこならきつと受け入れてくれるだろうよ、死体でも、なんでも。」

「…わかった。」

カイザがその場を去ろうとすると、店主は右手を差し出してきた。

「…？」

「お客さん、情報料は１０００ペルーだ。」

ニヤニヤと笑う店主を、彼は睨んだ。

「ここは情報屋の町アイダだぜ？モノを聞いたならそれに見合ったペルーを払わないこと…」

「情報屋の町…ここが？」

「はい、2000ペルー。」

カイザはカウンターを叩いて店主と真っ正面に向かい合う。

「…町の話はあんたが勝手に話したただけだ。」

「そうだ。」

「だったらペルーを払う必要はないだろう。」

「違う違う。アイダについての情報はサービスだよ、お客さん。」

店主は睨むカイザに顔を寄せて、囁いた。

「聞きたいこと、あるんだろ？」

「…」

「そんな顔してるぜ？探し物してますって顔。」

店主はカイザをカモにするつもりらしい。彼もそれをわかっていて。暫く睨みつけた後、カイザは1万ペルーをカウンターに叩きつけた。

「釣りはいらない。」

「…毎度あり。」

真っ暗な町でポツンと佇む一軒の酒場。中は狭く、カウンターの席が10席程しかない。そこで、1人の男が店のマスターと話をしながら酒を飲んでいた。

「…いらつしゃい。旅の方？」

店のベルが鳴り、マスターが挨拶をした。男はマスターの視線を辿って入口を見た。

「久しぶりだな、フィオール。」

男は入口に立つカイザを見て酒を吹き出した。

「あれ、二人はお知り合い？」

マスターが二人を交互に見つめた。フィオールはカイザに背を向け、げぼげほと咳き込む。カイザはフィオールの二つ隣の席に座り、酒を注文した。

「…呑気に酒なんて飲んでる場合かよ。盗賊団のお尋ね者が。」

フィオールはマスターの背中を気にしながらヒソヒソと話す。カイザは彼に少し肩を寄せて、鼻で笑った。

「やっぱり、既に話は回っていたか。」

「やばいぞ…バンディが残党束ねてお前を探している。俺が身を置けるところを紹介してやるから、さっさと逃げろ。」

「そんなことはどうでもいい。聞きたいことがある。」

マスターがカイザの目の前に酒を置いた。

「クロムウェル家に、こいつが埋められていた。」

カイザは自分とフィオールの間の席にミハエルを座らせ、布をとった。フィオールは何がなんだかわかっておらず、彼女をまじまじと見つめている。

「…人形、か？見事だな。」

「…死体だ。」

「死体なわけあるか！あの墓は5年前に建てられたんだぞ。死体だったら今頃腐って…」

カイザはミハエルの手を取り、フィオルの頬を撫でた。フィオルは驚いた顔をして固まってしまった。

「…人の、感触。」

フィオルは撫でられた頬を触りながら、グラスに視線を落とす。

「俺の前に墓を暴いた奴がいる。そいつを追っているんだ。」

カイザは酒を一口飲んで、煙草に火をつけた。

「知らないか？」

「…悪いが、知らない。それに、お前も知つての通り俺はお前が殺した男とマザー・クリストフ専属の情報屋だ。おいそれとネタを垂れ流すことはできない。」

フィオルは眉を寄せてグラスを手にした。この男とカイザは盗賊団にいた頃より仲が良かった。フィオルが盗賊団に顔を出しに来る度、カイザに土産を渡していたのだ。何故、自分によくしてくれていたかはカイザ自身わかっていなかったが。

「…お前が頼りなんだ、なんでもいい。クロムウェル家に関することを教えてくれ。」

「だから、駄目だ。」

「金なら幾らでも払う。」

「そついう問題じゃねえんだよ。」

悔しそうに俯くカイザを見て、フィオールは小さく溜息をついた。

「…そんなに知りたいなら、マザーから聞いたらどうだ。」

マザー・クリストフ。鉦山を牛耳る山賊の頭。カイザが属していた盗賊団と並ぶ勢力を持つ。マスターが死に際に口に使っていた名前だ。

「…クロムウエル家について、何か知っているのか？」

「少なくとも俺の情報は余すことなく盗賊と山賊に提供してきた。お前の殺したマスターと、鉦山のマザーにな。」

「じゃあ、もしかしたら墓を暴いたやつのも…」

「ああ、知っているかもしれない。」

カイザは勢いよく立ち上がり、ミハエルを抱きかかえる。そんな彼をフィオールは心配そうに見つめていた。

「おい、本気で…マザーのところへ行くのか。」

「当たり前だろ。」

カイザは煙草をねじ消し、ペルーをテーブルに置いた。

「マザーの話を出しておいてこんなことを言うのもなんだが、お前は今追われる身なんだ。鉦山に行っても無事でいられるか…」

「…その時は、その時だ。」

カイザは踵を翻し、戸に手をかけた。

「お客さん、」

ベルが小さく音をたてる。カイザが振り返ると、マスターがグラスを洗いながら言った。

「私からも一つ、とっておきの情報がございます。」

「…いくらだ。」

カイザは一先ず戸を閉めて、マスターに向き直った。

「お代は結構。なんの根拠もない、昔話ですから。」

マスターはエプロンで手を拭いて、カイザを見た。薄暗く、蝋燭の灯りが揺らめく店内。マスターは、ゆっくりと口を開いた。

「4人の美女が神の寵愛を受け、使徒より世にも奇妙な贈り物を賜る。と、いう伝説なんですがね。」

「…聞いたことがある。使徒とは4人の精霊のことだろう。」

マスターは天井の角を見つめて、覇気なく話を続ける。

「この話は東の国よりやってきた一人の旅人が伝承したと言われています。その伝承の中に、神の寵愛を受けた者の一人に贈られたのは、死しても腐らず、永遠にその姿を留めることができる身体だという話があるのですよ。」

ミハエルを抱きかかえる腕に、力が入る。フィオールはまた

咳き込んでいた。

「嫉妬に狂う女神の目をかいくぐるため、その者たちは男の名前を冠するそうぞ。北の魔女ダンテ、東の女王ヤヒコ、南の聖母クリストフ、そして…」

クロムウェル家の墓でミハエルを掘り起こした夜を、カイザは思い出していた。満月に照らされる墓石に刻まれた、知らない男の名前。

「西の巫女、エドガー。」
「…」

カイザは微動だにせず、真っ直ぐにマスターを見つめる。静かな店内で、カイザの心臓だけは大きく鼓動していた。まさか、まさかミハエルが…

「な、なあ…」

フィオールが恐る恐る、固まっているカイザに話しかけた。

「その死体、名前は？」
「…」

フィオールは仮にも情報屋。ミハエルの事を話したとしてどこへ繋がっていくかわからない。クロムウェル家に彼女を連れ出したことを知られるのも、まずい気がした。

「…彼女の名前はミハエルだ。じゃあ、失礼する。」

ベルが鳴り響き、カイザは店から去って行った。店内に残された二人は何を話すわけでもない。ただ、先程目の前にした死体について、考えていた。

「マスター、どう思う。」

フィオールは酒を一口飲んで、マスターに問いかけた。マスターは煙草に火をつけ、怪しげに笑う。

「ありゃあ、十中八九、エドガーですよ。」

「でもあいつはミハエルだと言っていたじゃないか。」

「あの男性の顔、私の話に心当たりがあるようでしたよ？ミハエルと言う名前はハッターで、墓石にはきつとエドガーと書かれていたんでしょう。」

マスターは煙を吐きながら、クツクツと喉元で笑った。フィオールには何が面白いのかさっぱりわからない。

「クロムウエル家の墓に、エドガーがねえ。こりゃあ近々、大きな嵐がくるやもしれません。」

「…その伝承について、詳しく教えてくれないか。」

フィオールは身体を乗り出し、マスターに真剣な眼差しを向ける。

「東楔神話ですか？今じゃ殆ど知っている人もいない寂れた民間伝承だ。知ったところで…」

「頼む。」

フィオールもまた、決意していた。クロムウエル家から誘拐

された盗賊カイザ、彼のものと思われた墓に埋められていた謎の美女。情報屋の自分でも知らない、未知の世界がそこに広がっているような気がしてならなかったのだ。これを追わずして、アイダーの情報屋は語れ無い。それに…

「…あなたもお人好しだ。あの男性がそんなに心配ですか。」

マスターはカウンターを出て、店の前に出している看板を下げた。

「あいつがどう思っているかは知らねえが…俺にとっては弟みたいなもんなんだよ。」

フィオールはふつと小さく鼻で笑い、酒を煽る。マスターは酒瓶片手にフィオールの隣に座った。

「店終いもしましたし、ゆっくりお聞かせしましょうかねえ。」

「…ありがとう。」

「ただし、ここからは有料。この情報は高くつきますよ?。」

マスターがそう言うと、フィオールは鞆から札束を取り出し、カウンターに置いた。

「釣りはいらねえ。」

夜は更けた。音楽一つ流れない煙たいカウンターで二人は視線を交え、堪らずに笑いだした。

「…毎度。」

3・思い出という枕で恋という夢を見る

それは2人が出会ってちょうど一年経った日の事。

「…あら、今日は遅かったじゃない、」

夜空を見上げるミハエルが、森から現れたカイザに気付いた。
カイザは何やら浮かない顔をしている。

「どうかしたの？」

ミハエルはカイザに歩み寄り、目の前にしゃがんだ。

「…今日、ハウルの街を出る。」

カイザは俯いたまま、ボソリと呟いた。ミハエルが彼の手を握ると、彼はポロポロと静かに涙を流した。

「…寂しくなるわね。」

「ミハエル…俺に、ミハエルの死を見守らせてよ。」

「…」

「俺も墓守になりたいんだよ。お願い。」

こんな事を言っても…

「駄目よ。」

と、断られるとわかっていた。カイザは嗚咽して彼女に抱き

ついた。彼女も優しく、彼をその両腕で包み込む。

「あなたはもつと光で溢れたところに住みなさい。沢山の仲間に囲まれて、笑顔と、優しさに満たされて……」

「盗賊の俺が光で溢れるところになんか行けないよ！ミハエルがいれば、もう何もいらぬのに！」

彼女は身体を離して両手で顔を覆って泣く彼をじっと見つめた。

「行けるわ、あなたは。カイザ、」

「……行きたくないよ、ミハエルが、いないのなら……」

聞き分けの悪いことは自覚していた。彼女を困らせてしまうことも。それでも、溢れる涙は止まらないのだ。

ミハエルはネクレスを外してカイザの首にかけた。カイザがそれに気付いて顔を上げると、彼女はいつものように微笑んでいた。

「……これ、」

「あげる。」

「でも、これ大事な鍵だって言ってたじゃないか。」

カイザは我儘を言い過ぎたかと後悔し始めた。ミハエルは目を細くして鍵を握り締めた。

「実はね、もう一つ鍵は存在するの。私の家に大事に保管してあるわ。これからは、このお揃いの鍵が私とあなたを繋ぐ絆になる。」

「……絆？」

「そうよ。だから、いつか必ずまた会える。私達は繋がっているの

だから。」

カイザは唇を噛み締めてミハエルを見つめた。彼女はにっこり笑って、鍵からスルリと手を離す。

「…カイザ？どんなに離れても、時を経ても、私はあなたを愛してる。」

カイザは驚いた。

「あなたは、一人じゃないからね？」

優しい笑顔を浮かべるミハエルの頬を、煌めく雫が伝っていたから。

カイザは再び彼女に抱きついて泣いた。彼女も、彼をきつく抱きしめた。

自分も愛している、と、言葉にできないままに、夜の墓地で出会った二人は夜の墓地で別れたのだ。またいつか、必ず会おうと約束をして。

—————

カイザはアイダの町を出てカトリーナへ向かっていた。マザー・クリストフがいるリノア鉱山はカトリーナより遙か東南に位置する。行きしなに立ち寄り、盗まれた宝物を探そうというのだ。宝物を見つけられなかったとしても、食料も底を尽きかけている。カトリーナに寄らざるを得なかった。

ミハエルを連れ出して約二週間。当たり前だが、彼女は一度たりとも目を覚まさない。食事もしない。一緒にいればいる程、力

イザはその背中の重みをもって彼女の死をひしひしと感じていた。彼女の声も、笑顔も、温もりも、思い出になっちゃったことは悲しい。しかし彼の心は仄かに満たされていた。彼女がいる、それだけで。もしかしたら、彼女が腐り果てても彼は彼女を抱きしめて離さなかったかもしれない。彼女の墓を暴くという約束、いつか必ず再会しようという約束…考えていたものとは違っていても、全てがあの夜に果たされたのだから。

そんな彼の中で一抹の不安が頭を過る。酒場で聞いた美女の伝説のことだ。もし本当なら、ミハエルは神の寵愛を受けた一人だということになる。

――私はあなたを愛してる――

あの言葉を神とやらにも囁いていたのかと思うと…腑が煮え繰り返りそうになる。カイザは考えるのを止めた。そんな昔話の真偽など、気にしたところで確かめようもないと思ったからだ。

不安と喜びが入り混じる道中を、彼は目的のため一向に歩き続けていた。そんな時…

「ちょっと待ちな！その若造！」

見渡す限り灰色の岩が転がる傾斜の激しい山道で、カイザは呼び止められた。振り返ると、そこには一人の少女がいた。艶やかな褐色の肌に生意気そうに釣り上がる黄金色の瞳の目。ミハエルの柔らかな黒髪とは違う印象を持つ、肩まで伸びた芯の強い漆黒の髪。

「…どう見ても、お前の方が若そうだが？」

「山賊に出くわして悲鳴も上げないなんて、生意気なガキだな。」

少女は不機嫌そうにカイザを睨む。

「そうか、その装束…鉾山の。」

「そう、あたしはマザー・クリストフ率いる山賊の一味！第一区監査官ローザだ！」

金のブレスレットに金の首飾り。南国を思わせる衣服が褐色の肌によく映える。

「その背中にしょってんのは死体だろ？だったら一緒に埋める供え物も持つてるだろう。命が惜しけりゃさっさと渡しな。」

「悪いが、そんなものはない。ついでに、お前に構っている暇もない。」

カイザはローザと名乗る少女に背を向けた。

「宝物の有無はあたしが確かめるんだ。お前に選択の余地などない。」

背を向けたはずが、何時の間にか少女は目の前で刃物をカイザに突き付けている。鉾山の監査官の名も、だてではないらしい。カイザは大きく飛躍して後退し、ミハエルを降ろした。そして、ナイフを手にする。

「お？やる気か小僧ー。」

「用があるのはマザー・クリストフだけだ。用のない奴は邪魔なだけだからな。」

ローザは不思議そうな顔をした。

「マザーに用事？死体運びのお前が？」

「話す義理はない。」

「一味のあたしに何かあれば、マザーも黙ってないぞ？」
「バレなければいい話だ、バレなければ。」

カイザは一瞬で終わらすつもりだった。しかし、

「ローザさん！ここにいたんですか！」

振り返ると、男が数人、息を切らしながら立っていた。そのうち先頭に立つ一人の男はローザと同じ装束、同じ黒髪、同じ瞳をしていた。

「ガトー、こいつ狩るぞ。」

加勢：カイザは舌打ちをしてナイフをしまい、ミハエルを抱き起こした。

「あ、待て！」

カイザが逃げると、ローザは後を追いかけてきた。

少女一人ならまだしも、多勢を相手にして1人でも始末し損ねればマザーとの対面も叶わなくなる。面倒を起こすわけにはいかなかった。

「待てって言うてるだろ！」

背後からローザに蹴り飛ばされ、カイザはつんのめる。転倒したが、身を呈してミハエルを庇った。刃物をクルクルと回しながらローザが二人に歩み寄る。

「そんなに大事か、その死体。」
「…」

カイザは再びナイフを構えた。

「そんな大事な死体ならさぞかし価値のあるお宝が…」

ローザは、歩み寄る足を止めた。表情も固まり、一点を凝視している。カイザはその様子に気付いた。

「…お前、そのナイフ。」

ローザはゆっくりと、一歩踏み出した。

「ローザさん！」

追いつかれた。もう、やるしかない。カイザはナイフを握り、ローザを睨んだ。

「大丈夫ですか？」

「こいつは俺たちが始末しておきますから、ガトーさんと先に…」
「いや、いい。」

ローザは刃物をしまい、カイザの目の前にどっかりと胡座をかいた。カイザはミハエルをきつく抱き寄せ、ナイフをローザに向けた。ローザは、真っ直ぐにカイザを見据える。

「お前、ギールんとこの盗賊だな？」

カイザはその言葉にはっとして自分が握るナイフに目をやっ

た。ギールとは、カイザが殺したマスターの名だ。そして、このナイフは…

「それ、ギールのナイフだよな。」

盗賊になって数年経った頃にマスターから譲り受けたものだった。

「…」

「ふーん、そういうこと。」

一人で何か納得している少女をよそに、カイザはナイフを見つめていた。鋭く輝く鉛色の刃、盗賊団の象徴であった鷹の刺繍が施された柄に埋め込まれた、黒光りする宝玉。このナイフがなんだというのだ…そう言わんばかりに彼の表情は疑問に満ちていた。

「…お前、カイザか。」

カイザは名前を呼ばれ、ローザを見た。先程までの幼さはどこへやら、異様な威圧感を発しながら彼を見つめている。

「カイザって…ギールを殺した?!」

「バンディが探してるっていう…」

話を聞いていた男達が武器を手にしてカイザを睨む。

「やめてください！ほら、しまつて！」

ガトーがおろおろと宥めようとする。

「やめろお前ら！」

ローザの一言で、男達は硬直して顔を見合わせる。そして渋々武器をしまった。

「…確かお前、マザーに用があるんだったな。あたしが謁見を取り持ってやるよ。」

ローザはそう言ってニヤリと笑った。カイザはまだ、ナイフを突き付けていた。

「…何を考えている。」

カイザの問いかけにローザは答えようとしない。ローザは振り返って男達に言った。

「こいつには手を出すなよ。ことによっちゃあマザーがヒステリー起こすかもしれないからな。」

ローザは立ち上がり、カイザに手を差し伸べた。

「ほら、行くぞ。リノアへ向かってるんだろ？」

「…」

カイザは少し眉を寄せてナイフをしまい、ローザの手をとった。小さくまだ幼さが残る手をした少女だが、山賊の中ではかなりの有権者のようだ。少女が何を思って刃を収めたのかはわからないが…目的のためには敵にするより、味方にした方が得策だと考えた。

「そういうことだ、お前ら、わかったな？」

ガトーという男以外は何やら不満そうだ。”そういうことだ”と言われても、その場にいた何人が話を理解できていただろう。いや、少女以外何一つ流れを掴めずにいた。

盗賊に追われる身の、死体を背負った一人の男。何かを知っている風な、山賊幹部の少女。

「改めまして…だな、あたしはローザ。」

少女は顎をツンと上に向けて見下すように生意気な笑顔を浮かべた。

「…カイザだ。」

カイザは視線を外して小さく挨拶をした。まだ、この少女を信用できないようだ。

「さて…その死体は何処に運ぶんだ？さつさと荷をおろしてリノアへ行くぞ。」

ローザがミハエルをじっと見つめる。カイザは思わず彼女を背中に隠した。

「ミ…彼女は…リノアの向こうの…」

「は？！リノアの向こう？！こんな真夏にか？！」

ローザは驚いた顔をして声を荒げた。

「お前…殺した人間をせめて故郷に戻してやりたいってんだろぅが…それは幾らなんでも無理だろ。腐っちまう。」

「別に、俺が殺したわけじゃない。」

そういえば、彼女は何故死んだのだろう…ミハエルを背負いながら、カイザはふと疑問に思った。

「そういう問題じゃなくてだな…ったく、おい、誰か背負うの代わってやれ。」

「いや、いい。」

「なんで。」

ローザは既に面倒くさそうだ。

なんと言えいいのか、カイザは必死に考えていた。彼女を誰にも触らせたくない、なんて言えない。

「…」

気が付くと、ローザが布からはみ出たミハエルの腕を見つめている。カイザは慌ててそれを隠した。

「…それに、同行は不要だ。俺はカトリーナにも用がある。先にリノアへ行ってマザーに俺の事を伝えておいてくれないか？」

「カトリーナって、お前…本当に腐っちまうぞ、”それ”。」

腐らないから大丈夫、とも言えない。言葉を詰まらせる彼に、ローザはすっかり飽き果てている。

「我儘な奴だな…わかったよ。カトリーナに寄ればいい。だが、あたしとガトーも同行する。」

「いや、それは…」

「勘違いするなよ。」

ローザがきつく目を吊り上げて、ずっとカイザに顔を近付けた。カイザは驚いて軽く身を引いてしまう。

「別に仲良しこよししようってわけじゃない。盗賊共はお前の首に多額の賞金をかけてる。リノアでマザーが手土産の封を開けた時、お前の運命は決まるんだ。」

ローザがカイザの胸元に人差し指を突き立てる。

「…手土産か、俺が。」

「そうだ。つまり、あたしとガトーはお前がちゃんとリノアへ行きつくように見張るんだよ。せつかく獲た手土産が逃げたり、とって食われたりしたら癪だからな。」

ローザに釘を刺さされ、カイザは笑った。

「だったら最初からそう言えよ。」

「…？」

ローザはカイザを睨む。

「そう言われた方が、まだお前を信用できる。」

何を考えているかわからない無償の善意より、利を優先した悪意で人を測る。カイザはそういう場所で生きてきた。そんな彼女にとって、今背負っている彼女は夢の中の存在に近い。彼女以外が彼の現実であり、それは悪意の駆け引きで成り立っているのだ。

「…寂しい奴だな、お前。」

ローザの哀れんだ瞳にカイザは全く気付かない。いや、興味を示さない。彼はミハエルを掘り起こしたその瞬間から、夢の為だけに現実を生きると決意していたのだ。死ぬまでの束の間を、彼女の為だけに。

4・傍観者である少女はまだ何も語らない

「いい加減、話したらどうだ。」

カトリーナの宿屋の一室で、不機嫌そうに机に頬杖をつくローザ。カイザはと言うと、ミハエルに白い布を被せて出かける準備をしていた。

「カトリーナに着いてもう5日だというのに…腐りもしない、臭いもしない。」

「…」

「目覚めることもないのに、硬直もしていない。」

カイザの手がピクリと止まる。ローザは口を尖らせて窓の外を見下ろしていた。

「…触ったのか、ミハエルに。」

「ミハエルっていうのか、その女。」

カイザもわかっていた。いつまでも隠し通せるわけがない、と。

「…お前には話さない。」

「マザーには話すのか。」

カイザはミハエルを背負い、立ち上がる。窓際のローザを横目に見て、言った。

「お前こそ、なんのつもりだ。」

ローザは煙管を取り出して机に広げて、カイザには目もくれない。

「思えば、マザーへの手土産にしたいのなら力強くでも連れていけばよかっただろ。」

「だーかーらー、勘違いすんなって。」

朝の日差しが差し込む六畳程の狭い部屋。外からは賑やかな市のざわめきが聞こえてくる。

「お前の処遇はマザーが決める。お前がマザーに気に入られた時のための保険だ、保険。」

「噂じゃ、マザーは高慢知己な金の亡者らしいじゃないか。だつたら気に入られる心配なんて、する必要はなさそうだけだな。」

ローザは首だけで振り向き、カイザを睨んだ。そして、はあ、と疲弊感漂う溜息をついた。

「会ったこともないくせに、よく言う。」

ローザは煙管に火を焚き、大きく煙を吸い上げた。

「聞いた話を鵜呑みにするより、自分の目で見て物事を見極めろ。お前はとも耳や頭に頼り切っているようだ。」

「…わかった風な口をきくな。」

カイザはローザに背を向け、部屋を出た。

「…いつまでカトリーナに留まるおつもりですか？」

「あいつの気が済むまでだ。」

ローザは外に向かって煙を吐いた。窓の外では煙を払う手がパタパタと動く。

「死体のこと、調べておきましょうか。」

「いや、いい。」

窓から灰皿を持つ手が伸びる。ローザはそれに煙管を軽く叩きつけた。

「手土産の封を切るのは、マザーの奥宮に入ってからでも遅くないだろ。それよりあいつのこと、見張っておけよ？」

「はい。」

窓から顔を出し、ガトーは軽く頭を下げた。そして、机に灰皿を置いて屋根伝いに去って行った。

「…腐らないなら、急ぐ必要もないわけだ。」

ローザは一人、晴れ渡る空へ消えゆく煙を見つめながら笑った。

「…なあ、エドガー。」

煙は窓枠をするする抜けて、立ち昇る。

「クロムウエル家の墓から掘り出された一品？」

「そうだ、ここへ流れてないか。」

ざわめく市場から外れた、日の当たらない細い路地。ひんやりとした空気が石の壁をさらに冷たくする。

「そんなもん流れてきたら噂にもなるだろ。他所からも買い手がカトリーナに集まって、即日完売だろうけどな。」

「…そうか。」

怪しげな硝子瓶を棚に並べる店主は、カイザの背負うミハエルに目をやった。

「なあ、死体運んでんのか兄ちゃん。」

店を出ようとするカイザは足を止め、小さく頷いた。

「だったらよ、その角曲がったところにある薬屋に行きな。」

「…」

「髪やなんかが高値で売れるぞ？」

カイザは返事もせず、店を出た。ここはそういう場所だ。

誰かの物売って、金にする。目に映る商品の陰には、必ず泣いている者がいる。活気ある華やかなこの街は、誰かの涙なくして存在できない。ミハエルを背負う今になって、カイザはこの街が憎たらしくて仕方がない。思い出すら金に変わるこの街で、自分が幾度となく金を手にした過去も、情けなくて仕方がない。炎天下の市場も、涼しい路地裏も…何処にいても、不愉快だった。

「予定変更です。」

俯く顔をあげると、目の前にガトーがいた。

「…お前、今まで何処にいたんだ。」

「俺の事は気にならさらないでください。用事は済みましたか？」

ローザと同じ黄金色の瞳がカイザを見つめる。容姿は似ているが、ガトーは物腰柔らかな青年だ。

「…そうだな。済んだよ。」

これだけ粘っても見つからないのなら、売りに出されていないのだろうと、カイザは見切りをつけた。

「そうですか、では…」

ガトーはカイザの腕を掴み、走り出した。人混みを勢いよく縫って駆け抜ける二人。

「な、なんだよ！」

ガトーは何も答えない。気が付くと、カトリーナの門まで来ていた。そこには馬に乗るローザがいた。

「急げ！」

「どうしたんだよ！」

ローザは馬から飛び降りてカイザからミハエルを強引に引き剥がした。

「なっ…」

「捨てたりしねえよ！お前はガトーの後ろに乗れ！」

ローザはミハエルを自分の前に跨らせ、身体を紐で縛り付ける。

「早くしろ！」

「…絶対に落とすなよ。」

カイザは言われるがまま渋々ガトーの後ろに乗った。そして、3人…いや4人は慌ただしくカトリーナを出発した。

「ローザさん、死体なら俺が…」

岩山を駆け抜けながら、ガトーが申し訳なさそうに言った。

「いいんだよ。カイザだって、男のお前より女のあたしの方が安心だろうよ。」

ローザの言葉に、カイザの身体が一気に熱を帯びた。弁解しようとしたが、不敵に笑うローザを見て、言葉は引っ込んでしまう。

「…それより、何があつたんだよ。」

耳まで広がる熱をそのままに、カイザは話を変えた。いや、これこそ本題だったわけだが。ローザは真剣な面持ちで前に向き直った。

「バンディがカトリーナに来たそうだ。」

「まさか、俺のことを追って…？」

「あつてるようなあつてないような。」
「なんだよ、それ。」

カイザは腑に落ちない様子でローザを見つめるが、少女は真つ直ぐに前を見据えたまま。

寝る前も惜しんで馬を走らせ、約5日。炎天下の中、四人はリノア鉱山へ辿り着いた。山間から高々と伸びる煙突からは黒い煙が立ち上り、空は灰色に染まっている。巨大な鉄の門の前で、四人は馬から降りた。

「ほらよ、」

ローザはカイザにミハエルを手渡す。カイザは彼女を受け取り、門を見上げた。

「でかいな。」
「国一番の山賊が牛耳る発掘場だからな。中也城の要塞みたいなものだ。」

見上げていると、門が重々しい音をたてながらゆっくりと開き始めた。

「ようこそ、リノア鉱山へ。」

この時、カイザは初めて少女を恐ろしいと思った。開こうとする門の前でこちらを振り返り、黄金色の目でこちらを見据えて笑いかけるローザ。黒い山を背負う少女と、死体を背負う自分の差を思い知ってしまった。少女の言うとおり、彼は自分の目で事を見極

め、畏怖したのだ。

「何度言わせるんだ！ここに死体運びの男が来る！俺はそいつの知り合いだ！」

聞き覚えのある声に、カイザはやっと門の中へ目を向けた。ローザも眉をひそめて声の方を見る。

「どうかしましたか？」

ガトーが声を聞きつけ、歩み寄る。

「あ！ガトー！お前じゃねえと話にならねえよ！なんとか言ってくれ！」

門が開ききると、中の様子がよく見えた。発掘した鉱石を運ぶための馬小屋に、トロツコ。その少し向こうに並ぶ平屋の黒い屋敷と白い屋敷、その向こうにそびえるリノア鉱山。そして、門番に足止めされている見覚えある後姿。

「…フィオール？」

カイザが近付くと、後姿の主は勢いよく振り向いた。

「カイザ！ほら、こいつだよ！」

フィオールはカイザのウデを掴んで引き寄せ、門番に訴えかける。

「相変わらず騒がしいな。」

ローザがうんざりした顔をしながらフィオールに言った。

「ローザ！お前からも頼んでくれないか！カイザと俺を、マザー・クリストフに会わせてくれって！」

フィオールの言葉に皆が驚いた顔をする。

「ふざけるな！マザーがいらっしゃる白の屋敷は男子禁制だ！」

「それ以前に、マザーの御姿を見ることは何人たりとも許されていない！」

門番の二人がフィオールに喰いかかる。しかし、フィオールは引き下がらない。

「俺はローザに頼んでんだ！てめえらはすっこんでろ！」

フィオールはローザに向き直り、細い肩を力強く掴んだ。

「頼む！ローザ！」

真剣な眼差しでローザに向けるフィオール。少女の肩を掴む手は、微かに震えていた。カイザはそれを呆然として見ていた。何故、彼がここにいるのか。何故、こんなにも必死なのか。わからなかったからだ。

ミハエルの死因、クロムウェル家の墓に入っていた理由、盗まれた宝物の行方、エドガーの謎：積る疑問が何一つ解消されないまま、何かが大きくうねりながら動いている気がした。そして、自分がそのうねりに取り残されているような。

「…いいだろう。お前ら二人、マザーに会わせてやる。」
「ローザ！」

門番がローザを怒鳴りつける。

「勝手にそんな口約束をするな！いくらお前が監査官でも許されない！こんな下賤な奴らを謁見させるなんて、マザーへの侮辱だ！」
「黙れ！」

ローザが門番の胸倉を掴んで捻り上げた。少女とは思えない剣幕と、腕力。カイザとフィオールは驚きのあまり声が出ない。

「お前にこいつらの何がわかる。」

首が締めまり、苦しそうにする門番。

「ローザさん、そのくらいで…」

ガトーに止められ、ローザは不満気に門番を離した。門番はその場に蹲り、ゲホゲホと咳き込んだ。

「…ま、あたしもよくわからないんだけどな。」

片眉を吊り上げて門番を見下ろし、ローザは白い屋敷に向かって歩き出した。

「ガトー、とりあえずあたしはマザーのところに行くから後はよろしく。」

白い屋敷へ向かって去ってゆく少女。彼女が何故自分をマザ

ーと会わせようとしてくれるのか、マザー・クリストフとは何者なのか…少女の背中は、何も語らない。

5・善意と悪意の計りは壊れやすい

東の国からやってきた一人の旅人がいた。彼は諸国行脚し、伝説を語り広めた。雲の上にて気まぐれに開かれる宴に男の名を冠する四人の美女が招かれた、と。

北の魔女ダンテ、煙の塔に住まうその愛らしさをもって神の酌子を担う。溢れる愛が目に見えるようにと、心が見える目を授かる。

東の女王ヤヒコ、国を統べるその知力をもって神の声を聞く。穏やかな愛の囁きが聞こえるようにと、未来を聴く耳を授かる。

南の聖母クリストフ、人々に畏られるその力をもって神と快楽を共有する。激しい愛をその身で感じられるようにと、思いのままに動く手足を授かる。

西の巫女エドガー、俗世を捨てたその清き美しさをもって神に癒しを与える。切ない愛をその心に留めておけるようにと、永遠に朽ちぬ身体を授かる。

地上へ降りる際、四人はそれぞれ鍵を賜る。その鍵は天の宴を開く。そして、四人に一つの鍵を賜る。それは美女達のために神が用意した一室へ繋がっている。

純粋なダンテが開けば思い描くものを湧き出す泉がある部屋へ出る。気高きヤヒコが開けば世界の真実を語る花が咲く部屋へ出る。寛大なクリストフが開けば富を絶やさぬ宝石が眠る部屋へ出る。

しかし、謙虚なエドガーの望みだけは神であれど察することができず、望みに叶う部屋を用意できなかった。そこで、望みができた時いつでもそれを手にできるよう、彼女の部屋には望みを一つだけ叶える木が植えられた。

美女の一人が死せる時、鍵を巡りて世は乱れる。世界の秩序は崩壊し、終結したらば裏と表が一つに溶け合う。

伝説を語る旅人は正体も明らかにならぬままに行方をくらました。

「…これが、伝説の内容だ。」

黒い石造りの客室で、フィオールが資料を読み明かした。カイザは目を泳がせている。

窓際で茶を飲みながら二人は向かい合う。

「俺が何でここへ来たのか、だけどな…」

フィオールは資料をテーブルに置いて茶が入ったカップを手にした。

「マザーが伝説のクリストフなのかを確かめるためだ。」

「マザーが？」

アイダの酒場で聞いた伝説にクリストフの名があったことにカイザは気付いていた。しかし、それがリノア鉱山のマザーであるとは心にも思っていなかった。伝説自体、信じきれずにいたのだから当然と言えば当然だ。そんな困惑しているカイザに、フィオールはカップを見つめたまま頷いた。

「80歳の婆さんで、醜い金の亡者だって聞いたぞ。美女だなんて

話は……」

「噂だろ。俺達は実際に見たわけじゃない。この世で彼女の姿を目にしたことがあるのは、お前が一緒にいた二人だけなんだからな。」
「……ローザとガトーか。」

フィオールは茶を飲んでからやつと視線を上げ、カイザを見た。

「それより、お前が背負ってた死体……エドガーなんだろ。」

伝説が本当なら、きっとミハエルはそのエドガーという人物にあたるのdarou。腐らない身体、墓石の名前、思い出の鍵……怖いくらいに当てはまる。それでもまだ信じられずにいたのは、本当は信じたくなかったからなのだ。ミハエルが誰かに愛され、それに応えていたなんて。引つ掛かっていた不安が、現実としてカイザに迫ろうとしていた。カイザは、口を一文字にして黙り込んでしまう。

「……答えられない、か。」

答えたくなかったただけだ。カイザはアイダーの情報屋フィオールが提示する情報から、目を背けた。

「まあいい。マザーと話せば全て明らかになるはずだ。」

「……でも、何で根拠もない昔話のことなんて調べてるんだよ。」

「……」

フィオールは再び俯いた。

「……まさか、ミハエルを見てエドガーだと確信したから……鍵を狙ってんのか？」

カイザの言葉に、フィオールは顔を上げた。カイザは眉をひそめて睨みつけている。

「望みを一つだけ叶える木がある部屋に繋がる鍵…それ、狙ってんのか。」

「違う！」

フィオールは声を荒げてテーブルを叩いた。カイザは表情も変えずに、睨んだままだ。フィオールは握った拳を震わせて、舌打ちをした。

「鍵には興味ない。ただ…」

フィオールは寢床に横たわるミハエルを見た。遠くから見れば、ますます眠っているようにしか見えない、安らかな寝顔。カイザの疑いの眼差しに、フィオールは悲しそうな顔をして俯いた。

「…お前のためだ。」

フィオールは額を抑えて溜息をついた。

「ギール…お前のマスターにも頼まれてたんだ。カイザに何かあったら、力になるように。」

フィオールの手は、やはり震えている。カイザは彼の気持ちがいかならない。いや、これまでも他人の気持ちを知らうとしたことなどない。唯一、理解したいと思えた相手がミハエルだった。幼少から仲良くしていたとはいえ、カイザにとってフィオールは盗賊の一団となんら変わらない、悪意の駆け引き相手でしかなかった。フ

イオールにとっては、違っただけれど。

「…俺には、弟がいたんだ。」

震えが止み、声は落ち着きを取り戻す。

「賢くて、素直ないい弟だったよ。」

「…死んだ、のか。」

人の気持ちに鈍感なカイザだが、痛みには敏感だ。俯くフィオールを見つめる最中、脳裏を疑いと哀れみが交差する。

「殺された。俺に恨みを持つ奴に目をつけられたらしくてな…」

フィオールは涙目で薄く笑った。

「無力な自分を憎んだよ。弟一人守れない…そんな俺に、ギールは言ったのさ。クロムウェル家からさらってきた餓鬼に、よくしてやってくれ、ってな。盗賊のボスに言われて仕方なしに会ってみれば…死んだ弟と同じ年の生意気そうな餓鬼ときた。」

「…弟と俺を重ねているのか。」

「…悪いかよ。お前の成長を見るのが楽しみになって、お前が危険に晒されれば心配になって。悪いかよ。」

フィオールは自嘲するような笑みを浮かべる。カイザは、自分を弟のように思ってくれていたことを嬉しくも思ったが…やはり心のどこかでは彼を疑っていた。今は心配してくれていても、いつか、裏切られるのではないかと。

「お前が盗賊に追われているくらいなら、別によかった。身を隠す

なら俺のツテでなんともなるからな。でも、エドガーに関わっていうなら話は別だ。混乱をもたらす美女…そんなのにお前を関わらせたくないんだが…」

フィオールは俯いたまま、カイザを見た。

「その様子からして、死体を手放す気はないんだろ？」

カイザはフィオールの眼差しを、しっかりと受け止めて頷いた。

「そうだろうと思って、根拠のない昔話でも一応調べておいたんだが…お前も鍵が目的ってわけじゃなさそうだ。確か、墓荒らしを探している…だったな？」

「…」

何と言っているかわからず困っているカイザを、フィオールは容赦なく見つめる。

「何故だ。」

「…」

「何故墓荒らしを探している。」

「…」

「お前は、その死体とどう関係があるんだ。」

伝説、鍵、混沌…どれもカイザにとってはどうでもよかった。彼はただミハエルのために、盗まれた宝物を探しているだけだったのだから。

「…やむを得ない理由があるなら俺だって力になる。そのために俺

はお前を追ってきたんだ。だから話してくれないか。」

フィオルの真剣な眼差しは、切望する弱々しい眼差しに変わった。カイザは、重たい口を開いた。

「伝説とか、まだ信じられないし…彼女がエドガーだろうがなんだろうが、どうでもいいんだ、そんなこと。ただ…俺は、盗まれた宝物を探しているだけだ。」

突き付けられる、エドガーとミハエルの共通点にカイザはまだ強がっていた。しかしそれは、真偽がどうあれ目的は果たそうとする開き直りにも似た覚悟の表れだったのだ。

「ミハエルの死を悼む人々が彼女のためだけに埋めた宝物を…取り戻したいだけなんだ。」

カイザは、目の前のカップに視線を落とした。そこには言葉に詰まる情けない顔をした自分が映っている。

苦しかった。ミハエルのこともそうだが、フィオルの善意さえ素直に受けられないことが苦しくて、胸が痛かった。嬉しいのに、心がそれを抑制してしまう。そんな自分が弟と重ねられて優しくされてきたことも、申し訳なく思えてならない。フィオルの眼差しが、心苦しかった。

「失礼します。」

扉の向こうから、ガトーの声がした。フィオルは少し慌て気味に返事をする。ガトーは部屋に入り、軽く頭を下げた。

「謁見の御用意が整いました。」

「おー！さすがローザとガトー！」

フィオルは素早く立ち上がり、カイザの腕を引いた。カイザが見上げたフィオルは、いつものように笑っていた。

「怪しげな死体から手を引いて欲しいのは山々だけだな、お前が突き進むってんなら俺も付き合う。」

「…フィオル、」

「ほら、情けない顔するな！まずはマザーから情報収集だ。」

さつきまで泣きそうな顔をしてカイザを見つめていたはずなのに、今度は急かすようにカイザの腕を引くフィオル。

「…盗まれた宝物を見つけたら、必ず手を引くから。」

「わかったよ。」

幼少の頃、暗く荒んだカイザにいつも明るく笑いかけてくれていたフィオル。その頃は、彼の優しさにも、存在の大きさにも気付けなかった。

「…ありがとう。」

心苦しさに苛まれながらも、やっと口にできた感謝の言葉。フィオルに聞こえたかさえ怪しい声量だったが、確かに彼は感じていたのだ。人の善意と、優しさを。

二人はガトーに案内され、白い屋敷に足を踏み入れていた。平屋ののっぺりとした外観とは違い中は薄暗く、薄い石で作られた行灯が連なり異様な空気を醸し出していた。そんな屋敷の奥にある

地下へ続く階段をくだる。広く、長い、終わりも見えない階段を一向に。

カイザもフィオールも何やら落ち着かない様子だ。何故なら、中は見渡す限り女、女、女。わかつていたことはいえ、男ばかりに囲まれて生活してきた二人には未知の世界だ。

「ほ、本当に女ばかりで…なんか、怖いな。」

耐えきれず、フィオールが思っていたことをポロリと口に出した。ガトーは穏やかな笑みを浮かべて言った。

「ここは本来、マザーの身の回りの世話をする侍女だけが集められた男子禁制の聖域ですから。彼女達にしてみたら男のあなた方のほうが物珍しいと思いますよ。」

「…じゃあお前はもしかして…」

カイザの驚く声に、ガトーは首を傾げる。カイザはガトーの首飾りだけが輝く上半身を凝視した。しかし、そこにはカイザが思っているようなものは見当たらない。

「…俺は出入りが許されてるっただけで、男です。女ではありません。」

「そ、そうだよな…」

「何考えてんだよ、お前。」

フィオールがカイザの頭を小突いた。ガトーは肩を震わせてクスクスと笑っている。

穏やかで物腰柔らかな口調とは不釣り合いな、スラリと伸びた身長に筋肉質な上半身。行灯に照らされた褐色の広くたくましい背中、男の色気で艶めいている。こんな奴が女だったら、自分は男

をやめたくなる…そう、カイザは考えていた。

「ガトーが女だったら、俺は男やめるね。」

フィオールも同じことを考えていた。

暫く歩いていると、階段が終わり広い場所へ出た。そこには大きな扉以外、何も見当たらない。

「ここは、俺だけが立ちいることを許された一室…」

ガトーはその扉をゆっくりと開く。

「奥宮です。」

薄暗く、広い室内には香の煙が立ち込めている。その向こうの御簾には、人影が揺らめいていた。怪しげな雰囲気部屋の前で、二人は立ち尽くす。

「あれが、マザー・クリストフ…」

フィオールが小さく呟いて目の前の影を改めて認識する。カイザはゴクリと唾を飲み込み、影を見据えていた。

「どうぞ、お入りください。」

ガトーに促され、二人は部屋に足を踏み入れた。緊張気味に奥へ進み、御簾の前に並べられた台座に腰をかける。カイザはミハエルをおろし、隣に座らせた。

「…おい、カイザ。お前聞きたいことあんだろ。」

フィオールが小声で話しかけた。カイザはフィオールを横目に睨んだ。

「フィオールだって…」

「お前が先に聞けよ！」

二人が言い争っていると、御簾の向こうから笑い声がした。二人はピタリと言い合いを止め、笑って震える影を見つめた。

「どっちだっていいだろ、待つのは嫌いなんだ。」

ゆつくりと、褐色の細い指が御簾を捲り上げる。艶かしく台座に伸びる足、曲線美を描くくびれた腰、首飾りが谷間に埋まる豊かな胸、そして…

「…は？」

御簾が上がりきり、フィオールはガトーを見た。ガトーはにつこりと笑っている。カイザは開いた口が塞がらない。

「あたしが、マザー・クリストフだ。」

芯の強い漆黒の髪に、強気そうに吊り上がる黄金色の瞳をした目。

「…ローザが、マザー？」

フィオールが震える指で台座に座るローザを指差す。少女は驚く二人を楽しそうに見つめて扇を広げた。

「さて…手土産の封を、破ろうか。」

6・燃り合せば一本の系になる

朝。鳥達が目覚めの挨拶を交わし、木漏れ日が足元を白く照らし出す森の中。暇ができたカイザはミハエルを訪ねて墓地へ走っていた。まだ、カイザがハウルを離れる前のこと。

墓地に出ると、カイザは彼女の姿を探した。日の光を反射してキラキラと光る墓石。枯れかけた花が秋の訪れを感じさせる。いつもなら、それらを摘み取っているミハエルがいるはずなのだが：彼女の姿はない。彼は少し予感していたのだ。普段夜中に墓の手入れをしている彼女だ、朝や昼はノースの家にいるのではないかと。仕方がなく、帰ることにした。

「カイザ！」

振り返ると、膝に手をついて荒い息を整えるミハエルがいた。

「…ミハエル、」

「今日は、早くから会いに来てくれたのね。」

肩で息をしながら、優しく笑う彼女。カイザはいてもたってもいられなくなり、彼女に駆け寄って抱きついた。

「ごめんね…夜しか墓場へ来ないものだから。待った？」

ミハエルは彼の頭を撫でた。

「今、来たところ。でもなんで朝なのに墓地へ？」

見上げると、彼女は少し困った笑顔で言った。

「…あなたが、いると思ったから。」

どうしてそう思ったのか、気にならなかったわけではない。しかし、カイザは彼女がわざわざ来てくれたことが嬉しくて堪らなかった。彼女の服を握る小さな手が、ぎゅうと丸くなる。

「今日はずっと暇なの？」

「夜から、少し用事がある。」

「そう、じゃあそれまでうちでゆっくりして行くといいわ。ノースの町も案内してあげる。」

「…俺、」

カイザは俯きながら、ボソボソと呟く。

「ミハエルの料理。食べたい…」

いつかの夜に交わした約束。幼くして家族を失った彼にとっては、すでに憧れに近い約束になっていた。一度でいいから家族と食事を…そんな、ささやかな願い。

「…そういえば、ご馳走する約束してたわね。」

ミハエルはカイザの手を取り、歩き出した。

「じゃあ今日は…ノースの町を案内するついでに買い出しして、夕方には一緒にごはん食べましょうか。」

「…」

「ね？」

ミハエルと共に過ごす白昼。日の下で会うのも初めて、一緒に墓地以外へ行くのも初めて。カイザのささやかな願いが大きな喜びとなって現実となる。

「最初はどこに行こうかしら…」

「俺、ノースのおつきい橋見たい！」

「カリオス橋？見るだけじゃなくって渡れるわよ？」

「本当に?!」

手を繋いで墓地を去る二人。どこからどう見ても仲睦まじい姉弟であった。そんな二人は、ただ互いの心の隙間を埋め合う。時間を共有し、失った物を取り戻そうとしたのだ。爽やかな朝の、帰り道に。

――――

「で？聞きたいことがあったんだろ？」

鼻で笑いながらクリストフは扇を仰ぐ。そんな少女をあっけらかんとして見つめるフィオール。その隣で、カイザは膝の上に置いた拳を強く握り締める。

「…俺が運んでいる死体と一緒に埋められたはずの宝物が盗まれた。それを探している。」

「へえー、」

クリストフの顔から笑顔が消えた。

「彼女は5年前に建てられたクロムウェル家の墓に入っていた。クロムウェル家の財宝なら噂になってもいいところだが…フィオール

も知らない、カトリーナにもないとなると、まだ墓荒らしが所有している可能性が高い。」

「そいつの行方を知りたくてここへ来た…と。」

クリストフの表情は至って真剣。カイザは少女の言葉に頷いてみせた。

「…クロムウエル家の情報は全て握っていると聞く。頼む、何でもいい。ささいなことでもいいから…教えてくれ。」

カイザは深々とクリストフに頭を下げた。クリストフは鼻から大きく息を吐き、扇を畳んだ。

「お前、何か大変なことに首を突っ込もうとしてないか？」

カイザが顔を上げると、クリストフは眉をひそめて煙管に手を伸ばしていた。フィオールはその開けっ放しだった口を閉じ、真剣な表情で二人の話に耳を傾ける。

「手掛りがない…わけでもない。」

煙を吐き出しながらクリストフは言った。カイザは身を乗り出し、目を輝かせた。墓荒らしの尻尾を掴んだ、と。

「本当か?!」

「その盗まれた宝物ってのは、人の首の太さ程ある金の輪じゃなかったか？」

カイザの脳裏で、輪が収まっていたと思われる跡が残った宝物箱の記憶が鮮明に蘇った。

「…って、聞いてもわかるわけないか。それに、何でお前の墓なんかに入ってたんだかも…」

「何で、そのことを…」

カイザの表情が一変する。口から煙を吐き出しながら悩ましげに頭を掻く少女。

「墓に入っていた宝物のことばかりか、墓が俺の物だと…俺が、クロムウエル家の人間だと…！何故知っている！」

この瞬間、カイザは奥宮にいる人間全てを疑っていた。

「…言っておくが、あたしは盗んでないぞ。」

声を荒げるカイザにしれっとした態度をとるクリストフ。カイザはフィオールを睨んだ。

「お前：俺のこと、こいつに売ったのか。」

「ち、違う！俺は言っていない！」

激しく首を横に振るフィオール。カイザは黒い屋敷で話していたことを思い出した。フィオールは、自分を心配してここまで来てくれた。そんなこと、するはずがない。いや、していたとしても5年も前にクロムウエル家から見放された餓鬼の話など、大した金額にもなりそうにない。クリストフにしてもそうだ。盗んだ本人なら、宝物と埋まっていた死体を背負う男に関わろうとするだろうか。

「…悪い、熱くなって…」

カイザが落ち着きを取り戻し、フィオールはホツと肩を撫で下ろした。

「…必死みたいだけどな、少し頭を冷やせ。ガトー、こいつらに何か飲み物を。」

面倒臭そうな顔をしながらも、クリストフはガトーに言いつけた。ガトーは軽く頭を下げ、部屋から出て行った。

「少し混乱してたみたいだ。」

カイザは額を抑えて小さく頭を横に振る。

「俺なんかまだ混乱しっ放しだ。マザー・クリストフがまさかローザだったなんて。」

フィオールは俯いて、はあ、と深く息を吐いた。二人共、妙な緊張感に疲れ果てている。

「そもそも、噂なんぞに惑わされるお前たちが悪い。」

クリストフは呆れたように言い放った。

「カイザはまだしも、俺は10年来の付き合いなんだ、驚きもする。」

フィオールは肩を竦めて大きく息を吐いた。彼女がの告白がいかにか堪えたかを物語るには充分な反応だった。

「…驚かすつもりなんて、なかった。正体を明かすつもりもな。」

少女の目が床を這い、カイザにもたれかかるミハエルを捕まえる。

「だが、カイザ。お前には全てを知る権利がある。いや、義務があるんだよ。ギールを殺し、その死体と関係を持つお前は。」

マザー・クリストフは、ミハエルのことを知っている。

カイザが顔を上げると、少女はカイザを見据えていた。ふと目が合い、カイザは思考がぴたりと止まってしまった。

「今はまだ情報がぐちゃぐちゃして混乱するのも仕方ない。それもあたしやフィオール、しいてはお前自身の知り得ることを繋ぎ合わせれば多少なりとも整理されるだろう。」

墓荒らしを探し出すことに集中するつもりが、気になっていた疑問がぼつりぼつりとカイザの中で湧き上がってきた。

マスターが死ぬ直前に言っていた言葉の意味、クロムウエル家の墓に入っていたミハエルの死体の謎、宝物の行方、伝説の真偽……これらが繋がるという、少女の正体。

「お前が知るべきことは3つだ。お前自身のこと、その死体のこと、そして……これから起こること。」

クリストフは燭台を三本並べて、灯る火を見つめた。カイザとフィオールは静かに少女の声に耳を傾ける。

「様々な事情が絡んで、もう後戻りができないところまで来てしまったお前が3つの真実を手にした時……」

少女はふつと蠟燭の火を吹き消した。

「乱世は、終る。」

暗闇で響く、深みのある少女の声。二人の男が不安で固まってしまう程、それは低く、低く、煙の匂いで満たされた一室を漂う。クリストフの言葉の真意は全く掴めない。ただ、カイザはそれを知ることを恐れた。乱世が終ると言うのに、何故か…この部屋のような暗闇に包まれてしまう気がしたのだ。全てが、終ってしまうような。

「…俺は、」

どうしたらいい。そう、聞こうとした時だった。

「マザー！」

カイザとフィオルの背後で扉が勢いよく開き、ガトーの声が外の明かりと共に部屋を貫いた。三人が何事かとガトーに目をやると、彼は扉を荒々しく閉めて鍵をかけた。

「何があった。」

暗闇の中でクリストフのいる台座に駆け寄り、ガトーは御簾を下ろした。

「マザー、とにかく今は外へ…」

カイザとフィオルは何も見えない暗闇で聞こえるガトーの声色で異常な事態が起きているのだと理解した。カイザは直様ミハ

エルを背負い、フィオールも立ち上がってカイザの肩に触れた。死線を潜り抜けてきた盗賊と情報屋だ、二人は何も話さずとも互いのすべきことをわかり合っているのだ。しかし、ガトーが来た時にはもう、遅かった。

扉が爆発し、激しい爆風に二人は吹き飛ばされた。

「いつ…て…」

フィオールはクリストフの台座にぶつけた後頭部を抑え、蹲る。

「大丈夫か、フィオール。」

カイザはミハエルを抱き上げ、ヨロヨロと立ち上がった。ミハエルを庇ったために被爆し、頭から血を流している。

外の明かりが煙の間を縫って部屋に差し込む。ボヤけた視界が鮮明になってゆくと、カイザの目の前には破れた御簾と、クリストフの前に立ちほだかり、槍を構えて扉の向こうを睨みつけるガトーがいた。カイザは、ガトーの視線を追った。

「駄目だろマザー、下手人を匿ったりしちゃあ…」

煙の中に沢山の黒い人影が浮かび上がる。逆光で顔は見えなかったが、カイザはその声の主が誰なのか、わかった。そして、ゆっくりとナイフを取り出した。

「しょうがねえからお迎えに来てやったんだ。」

煙が晴れ、僅かな光で影の姿が照らされる。切れ長の目、赤い短髪にもみあげの白髪、悪戯に釣り上がる口角。

「バンディ…」

フィオールが目を見開いて小さく呟いた。盗賊を引き連れたバンディはニヤリと笑うと、部屋に足を踏み入れた。

「フィオールもいたのか。まあ、用事があるのはその下手人とマザーだけだからよ、引っ込んでろ。」

「何が下手人だ、目的はカイザが持つギールのナイフだろ。」

ガトーの後ろでクリストフが言い放つ。カイザが振り返ると、クリストフは立ち上がった。

「…聞き覚えのある声だ。誰だっけな…」

バンディは足を止めて眉をひそめた。

「このナイフは、一体…」

カイザが聞くと、クリストフは横目にカイザを見て、言った。

「…盗賊の頭が後継者に持たせるナイフだ。盗賊団を引き継いだ時の顔見せではマスターになった証となる。」

カイザは握るナイフを見つめた。その手は、小さく震えていた。

「ブラックメリー…お前んとこの盗賊団の名を冠した、世界に一つのナイフだ。」

小さな震えは激しくなり、カイザはがっくりと膝を折ってしまった。

「ざまあねえな。」

バンディは鼻で笑い、カイザを見下ろす。

「でもまあ、感謝してるぜ？ マスターも死んで、後継者のお前も頭殺しの賞金首。おかげで今や俺が盗賊のトップだ。馬鹿なお前のおかげでな！」

カイザの手から、ナイフが滑り落ちた。バンディの高笑いが地下の一室で木霊する。クリストフとガトーはそんなバンディを睨みつけ、フィオールは…頭を抱えて震えるカイザを、辛そうな表情で見つめていた。

「と、いうわけで、ブラックメリーを手に入れるだけで俺は盗賊団を引き継げる。罪悪感でもう握ることもできないようだし、わかつてくれるよな？ カイザ。」

バンディがカイザに歩み寄る。すると、フィオールがバンディの目の前に立ちはだかった。

「…邪魔だ。」

バンディはフィオールの頬を爆弾で軽く叩いた。しかし、フィオールはバンディをきつく睨みつけ、動かない。

「…はあ、お前はカイザの味方か。仲良しだったもんなあ。」

カイザは俯く頭をゆっくりと上げた。

「フィオール…」

バンディは溜息をついて頭を掻いた。

「じゃあこうしよう。カイザの命だけは取らずにおいてやるから、そのナイフ、取ってくれよ。お前みたいな優秀な情報屋を殺したくない。それでいいだろ？マザーの言う通り、俺の目的はブラックメリーだ。」

バンディはフィオールの肩に手を置いた。カイザは微動だにしないその後ろ姿を、ただ見つめていた。

「…カイザ、」

後ろ姿は語る。

「そのナイフは何かあっても手放しぢゃならない。」

フィオールの広く、大きな後ろ姿は語る。

「マスターの思いが詰まったそのナイフは、直接受け取ったお前以外が手にすることは許されない。殺したことを悔いるなら、ブラックメリーを守り抜け。罪も、悲しみも、マスターの思いも…全てを背負って生きてゆけ。」

フィオールの肩に置くバンディの手に力が入ってゆく。

「ブラックメリーを取れ、カイザ。」

カイザは涙を流しながら、震える手をナイフに伸ばす。頭を過るのは、マスターの死顔。あの時の悲しみが生々しく、鮮明に蘇る。

「取れ！カイザ！」

フィオールがバンディを殴り飛ばした瞬間、カイザは勢いよくナイフを拾い上げ、立ち上がる。涙を流しながら前を見据えるその表情は、覚悟に満ちていた。全てを背負い、真実と向かい合う覚悟。罪や、心の痛み、人の思いを一生抱えて生きる…カイザはその時やっと立ち上がり、そして、前を見たのだ。ミハエルの死体を、抱いて。

7・真実の奥には更なる真実が息を潜める

「てめえら伏せろ！」

クリストフが叫ぶと、フィオールはミハエルを抱いているカイザに覆い被さった。手下に抱き起こされるバンディがはっと顔をあげる。クリストフはガトーの背後から飛び上がり、轟音と共に石畳の床に拳を沈めた。石が飛び散り、粉々になった石の埃が空を舞う。

「げぼっ…逃がすな！ブラックメリーと鍵は…逃がすんじゃない！」

石の礫で目を負傷しながらも、バンディは叫ぶ。

「鍵…？」

バンディの言葉に、カイザは固まってしまった。

「ボケつとすんな！行くぞ！」

クリストフがカイザ達の服を掴み、立ち上がらせた。

「…お前、伝説のクリストフなのか？」

カイザを中心に、時が止まる。クリストフもフィオールも、何も言わずに彼を見つめる。

奥宮で会って、薄々とわかっていった。わかってはいたが…カイザは、改めて聞いた。クリストフは笑いもせず、困りもせず、難らかな声で答えた。

「…そうだ。」

ガトーの槍に貫かれる盗賊の断末魔が交差する。カイザとクリストフの視線が交差する。カイザはその時やっと、背負った物の重みを知った。伝説が真実なら、ミハエルもまた…受け入れたくなかった事実が無理矢理カイザの中に入り込んでくる。湧き上がってくるのは恐怖でも驚きでもなく…嫉妬だった。

「…詳しい話は後だ。」

クリストフは呆然とするカイザの視線を断ち切って座っていた大きな石の台座を細い腕で持ち上げた。今すぐにでも問い質したい気持ちでいっぱいだったが、カイザは言葉を飲み込んで目の前のことに集中した。今はとにかく、逃げなくてはならない。

「隠し通路だ。お前ら先に降りろ。」

「でも、ガトーが！」

フィオールが指を差す方へカイザが目をやると、石埃の中で一人、襲いかかってくる盗賊を相手にしているガトーの姿があった。

「こっちは大丈夫です！」

ガトーが槍を豪快に振り回しながら、心配そうに自分を見つめるフィオールとカイザに微笑む。確かに、ガトーはかなり腕がたつようだが…二人の足は、動かない。

「あいつなら心配ない！あたしの息子だからな！」

クリストフの言葉にカイザとフィオールは固まった。

「だから…早く降りろ！」

クリストフに怒鳴られ二人は我に返り、言われるがまま隠し通路を降りる。

「行かすかよ！」

最後にクリストフが降りようとした時、バンディが爆弾を投げつけてきた。

「しまった！」

ガトーの頭上をすり抜け、爆弾がクリストフ目掛けて飛んできく。

「ローザ！」

爆弾が視界に入り、カイザが叫ぶ。すると、クリストフは扇を開き、爆弾に向かって飛び上がった。

「ガトー！」

名前を呼ばれ、ガトーは隠し通路に向かって大きく飛び上がる。そして、クリストフは爆弾を扇で叩き落とした。導線が短くなった爆弾はバンディのもとへ勢いよく戻ってゆく。

「なっ…！」

響き渡る爆音。盗賊の悲鳴と肉片が激しく飛び交った。

暫くして、爆風と天井や壁の崩れがおさまった。煙と石埃が淀めき、白く華やかだった部屋は真つ赤な血と黒い焦げ跡で染め上げられている。

「…くそっ、」

血と火薬の臭いが溢れかえる部屋の片隅で、掴んでいた死体を放り投げバンディはヨロヨロと立ち上がった。彼は手下を盾にしてなんとかやり過ごしたのだ。

「まさか、ローザがあのマザー・クリストフだったとは…」

立ち上がったかと思うと足元の死体を踏みつけ、喉元で怪しく笑った。

「逃がさねえ…ブラックメリーも…美女の鍵も！」

、
焦点が合っていない目で通路の入り口を見ながら、バンディは死体を激しく踏みつける。血が飛び散り、骨が折れる音がした。

「バンディ…」

血が滴る頭を抑える一人の男がバンディに歩み寄る。

「サイ、生きてたのか。」

乱れた黒い髪を整えながら、サイは言った。

「追わないのか？」

バンディは鼻で笑い、通路に背を向けた。

「マザーとガトーは予想以上の手練れだ。駒も随分と減らされちまつたし、追ったところで返り討ちに合うのがオチだろうよ。」

「俺なら勝てた。今回は駒が多くて逆に邪魔だったんだ。」

「まあ焦んなって。ここも墮としたし、鍵集めも始まったばかりだ。そう遠くないうちに必ず追い詰めてやるよ。」

バンディは出口へと歩き出す。

「行くぞ、西の巫女が住んでたっていうノースへ。」

「そのことなんだが……」

バンディが振り返ると、サイは無表情で彼を見つめていた。真つ黒な瞳が、虚ろに彼を捉える。

「カイザの奴、死体を大事そうに持っていただろう。」

「……それが？」

「あれ、エドガーじゃないか？」

「……」

「もしそうなら、あの気難しいマザーが奥宮にカイザを入れたことにも納得がいく。何であいつがエドガーの死体を持ち歩いてるのはわからないが。」

サイがそう言うと、バンディは再び喉元で怪しく笑い始めた。そして、石の壁に響く程に大きな高笑いした。サイはそれを、やはり無表情の冷めた瞳で見つめるばかり。

「面白くなってきたじゃねえか！あいつも鍵を狙ってんのか！」

サイに背を向け、肩を震わせるバンディ。

「これだよ、これこそ俺が求めていた乱世だ！そしてこの戦いを制した奴こそ…神の業輪に選ばれる！」

いきなり叫んだかと思うと、震えも止まってぴたりと静かになった。

「カイザ…運命には逆らえない。俺が選ばれるという…運命にはな。」

こうして、リノア鉱山陥落により暗い地下の奥宮で開戦の狼煙は上がった。歪な運命の歯車はゆっくりと、軋みながら動きだす。

「息子って、どういうことだよ。」

カイザ達は冷んやりとした薄暗く入り組んだ地下道を歩いていた。フィオルの問いかけに、先頭を歩くクリストフが振り返る。

「どういうことって、どういうことだよ。」

「お前、どう見てもガトーより年下じゃねえか！というより、ローザが伝説のクリストフならお前らは何歳なんだ？！」

隣で混乱しているフィオルと全く同じことを考えていた力

イザ。黙ってはいたが、気になって仕方がなかった。

「…年は答えないぞ。」

「100歳はゆうに越えてる怪力ババアが女ぶってんじゃねえ！」

混乱し過ぎて興奮し始めたフィオールはクリストフのゲンコツを喰らって大人しくなった。頭を抑えるフィオールを見て呆れるカイザと、苦笑するガトー。

「…今のはお前が悪い。」

「すいません、麗しきマザー…」

カイザが注意すると、フィオールは涙目で小さく謝った。

「伝説を知っているなら疑問に思うこともないだろう。あたしは宴で神と寝所を共にするのが役目なんだ。その時懐妊し、地上に戻ってから産んだのがガトーなんだよ。」

不機嫌そうにしながらも質問に答えるクリストフ。

「じゃあガトーは…神の子供?!」

「はいはい、そうだ。」

驚くフィオールを面倒臭そうにあしらうクリストフ。

「だからあんなに強いのか…」

フィオールが先程の戦いぶりを振り返り一人で納得していると、クリストフは得意げに笑って見せた。

「あたしが賜った不老の身体と思いのままに動く手足…つまり、圧倒的な”力”だ。それを見事に受け継いだからな。当然だ。」

親馬鹿なクリストフのすぐ横で、ガトーは少し照れ臭そうに笑う。

「…なあ、ローザ、」

「クリストフだ。」

ぴしゃりと言い放たれ、一瞬口をつぐむカイザ。少し間をあけて、おずおずとその名前を呼ぶ。

「…クリストフ、リノア鉱山は…どうなる。」

「…今は盗賊の手の内だが、心配はいらない。一日あればまた取り返せる。」

「でも、俺のせいで…」

カイザが俯くと、クリストフは立ち止まった。カイザが見た少女の顔は、

「気にするな。」

慈愛に満ちていた。

「バンディの目的はブラックメリーとあたしが持つ鍵だったようだし、お前がいてもいなくても、こうなっていたよ。」

「その、鍵は大丈夫なのか？」

「…」

笑顔が曇り、少女はカイザに背を向けた。

「あたしの鍵は、もう使ったから手に入れたところで意味はない。」
「……？」

「鍵を使って開いた扉が、お前達も通ったあのリノア鉱山大門だ。」

地下道の行灯が、クリストフの背中を寂しげに照らし出す。

カイザはそれを、じっと見つめた。少女が手放したあの場所は、聖母が神から賜った愛の証だったのだ。立ち止まって向けたあの慈愛に満ちた笑顔は、自分を氣遣って無理をしたものなのだと、カイザは氣付いた。

「リノア鉱山こそ、富を絶やさぬ宝石。あの門の向こうこそ、神があたしのために用意した一室……」

「……クリストフ、俺、」

「それを開くためには二つの鍵が必要だった。」

カイザの言葉を遮り振り返るクリストフは真剣な眼差しでカイザを見た。

「一つは、あたし達がそれぞれに与えられた天界に繋がる扉を開く鍵。そして、あたし達が代わる代わる手にしなくてはならない金の輪……」

カイザの心臓が、大きく音をたてる。

「“業輪”、と呼んでいる。……カイザ、おそらくお前が探しているモノだ。」

クリストフの金の瞳がてらてらと火の光を反射する。その視線は、真っ直ぐカイザの瞳を射る。

「お前が探しているのは乱世の核となるもので、お前が背負っているのはその業輪を最後に所持していた女…」

「…」

「エドガーだ。」

――――

満月が傾く夜の墓地。嗚咽もおさまり、大人しくなっ
てぐずと涙を拭く少年。そんな少年の頭を優しく撫でる彼女。二人は
墓地の隅にある丸太に腰をかけていた。

「名前は？」

「…カイザ。」

「カイザ…いい名前ね。」

少年は、この名前が嫌いだった。

「”神に選ばれし戦士”…この名前をつけてくれた人はとても高名な方なんだろうね。」

彼女はにつこりと笑う。しかし、少年はどこか浮かない顔をしていた。彼女はその様子を見て、首を傾げる。

「…嫌なの？」

「…だって、俺は捨てられたんだ。」

「…」

「それなのにこんな名前…」

腫れた目に再び涙が溜まってゆく。彼女は愛おしそうに微笑

んで少年を抱きしめた。

「私は素敵だと思うわ。だって、私とあなたがこうして出会ったのも神のお導きなんだもの。」

彼女の言う、お導き。少年は幼い頭でそれを運命というもののなか、考えた。

「あなたは、名前の通り神様に選ばれているのよ。」

不思議な温もりに包まれ、呪っていた運命を少しでも受け入れることができれば、自分の名前も好きになれるのではないか。

「…名前、なんていうの？」

「私はミハエル。」

ミハエルがいれば、運命もまた素敵な贈り物になるのではないか、そう、考えた。

「涙を拭う妖精の名前だ。」

「そうよ。よく知ってるわね。」

優しく笑う彼女にぴったりだ。少年は思わず頬が緩む。

「でもね、もう一つ他の意味があるのよ。」

彼女は空を見上げて微笑む。少年も、つられて夜空に目を向けた。そこには沈みかけた満月と、その反対で散り散りに輝く星があった。

「闇に囚われてしまった”カイザ”の手を引く天使：”神の遣い”」。

少年が彼女を見ると、彼女もまた、少年を見つめていた。

「…ね？神様は誰も捨てたりなんかしないわ。私達はちゃんと見守られている。」

ヴィエラ神話に出てくる神に選ばれし戦士は、戦いの途中で闇に囚われてしまう。そんな彼の手を引いて光ある世界に導いたのが、神の遣い。

これを運命と言わずに、何というのか。少年はこの時、自分の名前がカイザでよかったと心から思えた。心臓の鼓動が、彼女の微笑みが、少年の心を熱くする。

「…俺、名前気に入った。」

「私もよ。カイザにあつて、もっと好きになったわ。」

赤い目を細めて嬉しそうに笑う少年。大人になって、神話のような戦士になれたら…そう、幼い夢を思い描いた。

8・死すらも二人を別つことはできない

真つ暗な部屋で、カイザはベッドに横になっていた。隣にはミハエルを寄り添わせ、ボーツと天井を見ていた。

――馬鹿なお前のおかげでな――

――…エドガーだ――

カイザは横を向いて、ミハエルを見つめる。長い睫毛も、闇にぼんやりと浮かび上がる白い肌も、やはり、昔と変わらない。変わらないのに…

「…なあ、」

呼びかけても、答えない。カイザは彼女の身体をゆっくりと自分に向けさせた。その顔を暫く見つめて、考える。こんなに彼女を愛おしく想うのはやはり、彼女を一人の女性として見ているからなのか、と。幼い頃はただ一緒にいただけだったが、彼女と釣り合う年齢になってその想いは何時の間にもやがて愛情に変わっていたのだ。

カイザは眠るように目を瞑る彼女に顔を寄せ、そつと唇を重ねてみる。死体に口づけする程に狂おしく愛しているのに、甘く冷たいカイザの恋心はミハエルの柔らかな唇に吸い込まれるばかりの一方通行。顔を離れたカイザは、彼女を見つめて静かに涙を流した。

「…起きてくれよ、ミハエル…」

幼い自分を抱き締めてくれた身体はそのままなのに、声も聞けない、笑顔も見れない。わかつてはいたが、激しい環境の変化がカイザを限界まで苦しめていたのだ。嫉妬なんてしないから、彼女を生き返らせてくれ…なんて都合のいい神頼みをさせるまでに。

誘拐された惨めな自分を救い出してくれたのは彼女だった。離れてからも再会の約束と揃いの鍵が彼を支えていた。マスターを殺して自暴自棄になっていた彼に生きる目的を与えたのも、死んでいたとはいえ、彼女だった。

育ての親を殺してしまった罪悪感、ミハエルが伝説のエドガ―であると知った衝撃…それらに押し潰されてしまいそうな彼は、彼女無しではもう、正気すら保てそうになかった。

真実から目を背けないと決めたからこそ、今度は知ることを恐れ始めるカイザ。子供のように、ミハエルの死体を抱き締めて泣いていた。

「俺は、どうしたらいいんだ…」

彼女にしか苦しみや悲しみを曝け出せなくなっていたカイザは、そのまま泣き疲れて眠ってしまった。冷たく、暗い夢の淵へ。

「…まだ寝てやがった。」

「放っておいてやれ。カトリーナを出てからまともに寝てなかったからな。」

煙管を咥えて窓際に陣取るクリストフ。ガトーは部屋の真ん中のテーブルの近くで槍の手入れをしていた。

ここはリノアから少し北東にあるダリの町。鉾山を出てから

この町で宿を取り、身を隠していた。もう時刻は昼。フィオルはクリストフとガトーの部屋に入るなり、困惑した表情でガトーの向かいに座り込んだ。

「あいつ、エドガーの死体を抱き締めて寝てたぞ。」

「…放っておいてやれ。」

フィオルは頭を抱えて深く溜息をつく。それを見兼ねてガトーが立ち上がった。どうやら茶を淹れるらしい。

「あ、あたしにもー。」

ソファーにだらしなく座るクリストフがポットを手にするガトーに向かってそれまただらしなく手を振った。

「東の国の茶無いの？なんだっけ…」

「緑茶ですか？」

「それぞれ！美味かったよなー。ヤヒコからもっと貰ってくればよかった。」

「…おい！」

フィオルがテーブルを叩いて叫んだ。

「あいつとエドガーは、どういう関係なんだよ！」

フィオルの怒鳴り声が部屋に響く。しかし、ガトーは何事もなかったかのように湯を沸かし始めた。クリストフも眉を寄せて面倒臭そうにしている。この山賊親子は怖気づくことを知らない。その様子にフィオルの怒りは増してゆく。

「お前らな、そんな呑気にしてる場合じゃねえだろ！これから鍵を巡る戦いが始まるんだろ？！世は乱れるんだろ？！当事者がそんな態度でいいのかよ！」

クリストフはそっぽを向いて鼻からもやもやと煙を吐き出す。

「そんなあたふたしたってどうしようもないだろ。もう一人の当事者があの調子じゃあな。」

クリストフはソファーに首までもたれかかって天井を仰いだ。

「もう一人は死んでんだろ！生きてるお前らがどうにかしろよ！」

「違うつて。カイザの事だ。」

「…カイザ？」

フィオールの声が急に小さくなる。

「やっぱりあいつ、エドガーと何か関係があるのか？お前らみたい
に。」

「知らねえよ。でも、どう考えても知り合いだ。ミハエル、なんて呼んでたし。それにあの雰囲気…恋仲だったのかもな。」

クリストフはフィオールを見降ろして意地悪く笑って見せた。少女はわかっていた。彼がこの争いにカイザが巻き込まれることを恐れていると。フィオールは言葉を詰まらせ、苦しげに俯く。ミハエルに執着する様子ばかりか、彼女を抱き締めて眠るカイザを見ていたために、返す言葉もなかったのだ。

「カイザのやつ、顔だけは良いしな。クロムウェル家にいた頃、その容姿に神も嫉妬する、なーんて言われてたっけ。神に愛された女

と神に嫉妬される男：お似合いじゃないか。」

「ふざけるな。」

「あたしはいつでも真面目だ。」

クリストフは灰を落として、ふう、と息をついた。その顔からは笑顔が消え、少女は何やら複雑な顔をしている。

「エドガーとカイザが赤の他人だったとしても、あいつはこの争いに巻き込まれる運命だった。」

「なんでだよ。エドガーがいなければカイザは盗まれた業輪を探そうとはしなかったはずだ。」

「そのエドガーと業輪が埋められてたのは何処だ。」

フィオールは悔しそうに黙り込む。

「…あたしだって、認めたくはない。お前と同じくギールにあいつの行末を託されてたんだからな。しかし、エドガーと業輪がカイザの墓から出てきた以上、クロムウェル家も鍵戦争に加わると考えていいだろう。むしろ…クロムウェル家が発端、かもしれない。」

フィオールは唇を噛み締めてテーブルを叩いた。

「…カイザは、クロムウェル家に生まれた時からこうなる運命だったんだ。」

ガトーが俯くフィオールの前に静かに茶を置いた。クリストフもガトーからカップを受け取る。

「…俺は、どうしたらいい。」

湯気が上がるカップを目の前に、フィオルは呟いた。

「そんなの自分で決める。お前はあたしやカイザと違って、無関係にもなれるんだからな。」

「…」

クリストフは茶を啜りながら窓の外を見つめる。ガトーは槍の手入れを再開している。フィオルは黙って考え込んでいる。

「…雨の匂いをするな。」

クリストフの独り言を最後に、部屋は沈黙で包まれた。

声がした。カイザを呼ぶ優しい声。

「カイザ？」

目を覚ますと、カイザはベッドの上で冷汗をかいて横たわっていた。

「大丈夫？」

目の前には心配そうに少年を見下ろすミハエルがいた。

「魘されてたわよ？怖い夢でも見たの？」

カイザはミハエルの服を掴んで、荒い息を整えた。目からは

涙が滲み、息を整えるはずが逆に嗚咽で乱れてゆく。ミハエルは悲しげな笑みを浮かべて少年の頭を撫でた。

「…そんなに怖かったの、可哀想に。」

ミハエルはベッドに横になってカイザを抱き締める。まだ彼女が起きるには早すぎる時間。眠いだろうに彼女は少年の頭を優しく撫で続ける。

「…俺、真っ暗な墓の中に入ってたんだ。たぶん死んでしまったから。」

少年は彼女の胸の中で話し始めた。

「そしたら…棺の蓋や墓石が透けて見えた。そこには墓の前で悲しそうに泣いてるミハエルがいて…俺、叫んだんだ。ここにいるって。死んでも心はここにあるって。」

しだいに声量が大きくなり、涙声になってゆく。彼女は頭を撫でる手を止めて、少年の話に聞いている。

「どんなに叫んでも声は伝わらなくて…俺…」

少年の涙が彼女の服に滲む。彼女はそんな彼から身体を離し、ゆっくりと起き上がった。少年はそんな彼女をじっと見つめて、また顔が歪み始める。彼女が何処かへ行ってしまう、と思ったのだ。しかし、彼女は振り向いてにっこりと微笑んだ。

「…おいで？」

少年は彼女に連れ出され、墓地までやってきた。外は夕暮れ。すれ違う人々は自宅へ帰るが寝支度するにはまだ早い時間。二人は橙の空の下、ある墓の前で立ち止まった。

「覚えてる？」

彼女は墓石の前でしゃがみ込み、愛おしそうにそれに触れた。

「ローズウッド夫人も、あなたが可哀想だって。」

少年は驚いて涙が止まる。彼女はまだ話し続けた。

「夢は決して現実ではない。だから涙を拭いて、笑いなさい……」
「ミハエル、死者の声が聞こえるのか？」

驚く少年に、彼女は優しく微笑んだ。

「聞こえないわ。」

「……出鱈目言っただけかよ。」

落胆する少年を見て、彼女はクスクスと肩を震わす。そして、ローズウッド夫人の墓に向き直った。

「出鱈目でもないわ。夫人は生前、とても温厚で優しい方だったの。」

彼女は少年の手を握って自分の隣にしゃがませた。

「この下に、夢の中のあなた同様夫人は眠っている。」
「……」

「何か聞こえる？」

「…聞こえない。」

「死者はね、身体を失うばかりが伝える術さえ失くしてしまう。完全に私達の生きる世界から隔離されてしまうのよ。」

少年は墓石を見つめて先程の夢を思い出す。そして、驚きで引っ込んでいた悲しみが舞い戻ってきた。泣き出しそうな顔をする少年の肩を、彼女はそっと抱き寄せる。

「カイザ…あなたは夢でなんと叫んだ？」

「…ここにいる、心はここにある…って。」

「ローズウッド夫人もね、今ここにいて、心はここにあるのよ。」

カイザは呆然と墓石を見つめた。そして、重たい口を開いた。

「…この前は、ごめんなさい。」

ミハエルに出会った夜、夫人の墓を荒らしたことが心から申し訳なく思えたのだ。すると、カイザの目に見たこともない優しい夫人の顔が透けて浮かび上がった。

「許してくれるって。」

「俺も…聞こえた。…ような気がする。」

彼女は嬉しそうに微笑む。

「本当は何を言っているかなんて、わかるはずがない。でもね、それでも向かい合うの。土の下の死者の言葉と。私はずっと、そうしてきた。」

カイザは夢を思い出そうとするが、もう思い出せなくなっていた。死んだ彼を見下ろす彼女は優しく微笑んでいるだろうとしか、考えつかなくなっていたからだ。

「…墓守って、凄いな。」

カイザがミハエルを見ると、彼女はやはり、微笑んでいた。

手を繋いでノースの家に帰る二人。そして、抱き合いながら再びベッドに入った。

「…俺が死んでも、ミハエルは側にいて声を聞いてくれるんだ。」

「ちゃんと聞き取れている保証はできないけどね。」

「それでもいい。」

彼女の笑顔が、そこにあるなら。少年はそう考えていた。

「私も…平和な世の中であなただけが笑って…幸せそうにしていれば…それで…」

少年の髪をこそばゆく撫ぜる彼女の吐息。それが静かな寝息に変わると、少年もまた、深い眠りについていた。彼女の腕の中で温もりを感じ、安堵しながら。

9・瞼を開かねば見えるものも見えないまま

目が覚めると、もう外は真っ暗だった。カイザはミハエルを抱き締めたまま眠りに落ちたことに気付く。彼は仰向けになって、大きく息を吐いた。

「夢…」

懐かしい夢だった。彼女の言葉も顔も鮮明に映し出された古い記憶。カイザは隣で横たわるミハエルを見た。記憶のままの寝顔。違うのは、寝息が聞こえないということだけ。

「あ、やっと起きてきたな。寝坊助。」

食卓を囲む三人にツカツカと歩み寄るカイザ。

「自分の分は自分で…」

クリストフの言葉を遮り、カイザはテーブルに右手を叩きつけた。顔を背けていたフィオールも、驚いてカイザを見つめた。ガトーは落ちそうになった皿をテーブルに戻し、クリストフはフォークを片手にカイザを睨んだ。

「…何のつもりだ。」

クリストフが聞くと、カイザは握っていた右手を緩める。すると、そのにいる三人が言葉を失い、固まった。

「…やっぱり、これがエドガーの鍵なんだな。」

緩めた拳から出てきたのは、カイザがミハエルから受け取った揃いの鍵。皆それを凝視していた。

「…クリストフ、」

名前を呼ばれ、少女は顔を上げた。

「俺は俺の目的を果たす。業輪を探し出し、この手でミハエルに捧げたい。」

威嚇にも似た鋭い視線で少女を貫くカイザ。この時ばかりは、少女もあまりの威圧感に思わず笑ってしまった。

「…どうやら、覚悟ができたようだな。」

「覚悟はしていたよ。昨日は、少し疲れていただけだ。」

少女の生意気な笑顔に、カイザも強気な笑顔で返す。そんな二人のやり取りを面白く思わなかったのが、

「待てよ、カイザ。」

フィオールだった。

「盗品を見つけたらエドガーから手を引くって約束は、お前を争いに巻き込まないためのものだ。」

「…わかってる。」

カイザは辛そうな顔をして、テーブルの鍵に視線を落とした。

貰った時よりくすんで黒くなっているが、きめ細やかな装飾は欠けていない。

「わかっていて争いの元になる業輪を探すのか！お前は、死んで人間と生きてる自分、どっちが大事なんだよ！」

「……」

「生きてる俺の言う事を、聞いてくれよ！」

俯くカイザに切願するフィオール。張り詰めた沈黙を破ったのは、カイザだった。

「…前の俺なら、フィオールの言うことなんてどうとも思わなかったのに…」

辛そうな顔で、小さく笑うカイザ。それをフィオールは真っ直ぐに見つめる。

「フィオールはリノアまで追いかけて来て、バンディからも守ってくれた。あの時、お前がいなかったらと思うと…ぞつとする。」

カイザはフィオールを見て、言った。

「やっと気付いたんだ、お前は俺にとってかけがえのない大事な友人だと。」

「だったら…」

「でも、ミハエルもお前と同じくらいに大事な存在なんだよ。」

互いの気持ちをぶつけ合う二人だが、どちらも譲る気はない。それは、当人達もわかりきっていた。フィオールは視線を外して立ち上がった。そして、カイザに背中を向ける。

「…ごめん。」
「…」

沈む空気の中、クリストフが冷めきった表情で煙管に火をつけながら言った。

「フィオール、もう諦めろよ。こいつがどんな思いで決意したと思っただ。」

「わかってる！そんなこと！」

フィオールが声を張り上げた。そして、少し間を置いて振り返る。カイザは目が合うとさっと下を向いてしまった。誰かを友人だと認めること自体初めてだというのにその友人の言葉に逆らおうというのだ、どんな顔をしたらいいのか、わからなかった。

「…探し物なら、情報屋が必要だろ。」

「…フィオール、」

「あー、ったく！」

頭を激しく掻き毟りながら、フィオールは席についた。

「付き合ってやるよ！乱世の結末まで！」

自棄になるフィオールを見てクリストフはヘラヘラと笑う。

「お前はカイザに甘いよな。」

「うるせえ！」

クリストフにからかわれるフィオールを見て、カイザは複雑

な笑顔を浮かべる。

本当は、彼が何処かへ逃げてくれることを望んでいた。自分の目的のために危険に巻き込まれなかったのだ。しかしそう思う反面、明るく真っ直ぐな性格でカイザを支えてきてくれた彼が離れてしまうのも不安だった。彼の決断はよかったような、よくなかったような。

どちらにせよ、リノアを出て塞ぎ込んでいたカイザは笑みを取り戻すことができた。それは彼がいたからに他ならない。

「ガトーに甘々なクセしてよく言うな！」

「息子なんだから当たり前だろ。」

「だいたい、お前ら親子が視界に入るだけでこっちは混乱すんだよ！」

熱くなつてゆく言い合いに、カイザの笑顔がだんだんと苦笑いになってゆく。

「不老の身体は成長が止まる歳が決まってるわけじゃないんだぞ？お前は馬鹿か。」

「それ以前に！お前みたいな糞生意気で可愛げのない奴がこんなできた息子を生むなんて…逆立ちでもして分娩したんだろ！そうだろう！」

クリストフはフィオルの額にフォークを刺した。フィオルが悲鳴を上げて額を抑える。カイザはすっかり呆れていた。

「あの…」

一部始終を大人しく見守っていたガトーが恐る恐るクリストフに話しかけた。

「なんだ？できた息子。」

につこりと笑うクリストフに、ガトーは困ったような笑顔を返す。

「皆さんも結束したようですし、俺は一足先に…」

「ああ、そうだったな。」

ガトーは立ち上がって一礼すると、サツサと部屋から出て行ってしまった。

「…なんだよ、ガトーの奴。」

フィオールは額を抑えながら、ガトーが出て行った扉を訝しげに見つめた。

「あいつには逃げ延びた山賊のところへ行ってもらった。これからそのことを伝えるためにな。」

クリストフはフィオールを刺したフォークを端に寄せて、ガトーのフォークを手にとった。カイザはふと、鍵を見た。もう、戦いは始まっているのだと自分に言い聞かせながら。

「…残った俺たちは、他にやるべき事があるんだな。」

「カイザは話が早くて助かるよ、その馬鹿と違って。」

フィオールがクリストフを横目で睨んだ。少女は鼻で笑うと、フォークをくるくる回しながら言った。

「まず、北の魔女ダンテを探すぞ。もしかしたら既にあいつが業輪を持っている可能性もある。」

「…リノアで言っていた手掛かりって、ダンテのことだったのか。じゃあ墓を荒らしたのも…」

身を乗り出して話すカイザの口に、クリストフは人差し指を当てた。

「最後まで聞け。そんな単純な話じゃないんだよ。」

渋々と大人しく首を縦に振るカイザ。少女は笑顔で人差し指を引っ込め、話を続けた。

「リノアで確かにあたしは、手掛りがないわけじゃないと言った。だが、それはとても不確かな手掛りだ。」

カイザもフィオールも、じっと聞いていた。

「…業輪は人を選ぶんだよ。そして、必ずどんな形でもあたし達四人のうちの誰かの手におさまる。不思議なことにな。」

「だから、今度はダンテの手に？」

「さあ…ヤヒコもいるしなあ。まだ業輪は何処かを巡り巡ってる最中かもしれないし、ふとしたことであたしの手に転がり込んでくるかもしれない。とにかく、最初に掘り起こした奴がずっと持ち続けるなんてことは不可能なんだ。」

馬鹿と言われて黙り込んでいたフィオールが口を開いた。

「いいな！業輪！この戦争は勝ったも当然じゃねえか。エドガーの鍵はカイザが持ってるし、お前らの誰かが手にしたらエドガーに供

えてやりやあいい。そしたらカイザも満足だろ？」

カイザはこくと頷くが…どこか不安そうな顔をしている。それだけでは、何も解決しないような気がしたのだ。

「…優位な立場なのは確かだけどな、恐らくそう上手くはいかないだろう。」

クリストフはフォークで芋を刻み始めた。

「なんでだよ。お前らはそれぞれ部屋も鍵もあるし、エドガーに業輪を供えることに異論はないだろ？」

「ないよ。問題はそこじゃないんだ。」

溜息をついて芋を刻み続ける少女。見ているカイザは、何処となく不安が大きくなってゆく。

「…伝説の伝わり方は曖昧で地域や国によっても違うんだが、まるであたし達を見ていたんじゃないかってくらいに詳しく、正しく言い伝えている民がいる。」

クリストフはフォークを持つ手を止めて、言った。

「東の国の連中だ。そして、伝説を広めたのも東から来た正体不明の旅人…」

「それがなんだよ。俺に伝説の話をしてくれた奴も東の国に行つて聞いたらしいし、東楔神話なんて言うくらいなんだから当たり前だろ。」

「その旅人が生きていた時代がおかしいんだよ。あたしやヤヒコが生まれる前だぞ。」

フィオールは首を傾げる。カイザは俯いたまま動かない。クリストフの言おうとすることが、薄々わかっていたからだ。そこから導き出される答えも。

「それに、伝説では美女の一人が死せる時、それを巡って大きな争いが起きるとある。おかしいとは思っていたが、エドガー背負ったカイザを見て確信した。」

カイザは、顔を上げた。

「これは伝説や言い伝えなんかじゃなくて……」

「これから起きることを予言したもの……だろ。」

言葉を遮られた少女が驚いた顔でカイザを見た。その表情は、極めて険しい。

「……本当に、話が早くて助かるよ。」

無表情のクリストフ。一言発して黙り込むカイザ。そして、何かに気付いて表情を曇らせるフィオール。

「……待てよ、じゃあ、何だ？ 予言だって言うなら、世界の秩序が乱れるとか裏と表が一つに溶け合うとか……そんなんも避けようのない現実になるってのかよ！」

フィオールはテーブルを叩いた。クリストフはフィオールを睨んで、フォークを思い切り肉に突き刺した。

「それをどうにかしようってんでこれから動くんだろが！ あたしでさえ何が起こるかわからねえのにてめえが騒ぐな！」

「どうにかってどうすんだよ！業輪見つけてどうにかなんのか？！」

テーブルをバンバン叩くフィオールと肉をぐさぐさ突き刺すクリストフを横目に、カイザは話を切り出した。

「…で、何で北の魔女を探すんだ。業輪の有無を確かめに行くだけじゃないんだろ？」

睨み合っていた二人はピタリと落ち着きを取り戻して互いに顔を背ける。

「エドガーが死んだことを伝える。そしたらこっちの手助けをしてくれるだろうし。それに…」

少女の声が、沈んでゆく。

「…クロムウェル家も近い。」

カイザの表情が引き攣る。どんな真実からも逃げないと覚悟をした彼だが…最後まで、知ることを恐れていたのが自分自身のことであった。

「この際だから話しておこう。…カイザ、ギールはお前のことでも悩んでいたよ。どうしたものか、と。」

カイザは膝下のナイフを握り締め、俯く。マスターのことを思うと泣きたくなくなってしまふ。

「あいつは確かにクズ盗賊だったが、少し捻くれてたんだろうな。盗賊になりきれない正義漢だった。お前のことも身代金が入ったら

早々に返してやるつもりだったらしい。」

フィオルは遠い目をして眉を顰めている。彼はこの話に心当たりがあるようだ。

「クロムウェル家の主人はもう乱心寸前で、国中がお前の搜索で大騒ぎだった。」

「それなのにマスターは…両親が俺を捨てたなんて言っただけに嘘をついた。あの人は、何がしたかったんだ…」

ナイフをきつく握り締めるカイザ。憎しみや罪悪感が入り混じるマスターへの感情が溢れてくる。そんな彼を見て、少女は優しく訴えかけるような声で言った。

「…何かしたかったわけじゃない。さっきも言っただろう。ギールはな、どうしていいかわからなかったんだ。」

クリストフは悲しそうな顔でカイザを見つめる。

「身代金を要求しても、クロムウェル家は払わないの一点張り。しかし搜索は続いていた。だからもう一度、身代金を要求したら…」

突然、フィオルが立ち上がった。驚いたカイザが彼を見上げると、彼は目を泳がせて何か言おうとしていた。

「…クリストフ、それは、ギールが…」
「マスターが、なんだよ。」

カイザが聞くと、フィオルは何も答えずに窓際に向かって歩いてゆく。クリストフは一息ついて、言った。

「もう、いいだろ。こいつもガキじゃないんだ。」
「…」

フィオルは窓の縁に手を置いてじつと立ち尽くす。カイザは二人が何を言おうとしているのか、全くわからない。聞いたら絶望してしまうようなことなのかと、少し身構えた。

「ギールがもう一度身代金を要求したら今度は…殺してしまっても構わない、と言われたそうだ。」

カイザは呆然とクリストフを見つめる。フィオルはまだ窓の外を向いたまま。

「身代金は払わない、殺しても構わないと言いながら、お前を搜索するクロムウエル家にギールは困惑していた。もし見つかったしまつたら、カイザは殺されるんじゃないか、ってな。」

「だから、だから何だって言うんだ。殺せばよかっただろ！」

「…まだわからないのか。ギールはお前を救ったんだよ。」

わかつていた。ブラックメリーのことを知った時から。わかっ
つてはいたが…

「…あいつはお前を哀れんで匿ったようだが、こいつは賢いし器量
もいいから、ブラックメリー史上最高のマスターになるかもしれないと自慢ばかりして…」

「やめてくれ！」

カイザは俯きながら怒鳴り声を上げた。声は、しん、と部屋を響いて壁に吸い込まれる。残ったのは悲しい静けさと、クリスト

フの溜息。

「…話は逸れたが、クロムウェル家の動向はおかしい。ついにはお前の墓まで建てる始末だ。その墓に入っていたのがよりによって…」
「…ミハエルだった。」

ボソリと、カイザは言葉を返す。

「そうだ。だからまずは北へ行く。クロムウェル家がこの争いに大きく関わってくるかもしれないからな。」

カイザは、頷くので精一杯だった。そんな彼を見つめながら、煙管を咥えるクリストフ。フィオルはまだ、背を向けていた。

マスターは何一つ嘘をついていなかった。唯一の隠し事も、幼いカイザを氣遣つてのものだった。知れば知る程、カイザの中で何かが大きく音を立てて崩れてゆく。勘繰ったり、疑ったり、誰かを犠牲にしたり。盗賊としては当然の生きる術。フィオルの存在で小さな亀裂が入っていたそれらが、マスターを殺した罪悪感でガタガタと壊れゆく。頭に浮かんだのは、ミハエルの言葉だった。

「―あなたはもつと光で溢れたところに住みなさい。沢山の仲間に囲まれて、笑顔と、優しさに満たされて…」

掃き溜めのような暗い場所でも、温かな光はあった。心配してくれる友人に、幼い命を拾い上げてくれた育ての親…光を今まで閉ざしてきたのは、自分だったのだ。

10・涙の向こうで掴めたならば二度と手放してはならぬ

朝日が射し込む部屋に散乱する酒瓶。テーブルの上に食い散らかされたツマミ。そして…

「…おはよう、」

「…ぎゃあ!」

驚いたフィオールが隣で寝ているカイザの頭に肘を打ち付ける。

「いてっ!」

カイザは頭を抑えながらしよぼしよぼする目をゆつくりと開いた。目の前にはミハエルが穏やかな寝顔で横たわっている。振り返ると、フィオールが起き上がって何やら慌てている。

「なななな、な…」

フィオールの隣には、肘についてベッドに寝そべるクリストフがいた。

「そんな驚くことないだろ。」

「おまつ…何時の間に?!」

寝起きでまだ意識がはっきりせず状況がよくわかっていないカイザ。とりあえず、一つのベッドに四人も寝ていたなんて…どおりで狭いはずだ、とぼんやり思った。

三人で北へ向かう話をした後、後悔に苛まれたカイザは自室へ戻ってミハエルが横たわるベッドに腰掛けた。肩越しに彼女を見つめ、幼い頃を思い出す。墓地で優しく抱き締めてくれた彼女、土産を手にも他国の話をしてくれたフィオール、笑顔でブラックメリーを譲ってくれたマスター……猜疑心という色眼鏡を外して見ると、どれも懐かしくて温かい。大切にされたからこそ大切にしなければならなかったものを、カイザは自ら終わらせた。彼は頭を抱えて、大きく息を吐き出す。

「……カイザ、」

部屋で一本だけ灯る蠟燭の火が照らす扉の向こう。フィオールの声がした。カイザは返事をするのを少し躊躇ったが、小さく返事をした。

「……なんだ？」

「起きてんのか、入るぞ。」

フィオールは覗き込むようにして部屋に入ってきた。そして、手に持つ酒瓶とツマミを見せつけ、笑った。

「アイダではゆっくり飲めなかったからな。ダリの酒は上手いと聞くし……久々にどうだ。」

「……そうだな。」

カイザは無理矢理な笑顔を作って、フィオールがツマミを広げるテーブルに歩み寄った。

二人は昔の思い出話を酒の肴に、穏やかな時間を過ごした。

カイザが8歳の頃にヴィッツ土産のビックリ箱に驚き過ぎて泣いた事や、11歳の頃に土産の魚を腐らせた料理を食べさせられて吐いた事。18歳の頃に幸運を呼ぶお守りだと気持ち悪い人形を渡された事。

「あの人形高かったのに、その場で火に焼べやがって…」

「よく考えたらろくな物貰ってないな、俺。」

カイザがボソツと呟くと、フィオールは懐かしそうに笑った。その笑顔が少しずつ曇ってゆくのをカイザは見逃さなかった。

「…俺はあの頃楽しかったけど、お前はきつと違ったよな。ギールも言ってたよ。泣き言一つ言わずに毎日を必死で生きてるけど、本当は心底辛いだろうって。」

カイザは酒が注がれたグラスに視線を落とした。

「…違う、と言えば嘘になる。でも今思えばそう悪くない日常だったよ。マスターも…よく、してくれた…のに、」

見つめていたグラスに、一滴の雫が落ちた。酔いで血流が良くなると共に涙腺も緩くなってしまったカイザ。額に手を当て、静かに泣いた。フィオールも涙目になって自分のグラスを見つめている。

「…クロムウェル家と身代金の交渉をしていたのは、俺なんだ。」

弱々しく、語るフィオール。カイザは小さく首を横に振った。

「さっきクリストフがしていた話も、全部知ってた。知ってた黙ってた。」

「…いい、何も言っな。」

「そのせいでお前を苦しめていたなら、俺もギールと同罪だ。」

「…頼むよ、謝らないでくれ。」

カイザがそう言うのと、フィオールは言葉を飲み込んだ。

「…マスターの死顔が、頭を離れない。燃え盛る火の海で死にかけているのに、俺を恨むどころか泣きながら謝ってきて…事もあるうかマスターからもらったナイフで刺したのに。」

嗚咽混じりにたどたどしくカイザは言った。

「俺は取り返しのつかないことをした。お前が謝ることも…マスターが謝ることもない。無知な俺が、全ての元凶なんだよ。」

カイザは顔を上げて、涙を拭った。

「お前、バンディから俺を庇った時に言ったよな。全てを背負って生きていけて…」

「…ああ。」

「あの時、ちゃんと覚悟したんだ。したんだけど…重過ぎて、潰れてしまいそうになる。」

涙を堪え、唇を震わせるカイザ。フィオールはグラスから手を離れた。

「…その重みと寄り添い生きていくことが、背負うってことだ。」
「…」

「許されようと思っちゃいけない。許されるはずなんて、ないんだからな。ずっとその苦しみを胸に刻みつけて忘れないことが唯一で
きる償いなんだ。」

許されたと思った時、それは罪を忘れた時であって償いを終
えた時ではない。

「お前は盗賊、俺は情報屋。罪を重ねて生き延びるしかない俺達に
とって苦行に他ならない。だが、それができないと死ぬしかない。」

「…」

「俺はお前になんて言った。」

「生きる。」

「ギールはお前になんて言った。」

「…」

「…生きる…カイ…」

カイザは、声を上げて泣いた。昨晚から泣き続けても枯れな
い涙。目からボロボロと溢れ出してはグラスに落ちて、酒に波紋を
生んでゆく。フィオルはカイザの頭を優しく撫でた。

「ギールはお前に苦しんで欲しいなんて思っちゃいないだろうが、
忘れるな。重みに耐えきれなくなっても、俺がいる。」

「…ミハエル…マスター…」

「生きる、カイザ。」

「…フィオル…」

気付いた時には、もう遅いこともある。しかし、やり直しの
きかないことなんてない。どんなに躍起になっても失ったものは取
り戻せないが、そんな狭い世界でも見えるものはある。生きていく

道はある。

涙を拭い、何やら一人で笑い出すカイザをフィオルは不思議そうに見つめた。

「…頭おかしくなったか？」

「いや…だてに年取ってないなと思って…」

「なんだよ！5つしか変わらないのに年寄り扱いか?!」

カイザは、そんなに離れてたっけ、なんて戯けながら涙が沈むグラスを手に取った。すっかりご立腹なフィオルをからかい、再び笑顔で酒を交わす。

夜は更けた。甘美な思い出…とは言えないが、どこか微笑ましい懐かしさを胸に、少ししょっぱい酒を飲む。これからもこうしていけたなら…

「…私も…平和な世の中であなだが笑って…幸せそうにしていれば…それで…」

ミハエルの望みだって、叶えてあげられる。カイザはその片鱗を視野に入れながら、久々に安心して酔いしれた。

「…で、これはどういう状況？」

昨晚のことを振り返りながらカイザが聞くと、フィオルが振り返った。

「このまま川の字に寝るかーって言って…本当は壁側で寝たかったけどミハエルさんの隣は遠慮するとかフィオールが言って…仕方なく俺が真ん中に…」

「それは覚えてる！記憶にねえのはこいつだよこいつ！」

フィオールは隣でヘラヘラ笑うクリストフを指差した。

「もー…覚えてないのか？フィオール。」

妖艶な目つきでフィオールを見つめるクリストフ。カイザはミハエルを抱き起こしてベッドから離れた。

「お前ら、俺とミハエルの隣でそんな…」

顔を引き攣らせて軽蔑の眼差しを向けるカイザにフィオールは慌てて首を横に振る。

「無理！無理だから！こいつに手出したら絶対天罰下る！」

「そんな寂しいこと言つなよ、一緒に寝た仲だろー。5分くらい。」

カイザとフィオールの首が同時にぐりんとクリストフの方へ向くと、クリストフは楽しそうに笑って立ち上がった。フィオールは口をパクパクさせている。

「ほら、さっさと支度しろ。もうダリを出て北に向うんだから。」

クリストフに急かされ、二人はのそのそと立ち上がる。

「俺、低血圧なんだよ…」

フラフラと着替えるカイザ。

「俺もだけど…誰かのせいでバッチリ目が覚めた。」

げっそりして部屋を出て行くフィオール。爽やかな朝に調子が悪そうな二人。

「なんか、顔が違うな。」

空の酒瓶を眺めてクリストフが言った。

「あー…結構飲んだし、浮腫んでるかも。」

「違うって。なんか、憑き物が落ちたような顔してる。」

シャツに袖を通してクリストフを見ると、少女は酒瓶を朝日に透かして笑っていた。

「鍵持って辛い思いで決断を述べたあの時より、いい顔だ。」
「…バレてたか。」

カイザは鼻で笑って、ボタンを締める。自分でも気付いていた。追い詰められた今になって一人でないことを教えられ、恐れを抱えた覚悟すら、揺るぎない決意へと変貌していたことに。何でも一人で抱え込んできたカイザをフィオールが変えたのだ。

「ところで…」

クリストフがベッドのミハエルをじっと見つめる。

「お前、エドガーのこと抱いて寝てるんだろ？」

ルークタイをポロリと落として赤面するカイザ。

「な、なんでそれを…」

クリストフは小さく唸りながらミハエルを見つめるばかり。

「や、でもいつもはちゃんと椅子に座らせてるんだ！この前は、ちよつと…」

「お前、ちゃんと洗ってるか？」

慌てふためくカイザに拍子抜けな質問。

「…さすがに、俺は男だし…身体洗うとかは…してない。」

カイザが自信なさ気に答えると、クリストフはきつく目を釣り上げて振り返った。

「肝のちつちえ男だな！死体っていつでもお前が毎度ベタベタ触ってんだから洗ってやらないと可哀想だろ！」

「そんなこと言われても…」

カイザは肩を窄めてルークタイを拾い上げた。

「仕方ねえ、あたしが洗ってやるよ。」

「…」

「フィオールにでもやらせるか？」

「クリストフ、綺麗にしてやってくれ。」

クリストフは得意げに笑ってカイザに歩み寄る。じっと見つ

めてくる少女。カイザは目を泳がせる。

「あとな、まだ言いたいことはある。」

聞きたくない。カイザは反射的に思った。

「お前の格好も気に食わない。」

笑顔で堂々と傷つくことを言い放つクリストフに、カイザは
啞然と立ち尽くす。

「まず上からな。」

「上から下までいくのかよ。」

「なんでシャツにベスト着てルークタイなんかしてるんだ。お前は
貴族か。」

カイザのルークタイを掴んでクリストフは啞呵をきる。

「これはマスターが…」

「それなのに下にはベストと揃いのスーツで…なんだ、それ、シャ
ツプスか？」

カイザの言葉を遮って更に突っ込んでくるクリストフ。

「…まあ、そんな感じだな。」

「カウボーイ気取りか。肝はちっちゃえくせして下は暴れん坊気取
りか。」

「これもマスターが…」

さすがのカイザも、しだいに胸がチクチクと痛み始める。

「その上、右腕には盗賊のアーマーして、貴族、暴れん坊、盗賊の三人が同居してるぞお前一人に。」

さすがのカイザも我慢の限界だった。

「全部マスターが選んだんだよ！生まれた時から自分で服を選んだことなんてない俺に、格好がどうの言われても困る！」

「盗賊のアーマーも、外す気はないのか？」

クリストフの真面目な表情に、カイザは固まった。

「もう盗賊でもなんでもないんだ。それに、これからあたし達は追われる立場になる。目立つ物は身につけない方がいい。」

「……」

カイザはアーマーの腕章に触れた。

「……無理だ。外せない。」

「ギールのことを忘れろと言ってるわけじゃない。」

カイザは静かに首を横に振った。

「わかってる。でも、ブラックメリーを受け継いだ以上、俺は盗賊の後継者だから……」

「まさかとは思うが、盗賊団を継ぐつもりか？」

「無理だろ。頭殺しは大罪だ。でも……それでも俺がマスターから譲り受けたことには変わりない。いつか、本当に継ぐ資格のある奴が現れたら俺を殺してこれを奪い、そいつが新しいマスターとなるだろうから……それまでは、俺が。」

「一生、そのナイフ一本のために追われる身でいようというのか。」

クリストフは眉を顰める。そんな少女に、カイザはふっと、笑いかけた。

「俺は、盗賊だからな。」

「…」

不意打ちの笑みに驚く少女。少し不満げな顔をして、ぷいっとそっぽを向いてしまった。そんな少女の様子に、カイザは首を傾げる。

「…だったらルークタイとシャツプスやめろ。」

「いや、だからこれはマスターが…」

カイザが身につける全てがマスターからの貰い物。クリストフに毒づかれてそのことを思い出したカイザは、身体を包むそれらに悲しさや懐かしさを感じた。これもフィオルの言っていた重みなのだろうか、と考えながらブラックメリーを腰に携える。盗賊である自分は決して誇れる存在ではない。それでもカイザは迷いなく言った。いや、言っていた。自分が何者であるのかを。

「盗賊なら追い剥ぎも朝飯前だろうに、なんでエドガーは…」

「もう勘弁してくれ、」

ズバズバとものと言うクリストフに困り果てるカイザ。

誇りも何もない。ただ生きるために、目的のために、彼は盗賊であり続ける。誰かの思いと、自分の心をぎこちなく重ね合わせながら。

11・女の屁理屈と変貌に男は弱い

ダリを出た三人は大きな街を避けて東へ迂回し、妖精の里ノ
ーラクラウンの宿にいた。

「もう疲れた。」

「俺も…今日明日はゆっくり休もう。」

ベッドに勢いよく倒れ込むフィオール。部屋のソファーにも
たれかかるカイザもぐったりとしながら労わりの言葉をかける。

「あのババア…人をこき使いやがって。」

「俺も今なら言える、ババアって罵れる。」

二人はそれぞれクリストフに言いつけられ、街に寄る度に与
えられた…もとい、押し付けられた仕事をこなしていた。フィオール
は伝説や鍵に関する情報を攪乱させるための操作と、争いに動き出
している者達の情報収集。カイザはフィオールの護衛と、旅の資金
調達で盗賊業。ろくに休まず馬で走り、宿をとった夜は街に出て一
仕事。そんな日々が一週間程続いていたのだ。

「ったくよー！お前は何するんだって聞けば、『あたし？あたしは
エドガーの護衛。』って…要するに何もしねえんだろ！」

枕に顔を埋めて足をバタバタさせるフィオール。

「マフィアに追っかけられて死に物狂いで宿に戻ったら、あいつ酒
飲んで寝てやがった。あの時は本当に窓から放り投げてやりたくな
ったよ。」

カイザがある晩のクリストフを思い出して額に手を当てた。
フィオルは哀れみの目を向けて、大変だったな、と言。そして、
身体をのそりと起こし、うなだれるカイザを見つめた。その視線に
気づくカイザ。

「…何、」

「…お前、何でマフィアや同業者しか狙わねえんだ？」

カイザは言葉を詰まらせ、ふっと視線を逸らす。

「確かに前腕の腕は一流だ。スリも盗みも開錠も…お前の技を見て
ギールが認めるのにも納得した。でもな、さすがに狙いを間違えば
命だって危うい。」

フィオルの言葉に、カイザは表情を澁らせる。

「今危ない橋を渡ることもないだろう？」

カイザは、なんと言っているかわからない自分の心境を、ゆ
っくりと言葉にした。

「…ミハエルを掘り出して業輪が盗まれていると気付いてから、な
んか、盗むってことに嫌悪感が湧いて…」

困りながら話すカイザを、呆れたように笑いながらフィオル
は見つめていた。

「相手がマフィアだろうが同業者だろうが、盗むことには変わりな
いんだが…せめて、誰かの思い出を盗まずに済むなら俺みたいになク

ズを相手にしようって……」

「何言ってるんだよ、」

フィオルはベッドから立ち上がり、カイザの隣に座って彼の肩を抱いた。

「お前はクズなんかじゃない、どうしようもない馬鹿だけだな。」
「……貶してるんだよな、それ。」

煙草に火をつけながら疑いの眼差しを向けるカイザ。フィオルはそんな彼を見て笑った。

「やっぱりお前はギールの後継者だよ！」

フィオルに肩を叩かれながらカイザは首を傾げて煙草を吸った。さっきまで自分の身を案じて怒っていると思わせる雰囲気だったのに……隣で嬉しそうにしているフィオルが不思議でならなかった。

そんな疑問を抱かせた当人、フィオルは、マスターを殺して罪悪感に苛まれていたカイザが無意識のうちにマスターに似てきているのが嬉しくてたまらなかったのだ。

ここでは語られないが、大盗賊ギール・パールマンは知る人ぞ知る英雄だった。それもほんの一時のこと。国を追われて盗賊に成り下がった彼の英雄伝は、また後程。

「今日の収獲はどうだった？」

扉の方を見ると、クリストフが顔を出して覗き込んでいた。

「どっちもぼちぼちつてとこだな。」

煙を吐き出しながらカイザが答えると、眉を顰めたフィオルがクリストフに歩み寄る。

「収獲どうこう聞く前にお前も働け！」

「あたしだって、いつも遊んでばかりいるわけじゃないぞ。」

相変わらず悪意もなく生意気そうに笑うクリストフ。少女は二人の前から姿を消したかと思うと…

「どうだ。可愛いだろ？」

扉から現れたのは、ノーラクラウン土産の服を着せられたミハエルだった。黒い髪に映える淡い赤色の花飾りに、それと揃いの花が散りばめられ、刺繍も施された白い膝丈のドレス。フワフワとした妖精の羽を思わせるパニエから伸びる足の先には、白いビロードの靴。

フィオルは綺麗に着飾られたミハエルを見て、わなわなと震えている。クリストフはそんな彼など知らんふりでミハエルをせつせと椅子に座らせ足を組ませたり、ポーズと取らせたりして楽しんでた。

「やっぱり可愛いな。あたしの見立ては間違ってた！」

「おいババア！何が遊んでばかりいるわけじゃないんだぞ、だ！完全に遊び尽くしてるだろうが！」

フィオルが形相を変えてクリストフに怒鳴りかかる。クリストフはケロっとして振り返った。

「だって、いつも死装束じゃあ可哀想だろ。」

「死人なんだから当たり前だ！それにその金はカイザが汗水垂らして手に入れた金だ！」

「そのカイザは満更でもなさそうだが？」

フィオールがクリストフの視線の先を見ると、俯いたまま動かないカイザがいた。

「おい？カイザ？」

フィオールが彼の顔を覗き込むと、カイザは赤くなった顔を隠すようにそっぽを向いた。その様子にフィオールは呆然と立ち尽くす。クリストフは得意気にカイザに話しかける。

「カイザ、どうだ？」

「…良いと思う。」

照れ臭そうにボソリと感想を述べるカイザ。それを見てニヤニヤするクリストフと、呆れ顔のフィオール。

「数日はここで休むから妖精エドガーを抱いて寝れるぞー。」

「いや、それは…」

からかうクリストフと赤面するカイザを見て、フィオールは言った。

「お前ら…これが死体だってこと忘れてないか？」

クリストフとカイザが一斉にフィオールを睨んだ。その威圧感に顔を引き攣らせて後退りするフィオール。

「これとか言うなよ、ミハエルに。」

カイザが煙草をねじ消して言った。すると、クリストフがそれに便乗する。

「そつだ、謝れ。ついでにあたしをババア呼ばわりしたことも謝れ。」

「そつだそつだ。聖母クリストフになんてことを…」

「カイザてめえ！さつきお前、今ならババアって罵れるとか言つてただろ！」

フィオールとクリストフの言い争いが煩い宿の一室。なんだかんだで三人…いや、四人の旅路も形になつてきていた。妖精の服を着て椅子に座っているミハエルも微笑んでいる…ように見える。

「あ、そつだ。まだ買わなきゃいけない物があつたんだ。」

クリストフが思い出したかのように言った。

「もうすぐ北に入るから防寒着買つぞ。」

フィオールがカイザの首を締める手を止めた。

「なんだよ、昼間市に出たんなら買つとけばよかっただろ…」

「あたしが選んでもいいのか？お前らが着るのに。」

「…」
カイザがフィオールの腕を小刻みに叩くが、彼は黙り込んだまま動かない。

「よし、行くぞ、フィオール。」
「は?!」

やっと放されてカイザは首元を抑え、咳き込んだ。フィォールは嫌そうな顔をしてソファーに立ち上がる。

「今からか?!」
「早くしないと店が閉まる。」
「なんで!カイザは?!」
「留守番。」

カイザは苦しそうに笑った。

「所謂…荷物持ちだな…」

げぼげほと咳き込みながら減らず口を叩くカイザ。それを憎らしそうに見つめるフィオールは首根っこを掴まれて夜の町へと引きずられて行った。

「あ、売ってそうだな。」

夜の市場でクリストフは人並みを掻き分けながら一軒の服屋に足を踏み入れた。フィォールは面倒臭そうにその後を追う。羽織物を物色する少女に、フィォールはブツクサと文句を垂れた。

「何で俺が…」
「お前も見ただろ?」

クリストフは一着の羽織を手を取って鏡を見た。

「嬉しそうだったじゃないか、カイザ。」

「…」

フィオルはミハエルとカイザを思い出していた。旅をするようになって未だに彼の気持ちがわからない。死体の彼女に怖いくらい執着するカイザ。ミハエルが死体にしか見えないフィオルには理解し難い光景だ。フィオルが考え込んでいると、クリストフがくるりと振り返った。

「どうだ？」

白い暖かそうな羽織。裾に黒い火のような模様がついている。

「…ふーん。」

「…意見の一つも言えないのか、お前は。」

目を釣り上げて感想を求めるクリストフ。正直、フィオルはどうでもよかった。そんな彼の視界にある物が飛び込んできた。

「…似合う似合う。でもお前、そんな寒そうな格好の上にそれ一枚だけ羽織るのか？」

フィオルはニタニタしながらクリストフを見つめた。その様子に、少女は怪訝な顔をして羽織をフィオルに投げつけた。

「いやらしい目で見るな、変態。」

「ばっ…そんなじゃねえよ！」

慌てて頭に投げつけられた羽織をズリ下げたフィオールは叫んだ。

「だいたい！そんな下着みたいな格好して谷間見せつけておきながら見るなど言う方がおかしい！」

「これは立派な服だ。うちの国の伝統衣装だ。」

クリストフはぶいっとそっぽを向いて反論する。フィオールも負けじと言い返す。

「そんなの見てくれ襲ってくれと言ってるようなもんだろ！」

「はっ！伝統衣装や流行り物を着てる女を、男は誘惑していると思ってるのか。単純だな。勘違いも甚だしい。」

フィオールはぐつと言葉を飲み込んだ。

「何度でも言う。これは列記とした衣服だ。お前達を発情させるために着ているわけじゃない。」

不敵な笑みを浮かべて言い放つクリストフ。フィオールの中で何かがブチ切れた。

「寒そうだから心配してやったんだよ！お前こそいやらしい目で見られたとか、自意識過剰なんじゃないのか？！」

「実際にさっき怪しげに笑いながらあたしの身体を上から下まで舐めるように見回してただろう。」

フィオールは先程視界に入った物を手に取って、クリストフに見せつけた。

「俺はな！寒くなるからこついつのを着たらいいんじゃないかと思つたんだ！」

フィオールが差し出す服を見て、クリストフは言葉を失った。確かに、暖かそうだ。暖かそうだが…

「…こんなブリブリの服、着れるか。」

クリストフが啞然とするのも当然。フィオールが手にしていたのはミハエルが着ていた物の型違いだったのだ。

「俺は思ったよ、あのミハエルさんよりお前の方が似合つて。」「は？！」

クリストフの奇声が店内に響くと、店員が足早に駆けつけてきた。

「あ、コレ。こいつに試着させてやって。」

フィオールは服を店員に手渡し、クリストフの頭を抑えつけながら試着室に少女をねじ込んだ。

「おい！絶対着ねえぞ！」

「こいつこんなこと言ってるけど照れてるだけだから。力尽くでも着せてやってくれ。」

店員は困惑しながら何故か必死に頷いていた。騒ぐ程嫌がるクリストフと無表情のフィオールに何か唯ならぬ空気を感じたようだ。少女と店員はカーテンの奥に消えた。

ギャーギャーと騒がしい試着室を横目に、フィオールはニヤ

ニヤしながら自分とカイザの羽織を物色していた。彼は普段の鬱憤を晴らすため、少女に似合いそうにもない服を着せて大笑いしてやるうと考えていたのだ。ミハエルとは対極的なクリストフにミハエルが着こなした服の型違いなんて似合うはずがない、と。

「触るな！それくらい自分でできる！」

「しかし、恋人を喜ばせるには外した方が…」

「恋人じゃねえ！」

試着室の会話に、フィオルは固まってしまった。店員にあらぬ誤解を招いてしまったようだ。

「あとは、この靴を履けば旦那様も…」

「旦那じゃねえよ！勝手に話進めんな！」

フィオル選んだ羽織で顔を隠し、しゃがみ込んでしまった少女を辱めるつもりが、自分まで恥ずかしくなってしまうなんて…フィオルはバクバクと音をたてる心臓が落ち着きを取り戻すのをじっと待った。

「…あーもう！それだけは嫌だって！」

少女の叫びと共に、カーテンが勢いよく開いた。驚いたフィオルがしゃがんだまま顔を上げると、そこには頬を赤らめ、困ったようにカーテンを握るクリストフがいた。威圧感を放つ金のアクセサリーを外し、フワフワしたドレスを身に纏った姿は聖母ではなく、まさしく少女であった。

フィオルはすっかり忘れていたが、外見年齢だけならば16、7で誰もが振り返る容姿のクリストフ。似合わないはずが、なかったのだ。フィオルは口を開けて少女を見つめていた。色白なミハ

エルのしつとりとした雰囲気とは違い、クリストフの、ドレスから覗く褐色の肌は無邪気な印象を与える。しかし、カーテンにしがみついて恥らう少女の姿に、フィオールは…

「…負けた。」

「なっ…あたしがエドガーに勝てるわけねえだろ！何考えてんだ！」

怒鳴る少女から目を逸らして羽織に顔を埋め、首を小さく横に振るフィオール。

「…似合ってる。」

「…は？！なっ、何言ってる…」

「可愛い…」

うなだれるフィオールの言葉に、少女は顔を真っ赤にしてカーテンを閉めた。

「ね？旦那様も似合っているとおっしゃって…」

「だから、旦那じゃねえって言ってるんだろ！」

フィオールは目だけ出して試着室の方を見た。そして、また下を向いた。

「…くそっ。ババアのくせに…あれ着たらただのガキにしか見えねえ…」

立ち上がって、少女が放り投げた羽織を拾った。

「…待てよ？そんなガキにときめくなんて…俺…」

フィオールははつと顔を上げた。

「まさか、変態…？」

「誰が変態なんだよ。」

突然背後から声をかけられ、跳ね上がって驚くフィオール。振り返ると、不機嫌そうなクリストフがじっと睨んでいた。いつもの露出度の高い服、派手な金のアクセサリー、黄金色の瞳が埋まる、鋭い吊り目。

「あ、いや…」

「…選んだか。」

フィオールが頷くと、少女は彼が持っていた羽織を受け取って背を向けた。

「次、あたしの靴買いに行くからな。」

そう言つて少女は金を払いに店員のところへ歩いて行つた。その背中を見つめた後、カーテンが開かれた試着室に目を移すフィオール。そこには、脱ぎ散らかされたドレスがあつた。

「…」

女であれば可愛い格好にも憧れるだろうにクリストフからはそういった雰囲気は微塵も感じられない。せつかく似合うのに、どこか勿体無いような気がした。少女は、女としての喜びやなんかを諦めてしまったのだろうか…

フィオールは深く息を吐いて、精算するクリストフの小さな背中を見つめていた。

「また、旦那様とご来店ください。」

「…もう二度とこねえよ。」

眉をヒクつかせてクリストフは言った。もう弁解するのは諦めたようだ。

その様子を見ていたフィオールは考えていた。美女の一人であるミハエルが生きていたとして、カイザと結ばれることはあったのか… 仮にクリストフと自分が結ばれたとして上手くいくのか… 考えても仕方のないことだとわかっていながらも、頭をぐるぐると回る。不思議な不安が、ぐるぐると。

12・そして男は年齢問わず英雄になれる

ノークラウンを訪れて三日目の夜。明日には町を出ようとしていた三人は繁華街の酒場で夕食にしていた。久々の酒に唸り上げるフィオール。カイザも思わず頬を緩めた。

「カイザ本当にありがとう！クリストフに有り金全部奪り取られてもう駄目かと思ったが…お前が稼いでくれるからこんな美味しい酒にありつけた！」

「気にするな、俺もお前がいて助かってる。」

机に突っ伏して泣きながら喜ぶフィオールの肩を、カイザが優しく叩いた。そんな二人を横目に睨む人物が一人。

「おい、あたしにも感謝しろよ。」

「出たな、金の亡者クリストフ。」

肉をつまみながらフィオールが不満気なクリストフを笑う。

「金の亡者って言うな！お前ら男はそういうのに疎いから、あたしが管理してやってんだろうが！」

グラスをテーブルに叩きつけるクリストフ。すると、カイザが顎に指を当てて考えたした。

「そういえば俺、アイダでフィオールの居所を聞いて1万ペルー払ったな…結局、角曲がってすぐのこの酒場で後悔した。」

「あー、俺も。伝説の話聞いて100万ペルー払った。釣りはいらねえ！って言うて。」

札束を叩きつける素振りをして話すフィオル。それを見てクリストフは勢いよく吹き出した。霧吹状になった酒は真正面にいたフィオルの顔面と、その隣のカイザの顔右半分に思いきり吹きかかる。

「お前ら…本当に阿呆だな！」

信じられないと言わんばかりに目を見開いて怒鳴るクリストフ。カイザとフィオルは目を瞑って眉を顰めている。

「そんな使い方してるからいつまでもその日暮らしなんだよ！」
「そんなこと言って、お前だってカイザが稼いだ金で酒飲んだり死体に服買ったり、無駄遣いしてんじゃねえか！」

フィオルが顔を拭きながら言い返す。隣のカイザはうんざりした顔で濡れた部分に布巾を撫でつけていた。

「あれは無駄遣いじゃねえ！そうだよな、カイザ！」

着飾るミハエルを思い出し、また赤面して額に手を当てるカイザ。

「…いい仕事したよ、クリストフ。」

「お前はどっちの味方なんだよ！」

フィオルがテーブルに頭を叩きつけて叫んだ。勝った…と小さく呟いて鼻で笑うクリストフ。カイザは申し訳なさそうにふてくされるフィオルを見つめる。

「とにかくあたしに任せとけばいいんだよ。たまにはこうして贅沢もさせてやるんだから。」

グラスの酒を一気に飲み干すクリストフを睨んでフィオールは言った。

「カイザはもう屈服してるみたいだがな、俺はずっと抗議し続ける！」

激しく言い争う二人にカイザは迷惑そうにしながら言った。

「屈服なんかしてない。でもミハエルの死装束以外の姿が見れて、その…嬉しくて。」

恥ずかしそうにするカイザを見て、堪らず彼の頭を撫でるフィオール。

「そういう素直なところ…可愛いな。」

「…酔ってるだろお前。」

冷たい眼差しでフィオールを見つめ、カイザは酒を口にした。

「でもカイザはエドガーと恋仲だったんだろ？」

クリストフの言葉にカイザは酒を吹き出した。至近距離で顔面に吹きかけられたフィオールは、そのまま固まってしまった。

「だったら、他にもいろんな服着てるところ見れただろ。しかも生きてる時に。」

カイザは表情を曇らせつつ口元を拭く。フィオールもカイザを睨みながら顔を拭いていた。

「…そんな関係じゃない。」

「じゃあ、どんな関係だったんだよ。」

突き詰めてくるクリストフ。言葉を濁らせるカイザ。そこに顔を拭き終えたフィオールがグラスを手にして言った。

「俺も気になってたんだ、もう教えてくれないんじゃないのか？」

こんな優しく問いかける彼だが、内心、何処かで二人に酒をぶっかけてやろうと思っていたのだ。そうとも知らず、カイザは重たい口を開いた。

「俺が…ノースの近くにある墓地へ墓荒らしに行った時、ミハエルと出会ったんだ。」

少しずつ明かされるミハエルとの思い出。出会った満月の夜、怖い夢を見た日、初めて二人で出掛けたこと、鍵を受け取った別れの夜…言葉にすると短いが、カイザの中では永遠のように長く、幸せな日々。

「…俺はミハエルが着飾ったところなんて見たことないんだ。墓守だから知らないけれど、いつも喪服だったから。」

カイザが話し終わると、フィオールは口に含んでいた酒をゴクリと飲み込んで涙を流した。

「よかったな！ミハエルさんの晴れ姿を見て…本当によかったな！」

「…お前やっぱり酔ってるだろ。」

抱きついて泣くフィオールを引き剥がそうとするカイザ。クリストフはしんみりして呟いた。

「お揃いの鍵、ねえ…それってお前が持つてる鍵と業輪のことだよな。」

「…だと思っ。」

そう、盗まれたのはただの宝物ではなく、二人を繋いでいた絆の鍵だったのだとカイザは気付いた。カイザは悲しそうに俯く。

「そりゃあ、余計に探し出さないと。お揃いなんだから。」

クリストフが優しく笑いかける。カイザも微笑み、ああ、と言って頷いた。

「俺も手伝っからな？」

「ありがとっ、離れろ。」

酔っ払って絡んでくるフィオールがうざったくて仕方ないカイザは片手で遠ざけながら酒を飲む。それを見てクリストフは笑っていた。そんな時、

「見つけたぞ！」

「捕らえろ！」

騒がしくなる外。クリストフはピクリと眉を動かして窓から

顔を出した。

「なんだ？うるせーな。」

フィオールも窓を開けた。カイザも身を擦らせてひょっこり外を覗き込む。三階からでは少し遠いが…通りが何やら騒がしい。すると、三人が顔を出す窓の下で人混みから飛び出してきた女が一人派手に転んだ。

「おーい、どうしたー？」

下に向かって叫ぶクリストフ。女が三人に気付いて顔を上げた。その姿に、カイザとフィオールは驚いた。

真っ赤な髪に真っ赤な瞳。何より、闇に艶めく真っ赤な唇…情熱的な風貌とは裏腹に小動物のように瞳を潤ませる可愛い顔立ち。

「び、美人！なんで！あんな子がいるのになんでクリストフが神の寵愛を…」

クリストフはフィオールの頭を鷲掴みにして窓の縁に押し付けた。

「いてえ！」

「…あの子、何だ？」

クリストフは何も答えない。赤い女ははつと振り返り、慌てて立ち上がる。女の視線の先には十人程の兵士がいた。兵士は女にずりずりと寄ってゆく。後退りする女の前に、小さな少年が飛び出してきて大きく両手を広げた。ざわめく人並みに、増える野次馬。

「そこをどけ！」

兵士を率いていると思われる男が少年に剣を突きつけるが、少年は動こうとしない。

「坊や、逃げて！」

女の言葉も聞き入れようとしない。

「おい…やばいんじゃないか？」

苦しそうにフィオールがそう言うと、クリストフは手を離れた。

「あの女、森に食われてる。」

「森に？」

クリストフの呟きにカイザが問いかけるが、やはり少女は下をじっと見つめるばかり。

「邪魔をするならこの場で切り捨てる！」

兵士がそう叫ぶと、人混みがどよめいた。少年はそれでも兵士を睨み続け、言った。

「お前らが…お前らが悪いんだ！みんな知ってるんだぞ！領主が何をしたか！」

少年が叫ぶと、急に静かになった。

「妖精を虐めたから、森の恵も受けられなくなった！姫様が死んだのも、お前らのせいだ！領主のせいだ！」

「黙れ！」

兵士が剣を振り上げた。悲鳴が上がり、見ている者達が息を飲む。カイザとフィオールが窓から飛び降りようと身を乗り出した。が、身体が窓に引っかかってしまった。二人は互いを邪魔だといがみ合う。

「やめて！」

女の声に二人が視線を窓の外に向けると、女が少年を庇って抱き締めている。剣が振り下ろされ、血が噴き上がるのを皆が覚悟した。フィオールは、目を瞑って顔を背けた。

…沈黙。フィオールがゆっくり瞼を開くと、隣には口を開けて驚いているカイザがいた。その視線の先には…

「女の尻追っかけて餓鬼に手をかけるなんて…この兵士は山賊以下だな。」

「…は？え？クリストフ？！」

少女がいたはずの席を二度見して驚くフィオール。兵士の剣先を人差し指と中指で挟みつけて笑うクリストフに、カイザは言葉を失っている。

「なんだお前は！邪魔をするならお前も…」
「あたしを？どうするの？」

クリストフは指先で剣を真つ二つにへし折った。それを見て再びどよめく人混み。更に口が開いてゆくカイザとフィオール。

「なっ……」

「臭い尻尾巻いて逃げたらどうだ？ 兵士さん？」

クリストフの挑発的な態度に顔を赤くして怒り始める兵士。

「この女も捕らえろ！ 邪魔をする奴は皆、反逆罪だ！」

折れた剣を振りかざす兵士。後ろで群れていた兵士達がクリストフへと向かってゆく。それを見てカイザとフィオールは再び窓の外に身を乗り出した。が、今度は引つかかることなく、窓枠ごと下に落ちてゆく。二人の叫び声に気付いたクリストフが女と少年を抱いて退くと、二人は見事に兵士達の上に着地。いや、落下した。

「いつ……てえ……」

「あ、取れたぞ、窓枠。」

下側のフィオールは腰を抑えながらヨロヨロと立ち上がる。うまい事上になったカイザはピンピンしていた。そんな二人の周りには、伸びた数人の兵士と木っ端微塵になった窓枠。クリストフは腹を抱えて笑っていたが、女と少年は啞然として二人を見つめていた。

「格好悪い登場だな！」

「うるせー！ 窓が狭いのが悪いんだよ！ ついでに抜け駆けしたお前もな！」

フィオールが痛みと恥ずかしさのあまり爆笑するクリストフ

に八つ当たりする。その背後では兵士の一人が剣を振り上げていた。女がそれに気付いた。

「危ない！」

フィオールは振り返り様に持っていた荷物で兵士を殴りつけた。

「てめえはすっこんでろ！」

情報屋フィオールの荷物は殆どが商売のための資料。分厚く硬いそれを脳天に喰らった兵士はぼったりと倒れて動かなくなった。その向こうではナイフ一本で兵士数人と応戦するカイザがいた。

「やっちまえ！」

「くたばれ兵士共！」

しだいに里の住民達はカイザ達を支援し始める。兵士を次々と片付けてゆくカイザとフィオール。酒瓶片手に高みの見物をするクリストフ。四面楚歌の雰囲気、率いていた男は震える足で逃げ出そうとした。

「あ！待てこら！」

フィオールがそれに気付くと、男は踵を翻して走り出す。

「部下を見捨ててやるなよ、」

男は何時の間にか目の前に立ち塞がっていたクリストフに驚き、その場に尻餅をついた。クリストフはにっこりと笑って男の頭

を蹴り飛ばした。男は勢いよく屋台に頭を突っ込み、動かなくな
た。

「そいつから金目の物はすったし、もう逃がしたかったのに…そう
したら伸びてる兵士をネタに一稼ぎできたぞ。」

カイザが男からすった剣や金の紋章を手にも文句を垂れた。

「さすがカイザ！なんかもう、職業病だな！」

「…お前こそ真の金の亡者だよ。」

関心するフィオールと呆れるクリストフ。三人を囲む住人達
は歓声を上げて三人を褒め称えた。

「すげえぞ！」

「兵士共、ざまあみろ！」

そんな中、人混みに逃げていた少年と女が駆け寄ってきた。

「おねえちゃんたち、格好よかった！ありがとう！」

笑顔で感謝する少年の頭を、クリストフは優しく撫でた。

「ボウズも格好よかったぞー、な？」

クリストフが女に同意を求めると、女は泣きそうな笑顔で頷
いた。

「ありがとう、坊や。ありがとう、見知らぬお方。」

頭を深々と下げる女に、微笑む三人。

「なんかよくわからねえけど、いい事したし飲みなおすか！」

そう言つて歩き出すフィオールに続いてカイザとクリストフも歓声の中、女に背を向けた。

「うちで飲んで行きな！今日は気分もいいし奢るよ！」

気前の良さそうな太った女性が三人に声をかけてきた。

「いいのか？」

クリストフが聞くと豪快に笑つて女性は言つた。

「当たり前だろ？坊やと妖精を救つてくれたんだからねえ！」

カイザとフィオールが顔を見合わせる。クリストフは何かを知っているようであつたが、じつと黙っていた。

「あ、あのー！」

カイザとフィオールが振り返ると、女が物言いたげに見つめていた。そして、黙っていたクリストフが口を開いた。

「…おばちゃん、あの妖精さんも一緒にご馳走してもらつてもいいか？」

クリストフの言葉に、カイザとフィオールは少女と女を交互に見つめた。

「よ、妖精？」

「あの美人さんが？」

困惑している二人を他所に、おばちゃんは景気よく言った。

「いいよいいよ！四名様御来店ー！」

そう言っておばちゃんが入って行ったのは、カイザとフィオルが窓枠をぶち壊した店だった。更に驚く二人。

「…俺、今酒飲んでたら絶対吹き出してた。」

顔を引き攣らせてカイザが言った。

「俺も…鼻から肉も吹き出てたよ。」

両手で顔を覆って嘆くフィオル。女が妖精だと言われた驚きと、おばちゃんの店で窓の弁償を要求されないかという不安に二人の表情は何やら複雑だ。しかし、女を連れて重たい足取りで店に戻った。住人達の歓声を、背中に浴びながら。

13・そんな男は女の涙に特に弱い

肩を窄めてもといた席に戻る二人だったが、おばちゃんは窓のこ
となど全く気にしていなかった。大きな見た目に見合った大きな器
の女性であることに安堵し、ホッと窄めていた肩を撫で下ろす二人。

「なーに！このくらい気にしないでいいからじゃんじゃん飲みな！」
「ありがとうおばちゃん…じゃあ、とりあえず酒で！」

遠慮無しに注文をするフィオール。

「はいはい、いい酒が入ったから持ってくるからね！」

おばちゃんはニコニコしながらその場を去って行った。

「いい人でよかったな。」

「本当だよ。」

もしもの事があつたら飯代も踏み倒して逃げるしかないと思
っていたカイザは脱力して椅子に寄りかかっていた。フィオールの
言つとおり、もうこれは立派な職業病だ。

「…それより名前、まだ聞いてなかったな。」

クリストフが真剣な声色で言った。安堵していた二人も、ク
リストフの隣に座る女を見た。女は名乗ることを渋っている様子だ。

「そりゃあ、言えないよな…お前、人間だし。」

「…は?!」

グラスを手にするクリストフの言葉に、フィオールは声を荒げた。カイザは眉を顰めて首を傾げている。もう何がなんだかわかっていない。女は俯いてじっと黙り込む。

「お待たせー!」

そこに、おばちゃんが葡萄酒の瓶と料理を持ってやってきた。

「…なんだい?皆して黙りして。」

テーブルの空気を敏感に読み取るおばちゃんに、フィオールは慌てて言った。

「いや、大丈夫だから!皆緊張してるだけだから!」

「そうかい。あんたら見たところ余所者のようだし、妖精を見たのも初めてだろうしねえ。いろいろ話聞いて楽しんで行きな!」

アイダのマスターといい、ここのおばちゃんといい…酒場の店員は侮れない。去ってゆくおばちゃんの背中を見つめて、そう、フィオールは思った。

「…なあ、あんたは何者なんだ。」

静かなテーブルで、カイザは口を開いた。

「…」

「店主は妖精と言うし、クリストフは人間だと言うし…」

女は困った顔をして、瞳に涙を浮かべる。カイザはそれを見てギョツとした。

「おい！泣かすなよ！」

フィオールがカイザの耳元で囁く。

「俺はただ…」

カイザもオロオロと困っていると、クリストフが溜息をついた。

「この女は妖精に見初められ、人間じゃなくなってるんだよ。勿論、完全な妖精でもない。」

クリストフがそう言うと、カイザとフィオールは表情を一変した。

「妖精に見初められたって…フィオールの話と同じ…」

フィオールがノーラクラウンで収集した情報は伝説と関係のない、国の情勢についてばかりだった。その中に、城の塔に閉じ込められていた姫が妖精に見初められ、火事で燃え死んだという話があったのだ。話によると、姫を妖精に差し出さなかった事で妖精は怒って火事を起こし、森の恵も受けられないようにしたんだとか。この話を知っていた三人は少年の訴えを理解していた。クリストフ以外は夢物語だと信じていなかったが。

「…どういうことだ？姫は死んで？この子が見初められて？名前が言えない？」

混乱しているフィオールに呆れるクリストフは、グラスの酒を飲み干し葡萄酒の瓶を取ってグラスに注ぐ。

「この女が、そのお姫様なんだよ。」

クリストフの言葉に、まだちんぷんかんぷんなフィオール。

「そういうことか……」

「え?! どういうことだよ!」

フィオールは一人で納得するカイザの肩を掴んで問いかけた。

「だから、死んだと思われていた姫は実は生きてたんだよ。そして、今は妖精としてここにいる。」

「へえー……」

カイザの説明に腑抜けた返事をしてフィオールが女に目を移すと、女はポロポロと涙を流していた。

「ななな、泣かないで! 俺らが泣かしたみたいになる!」

フィオールはあたふたして意味も無く手を動かしている。女はぐずりながらゆっくりと話し出した。

「…おっしゃる通り、わたくしは領主の娘ニアにございます。」

クリストフは泣いているニアにナプキンを手渡した。ニアはぺこりと頭を下げ、それを受け取る。

「皆さんの腕前を見込んで、お願いがございます。どうか、塔に囚われた我が夫…火の妖精である夫と娘を…助けてください。」

嗚咽しながら弱々しく切願するニア。

「いいぞ。」

即答するクリストフに驚いてカイザは啜えていた煙草をポロリと落とした。頼んだ本人も驚いていた。

「ちょっと待てよ…」

「いいじゃねえか、カイザ。美人が困ってるんだぞ？」

話もわかっていなかったくせに何故かノリに乗っているフィオール。

「そうじゃなくて、いいのか？俺達なんかで。」

カイザが聞くと、ニアはコクコクと頷いた。

「なんかってなんだ。なんかって。」

クリストフが葡萄酒の瓶を握り締めてカイザを睨んだ。

「だって…なあ？あんたの隣にいるのは金に煩い山賊。俺の隣のこいつは短気な情報屋…」

カイザの酷い紹介に、ニアは不安気な顔で聞いた。

「…あなた様は…？」

「俺？俺は…」
「根暗な盗賊だ。」

クリストフがサラリと言った。カイザは深く頷いて同意しているフィオールを横目で睨み、ニアに向き直った。

「…とりあえず、こんなのはっかりだ。頼むなら他の奴にした方がいいと思う。それに…俺達はこれでも先を急いでいるんだ。」

ニアは一瞬黙り込み、フルフルと首を横に振ってカイザに真剣な眼差しを向けた。この時三人は、あ、こいつ今迷ったな、と心の中で呟いていた。

「お急ぎのところ、図々しいことは承知の上でお頼み申し上げます。どうか…どうか夫と娘を！」

考えを変えさせたかったカイザは当てが外れて困ったように俯く。そんな彼に、葡萄酒を独り占めするクリストフが言った。

「いいだろ、妖精一匹と娘一人塔から連れ出すだけなんだ。帰りしなにでもやってやるうじゃないか。」

ニアの表情がぱあっと明るくなる。それに反して、カイザの表情が曇ってゆく。

「目立つことはしない方がいいんじゃないのか？急ぐ身でありながら追われる身でもあるわけだし。」

「そんな急いでもどうせダンテを探すのに時間はかかる。少しくらい寄り道してもいいだろ。」

クリストフの言動に、カイザは違和感を感じていた。どうもこのニアという娘に拘っているように思える。それに、彼女が隣に座ってからクリストフは一度も笑っていない。普段ならどんな時でも憎たらしくなる程ニヤニヤと笑っているのに。

「そうと決まれば作戦立てないとな…」

、
フィオールは酒も入って妙な張り切り方をしている。カイザは一つ溜息をついて、クリストフの言い分に折れた。

「ありがとうございます…皆さん！」

再び泣き始めるニアに優しく微笑みかけるクリストフ。そんな少女を、カイザは煙草の煙越しに見つめていた。

14・幸せの先にも不幸の先にも死が待っている

「クリストフ、」

「なんだよ、眠いから話しかけるな。」

フィオールの酈が響く狭い部屋。そこはニアに案内された妖精の隠れ家であった。ニアを助けたことで町の宿に身を置くのは危ないだろうということになり、酒屋を出てすぐに移動していたのだ。そしてノーラクラウンを出る前にニアの夫と娘を助けるため、夜が明けたらすぐ塔へと向かう。

木の匂いが立ち込める窓一つない暗がり、カイザは言った。

「なんであんな面倒を引き受ける気になった。兵士を追っ払うのは訳が違う。」

「…気まぐれだ。」

クリストフはカイザに背を向けて不機嫌そうに返事をした。

カイザは低い天井を見つめながら、再び話しかける。

「お前は人助けなんてする柄じゃない。何か思うことがあったんだろ。」

「…あたしは仮にも聖母だ。」

クリストフはモソモソとうつ伏せになって枕元の煙管を手探りで取った。

「気まぐれで無償に人を助けもする。」

クリストフは煙管に火をつけた。

「お前は聖母なんかじゃない。」

煙を吐き出し、クリストフはそこにいるであろうカイザを横目に睨む。

「…ほんつとに失礼なことを…」

「お前は普通の女だ。」

カイザの言葉に、クリストフは一瞬固まった。そして、鼻で笑った。

「…何言つてんだよ。あたしが普通？ 剣をいとも簡単にへし折る女だぞ？ この形で息子がいて、山賊を従えて…」

「生意気で、ガサツで…たまに優しい、身内には。」

困惑するクリストフにカイザは淡々と話し続ける。

「困った人間がいれば助ける…なんて聖人君子は想像の産物でしかない。人は何か心動かされるものがない限り、誰かを助けようなんて思わない。」

「…あたしが、人？」

「違うのか？」

暗闇で薄っすらと見える互いの目を見つめ合う二人。その一瞬が、少女はとてつもなく長く感じた。

長い時間の波に揺られ、感情もボヤけて傲慢な誇大妄想だけが自分というものを保っていた日々。聖母として崇められ、ローザとして外に出て、少女は自分が人であることすら忘れて生きてきた。そんな少女が見せた、人らしく感情で動く姿をカイザは見逃さなが

った。そして、今もこの暗闇で少女を見つめている。聖母でもなく、母でもない。少女自身を見つめている。

「…」

少女は黄金色の目を泳がせ、口元だけで笑った。

「…カイザ、エドガーとお前が出会ったのは偶然なんかじゃないかもな。」

カイザはゆっくりと身体を起こし、椅子に腰掛けるミハエルを見た。運命すら感じていた出会いだったが、他人に言われると不思議な気持ちになる。

「あたし達を人扱いするなんて、お前は変わってるよ。」

「…人が人である定義すら曖昧だ。ミハエルがエドガーだと知っても、死体だとわかっていても、俺は…」

彼女が彼女の形を成してそこにある。それだけでカイザにとつては人であるに足る。いや、愛するに値する。それは彼女だからであって、もしカイザがミハエルと出会わなければ寵愛を受けた美女達を人として見たかは定かでない。全ては、彼女が基準となる考えでしかないのだ。

「…そうか。わかった。」

少女はカイザが詰まらせた言葉の先にある意を察した。カイザの都合のいい解釈でしかないそれすら、少女は嬉しかった。

「お前の言うとおりだ、カイザ。」

クリストフも身体を起こした。そして、ランプを手に取り、明かりをつける。すると、フィオールが渋い顔をして薄っすらと目を開いた。

「…なんだ？」

背後でのそのそと起き上がる彼を他所に、クリストフは真剣な眼差しをカイザに向ける。リノアの地下通路で見たときのように、黄金色の目をテラテラと、鋭く光らせて。

「教えてやるよ、あのお姫様を助けようと思った理由。」

「…そんな目をするなんて、秘められた真実でも明かすような雰囲気だな。」

クリストフは、眉を寄せて俯く。その様子にカイザはただ黙っていた。凶星であると、わかったからだ。

「おい、どうしたんだ？」

目を擦りながら問いかけるフィオールに、カイザは言った。

「今からもう一つ、クリストフが明かしてくれるんだよ。」

「明かす？」

カイザはクリストフの背後で首を傾げるフィオールを見た。

「…たぶん、業輪の秘密。」

カイザの言葉に、フィオールとクリストフは驚いた顔をした。

少女に至っては、恐れをなしているようにも見える。

「…何故、わかる。」

「勘だ。」

クリストフは驚いたことを悔いてムツとする。クリストフはチラッとカイザを見て、布団から立ち上がり二人に背を向けた。そして、左腕にしていた山賊のアーマーを外した。

「…これが、業輪を手にした者の運命…違うな、人外の者に見初められた者の宿命だ。」

声も出さずに見つめる二人。その視線の先には、赤黒い蛇の鱗のような痣が広がる少女の左腕があった。肩から指先まで痛々しく広がるそれは、今にも波打ち出すのではないかと思う程にくつきりと闇に浮かび上がる。

「クリストフ…それは…」

フィオールが声を絞り出して聞いた。クリストフは背を向けたまま、言った。

「…与えられると同時に、使命も課せられる。あたし達四人は部屋を開くためこの痛みを身体に刻むことを義務付けられた。」

少女の声は、酷く小さく、震えている。その様子から刻んだ痛みとやらがどれ程のものであったか、カイザとフィオールは漠然と思い浮かべてみるが…あの強気な少女が思い出すだけで震えているのだ、想像もつかない。

「なんで…神はお前達を愛しているんじゃないのかよ！」

フィオルが立ち上がって強く問いかける。クリストフは左腕にアーマーをはめながら首をうなだれた。

「…」

「なんで黙ってるんだよ！」

フィオルは少女の肩を掴んで無理矢理振り返らせた。そして、立ち尽くしてしまった。何故なら、少女が静かに泣いていたからだ。眉を顰めて涙を流すその姿を見て、フィオルは小さく首を横に振った。

「…お前が泣いているのに、なんで、神は…」

フィオルは、思わず少女を抱き締めた。背の高いフィオルの腕の中に、華奢な少女はすっぽりと収まってしまう。

「…」

カイザは、ミハエルを抱いて部屋から飛び出した。すぐ表は月が明るく照らし出す森になっている。本来ならば人が立ち入ることのできない森の一角…それが、妖精の住処。外の切株に腰掛け、カイザはミハエルを見つめた。固く閉じた瞼、薄い桃色の唇、陶器のような白い肌、胸元の紐の蝶結び。それを解けば、滑らかな肌が露わになる…はず。そう思いながらも、脳裏では写真を捲るようにクリストフの左腕が交錯する。そして、震える手で死装束に手を伸ばす。

「見ない方が、宜しいのでは？」

カイザが顔を上げると、森の影に人影が見えた。それはゆっくり近づいてきて、月の下で明るみが出る。

「…ニア、」

ニアは悲しそうに笑って、カイザに歩み寄る。

「あの方はわたくしを哀れんでくださったのです。」

「あの方って…クリストフ、だよな。」

カイザの隣に座って、笑顔で頷くニア。カイザはミハエルの服に伸ばしかけていた手を引っ込めて、その冷たい肩を抱き寄せた。そして、愛おしそうに頭を撫でる。

「…わたくしの命があと僅かだと、あの方は察したのでしょうか。」

カイザは穏やかな声で言うニアを見た。彼女はやはり、笑っていた。

「クリストフ様やわたくしのように人ならざる方から寵愛を受ける者は、必ず使命を課せられます。」

「使命…」

「ええ。クリストフ様は生きとし生けるものの全ての罪や業を痛みに変えて償い、大地の歪みを正すのが使命です。業を司る蛇に蝕まれた左腕は、使命を遂行してきた証。そして、痛みの代償に特別な一室を得た…」

真っ直ぐに森の影を見つめてニアは言った。

「わたくしも、父の罪を償わねばなりませんでした。そのためには……人を辞めねばならなかったのです。」

「人を辞めるのに、どうして死ななくてはならない。」

カイザが聞くと、ニアはふっと笑ってカイザを見た。真っ赤な瞳が、瑞々しい。

「……そればかりは、わかりません。しかし、人でもない、妖精でもないわたくしを束の間でも夫は愛してくれる……それが命の代償にわたくしが賜る、”特別な一室”なのです。」

カイザは辛そうな顔をして俯いた。

「……怖くないのか。」

「ええ。夫に出逢わなければ、愛も何も知らないままに一生を終えていたでしょうから。短くとも幸せな日々を与えられたことに、感謝しています。」

遠い昔を思い出すかのように空を見上げるニアの横顔に、カイザはかつてのミハエルを重ねていた。あの時、ミハエルもこんな満ち足りた顔をしていた。幸せを噛み締め、死を覚悟しているニアのように……

—————

北のダンテは大気の穢れを払う。東のヤヒコは海の淀みを清める。南のクリストフは大地の歪みを正す。西のエドガーは月の姿を留める。業輪をもって使命を果たし、四人の手の内で回すことによって秩序と均衡を保つ。身体に刻まれし慰痕がその身を覆いし時、美女は永遠の魂を得て天界に住まうことを許される。

黒い雨が降る夏の日。少女の呻き声が屋敷に響いていた。

「母さん！母さん！」

痛みのあまり痙攣している少女の傍らで、ガトーが必死に呼び掛ける。少女はベッドの上で屈み左腕を抑えたまま時折小さく呻く。

ガトーは今にも泣き出しそうな顔で少女を見つめる。

「…いかない。永遠の魂などいかない！」

少女はガクガクと震える手で枕元の業輪を掴んだ。乱れた髪、見開かれた焦点の合わない目。少女は形相を変えて叫んだ。

「いつまでこの痛みに耐えねばならぬ！20年もこの様だ！もう…」

沢山だ！」

「母さん！何をする気ですか！」

業輪を床に叩きつけようとする少女を、ガトーが抑えつけた。

「放せ！」

「そんなことをしては、ヤヒコ様の痛みに耐え抜いた苦勞が水の泡になってしまいます！」

ガトーがそう言うと、少女は大人しくなった。茫然と涙を流しながら、首に下げていた鍵を手にした。鍵の装飾をなぞる細い指は、蛇が這いずる鱗の痕で痛々しく赤く腫れ上がっている。

「…業輪が無くなってしまったら、世界は…もう…」

ガトーが荒い息を整えながら、少女の背中を見つめた。まだ、小さく震えている。

「…」

「変わって差し上げられるなら、俺が…」

「よい。」

ガトーが顔を上げると、少女の震えは止まっていた。

「これを手放すには痛みを業輪に捧げて使命を果たし、部屋を開かねばならぬ。だったら…その扉をこじ開ければよいではないか。」

「…何を、」

少女は業輪の鍵穴に持っていた鍵を差し込んだ。そしてガチャガチャと回らぬ鍵を捻る。

「やめてください！壊れてしまいます！」

ガトーが慌てて止めに入るが、少女はその手を放そうとしない。泣きながら、叫ぶ。

「開け！開け！」

「今手放してもいずれまた回ってきます！俺が父さんに変わってあげられるよう頼みますから！だから…！」

母の悲痛な叫びにガトーは涙ながらに訴えるが…届かない。

「開け！」

その瞬間、固く動こうとしなかった鍵は…回った。
黒い雨が降り注ぐ中、二人は外にいた。灰色の雲を纏う、猛々しい山を見上げながら。

――今手放してもいずれまた回ってきます！――

生きとし生けるものの全ての業を、世界の秩序と均衡を保つための力に変える…終わりの見えない痛みとの闘い。それを思い出していた少女には、高い山が自分に使命を果たすよう威圧しているかのように見える。これを背負うならば、痛みも刻め…と。扉を開いて開放されるはずが、何故か、逃げられない絶望感に見舞われていた。雨に打たれながら、業輪を片手に開かれた門の前で立ち尽くす少女。ガトーは地面に蹲り、泣いていた。

「母さんをお許してください！父さん…！」

ガトーの懺悔の言葉を背中に聞き、少女も泣いた。聖母にならねば…そう、自分を責め立てながら。

――

「それでもお前は…業輪を探すのか？」

「…」

嗚咽するクリストフの頭を撫でながら、フィオールは聞いた。クリストフは彼の腕の中で、低く呟く。

「…もうとつくにあたしに回って来てるはずなんだ。本当は。」

クリストフの息がだんだん荒くなつてゆく。

「でも…回って来なかった。何度目かの宴で…エドガーが持ち続けていたことを知った。」

フィオールは少女をキツく抱き締める。

「あいつ…あたし達を気遣って部屋も開かずに墓守をしながら、ずっと一人で。それに気付いていながら…あたし達はエドガーから業輪を受け取ろうとはしなかった！鍵戦争はそんなあたし達への罰なんだ！」

クリストフはフィオールの服を握りしめる。

「妖精に見初められて死にかけたニアと自分を重ねたりして…あたしはニアを助けたかったんじゃない！あたしは…！」

フィオールは叫ぶ少女の唇に、強引に唇を重ねた。クリストフは言葉を失った。蠟燭が揺らぐ暗い部屋。静かに、フィオールは唇を放した。驚きのあまり固まっている少女が見つめる先には、真剣な眼差しを向けるフィオールがいた。その青い瞳が、少女の涙腺をまた刺激する。

「…お前は充分苦しんだ。もう、聖母なんて辞める。」

少女はフィオールの優しい声に涙を流した。

「無理だ。そんなこと…山も失い、不老でもなくなる。」

フィオルはクリストフの両肩に手を置いたまま、眉を顰めた。

「あたし一人のせいで世界は崩壊する！」

「それでも俺がいる！」

フィオルは強く、しかし穏やかに言った。

「山が無くても俺がお前を食わせてやる。不老でなくても、俺も一緒に老いていく。」

フィオルはクリストフを抱き締めた。

「世界が崩壊するその日まで…俺はお前の側にいる。」
「…」

彼の腕の中で、クリストフはカイザを思い出していた。ミハエルの死体を悲しげに見つめ、昔の思い出を、愛おしそうに語る…

「クリストフ…死ぬことだって、そう悪くない。」

カイザの気持ち、なんとなく理解できるような気がした。そして、漠然とミハエルが羨ましいと思っていたことにも納得がいった。少女は、人に愛されたかったのだ。愛されたうえで、許されなかった。

――お前は、聖母なんかじゃない。――

「…そうだな。」

少女はフィオルの広い背中に手を回し、その胸に涙を拭いた。

「でも、もう大丈夫だ。」

少女は涙を流しながら笑った。

月が照らす赤い唇を緩ませ、ニアは言った。

「夫と寄り添えるなら、何も望みません。そのためならば…命だつて惜しくはありません。」

「お前が生きる世界のためならば、痛みにだって耐えられそうだ。」

「幸せに死ねるなら。」

「お前が側にいてくれるなら…」

少女の笑顔がフィオルの目に映った瞬間、部屋の灯りが消えた。暗闇の中、フィオルは手探りでクリストフの唇をなぞる。クリストフも、フィオルの頬に手を伸ばした。そして、二人は顔を近付ける。

「…ニア、」

カイザはミハエルの肩を強く抱いて、聞いた。

「お前の目に、俺はどう映っている。」

ニアは少し考え、カイザを見た。

「…美しいです。美しくて…悲しい。」

「…」
「あなた様もわたくしも、なんら変わらない。自分の愛を貫きたいだけ…それは美しいことだけれど、時折、悲しいものです。」

清々しい笑顔で、頬に涙を伝わせるニアをカイザはただ、見つめた。赤い瞳の置くで燃える火が、本当は夫と未長く寄り添いたという本心を訴えかけてくるようで…切なかった。

重ねた唇を離して、フィオルが言った。

「…もう寝よう。カイザが戻ってくる。」
「そうだな…」

クリストフも暗がりで頷き、二人はもといいた布団にゆっくりと戻る。そして、互いに背を向けて横になった。

「…」
「…」

「…明日からどんな顔してお前と会えばいいんだ。」
「それを言つなよ！俺も迷ってたんだから！」

ガバツと起き上がって恥ずかしさに頭を抱えるフィオール。
クリストフは、小さく笑った。そんな少女の笑い声を耳にして、フィオールは勢いよく横になり布団をかぶった。

「もう寝ろ！」
「言われなくても寝る。」

クリストフは笑いを堪えて、瞼を閉じた。

「…さっき言ったこと、俺は本気だからな。」

フィオールがぼそりと呟く。

「…あたしも、本心だよ。」

クリストフの言葉を最後に、沈黙が広がる。しかしその沈黙は僅かに熱を帯びていて、なかなか二人は眠りにつけなかった。結局、眠れぬままカイザとミハエルが戻って来た。川の字になってうとうとする三人は、それぞれに違うことを考えていた。フィオール

は業輪について、クリストフは自分の未来について、カイザはミハエルについて…それでも三人は共に旅をして行く。道を違える、その日まで。

15・知らない懐かしさは夢の果てに

まだ日の上がりきらない明朝未明。

「起きろ。」

「…ぎゃーっ！」

フィオルの悲鳴でカイザは眉を顰めてゆつくりと瞼を開けた。ランプの光が揺らめく天井から、声の聞こえた方へ視線を移しながら身体を起こす。

「おっ、お前！いつから…?!」

視線の先には慌てふためくフィオルの布団に潜り込んでいるクリストフがいた。カイザは一瞬身を引いたが、昨晚のことを思い出して冷静になった。そして、あー…と気の抜ける声を出す。

「そつえば、お前らはそういう関係だった…じゃなくて、そういう関係になったんだっけ。」

カイザの呟きにフィオルが喉から変な音を出して顔を真っ赤にする。首だけ振り返るクリストフはニヤニヤしていた。

「ちっ、違う！」

「あんなことしておいて冷たいこと言うなよ、フィオル。」
「い、いや！その！」

耳まで赤いフィオルを見て、カイザは布団から出てミハエ

ルを抱き上げた。

「…お前ら、何かあったの？いや、したの？」

「何もねーよ！」

フィオールがカイザに枕を投げつけた。カイザはそれを叩き落として二人を睨む。すると、ケラケラと笑いながらクリストフが言った。

「そう照れるなよ。一つの布団で寝た仲だろー、10分くらい。」

二人はぐりんと一斉にクリストフを見た。少女は楽しそうに笑いながら立ち上がった。

「準備しろ。そろそろ行くぞ。」

「…もう少し驚かさないように起こせないのか？」

フィオールが頭を抱えてうなだれた。カイザもぐったりしている。

「もう面倒だから結婚しろよお前ら。結婚して新婚旅行でもなんでもいいから遠くに行ってくれ。朝がしんどい…」

カイザはミハエルを椅子に戻してダラダラと着替え始める。フィオールはそんなカイザの背中にバサッと布団を投げ飛ばした。

「俺だって毎朝しんどいんだよ！」

「しんどいのか…？」

クリストフが包帯でグルグル巻きにした左手にアーマーをは

めながらフィオールを見た。

「ち、ちがつ…！」

フラフラと立ち上がり、フィオールは顔を赤らめる。カイザは深く溜息をついた。

「なんだよ、ハッキリしないな。男のくせに。」

フィオールはカイザの言葉に舌打ちをした。

「じゃあハッキリさせてやるよ！俺はクリストフが…！」
「そういえばカイザ、」

クリストフがフィオールの言葉を遮った。フィオールは帽子を握り締めたまま固まっている。

「昨日の質問に…答えてなかったな。」
「質問って…」

荷物をまとめるクリストフを見ながら、カイザは昨晚の事を思い返した。

「ー教えてやるよ、あたしがあのお姫様を助けようと思った理由…」
「ー」

「ああ…」
「あれは、あたしが…」
「いや、いい。」

クリストフはカイザを見た。カイザはベストのボタンに視線を落とした。

「ニアから、聞いたんだ。」

「…ニアが？」

「ああ、お前の口から直接聞いたわけじゃないが…いい。俺も、あいつの身の上を知っていたら頼みを聞いてやりたいと思っただろうし…」

「そうか。」

カイザはベストのボタンを締めて、アーマーを手にとった。上腕部に描かれたブラックメリーと同じ、鷲のシンボル。追われる危機感、追わなければならない焦燥感。本当はこんな事をしている場合ではないが…ニアの夫に対する気持ちに、カイザは心を動かされていた。

「…同情でしか、ないんだろうけどな。」

「…」

カイザの呟きに、クリストフは何も答えない。答えられない。助けるという行為自体は善でも、動機は偽善的なことがある。世にいう優しさなんてものも、偽善と隣り合わせの自己満足ではない。ここで夫を助け出しても、ニアの命は残り短く、そんなニアを見捨てることは、似た境遇の自分を見捨てることになるように放っておけなかったのだ。神に見初められたクリストフ、美女の死体を愛するカイザ、美女に口付けをしたフィオール…ニアの境遇を他人事に思える者はもういない。

三人は何も言わないままに、部屋を出た。そして、目の前の風景に立ち尽くした。

「おはようございます。」

森を白く照らし出す淡い光が走る空を、赤い火が無数に飛び交う。よく見れば、光の一つ一つは小さな人だ。辺りをぼんやりと赤く照らすそれらが、蛍のように空高くまで埋め尽くす。そこに、ニアが一人、ポツンと立っていたのだ。

「ニア、これは…」

空を見上げてカイザが聞くと、ニアは笑顔を浮かべて言った。

「クリストフ様とエドガー様に、長が挨拶致したいとのことでした…」

クリストフはミハエルを背負うカイザの手を引いて前に出た。すると、ニアと二人の間に光が集まり、大きな火が燃え上がる。パチパチと火の粉が舞う炎の中から、一人の老人が現れた。紳士的な出立に白い髭。優しそうに細くなった赤い目からは、何処か威厳を感じる。カイザとフィオールが目点を点に見つめていると、老人はゆっくりと会釈した。

「お会いできて光栄にございます。この度は我が息子を手助けくださると聞き、感謝の言葉を述べさせて頂きたく、参りましたにございます。」

「息子だったのか。それは、さぞ心配だったことだろう。」

クリストフがそう言うと、老人は少女に歩み寄ってその手を取った。

「聖母様方の御加護の下にあるこの世界で、何を気に病むことがございましょう。」

クリストフは、老人が握る左手を見つめて悲しそうな顔をした。

「火の妖精より、心ばかりの祝福を…」

老人は少女の左手の甲に口付けをした。そして、カイザに歩み寄ってミハエルを見つめた。

「…」

カイザは少し身を引いて俯いていたが、老人は何も話さない。カイザが顔を上げると、老人は彼をじっと見つめていた。皺くちやで細くなつた目の間から覗く赤い瞳が、真っ直ぐにカイザを射る。

「…あなたは、以前何処かで…」

目が離せない。老人のその赤い瞳がカイザの中の懐かしさを呼び覚ます。しかし、カイザははっと我に返って言った。

「ここへ来るのは、初めてだ。俺も何処かで…あなたと会ったことがある気はするのだけれど。」

カイザは首を傾げて視線を逸らした。すると、老人は優しく微笑んだ。

「…そう、でしたか。」

老人はカイザの手を取り、その手に口付けをした。手からはなんの温度も感じないのに、ふと甲に当たる吐息は熱い程であった。

「あなた様方に、神の御加護があらんことを…」

老人はすりとカイザの手を放し、帽子を整えながら後退する。

「また、お会いしましょう。」

そう言うと、老人は激しく燃え上がり瞬く間に消えた。空を飛び交う光も無くなり、そこにいるのはニア一人。

「では、門を開きます。」

ニアは鍵を空で捻った。すると、鍵から火が出てそれが門の形を描き出した。その向こうには、高い塔が聳え立つ。

「…」

「カイザ、どうした。」

立ち尽くすカイザにフィオールが声をかける。カイザは慌ててミハエルを下ろした。

「いや、何でも…」

カイザは荷物とミハエルを切株の近くに置いて、門の前に立った。

この時、カイザは気持の悪い感覚に陥っていた。会った覚えはない。ないのに、目や感覚があの人を懐かしむ。既視感、なんて漠然としたものでもない。記憶にはない何処かで、必ず会っている…そんな、気味の悪い感覚。

「さて、早く済ませて祝杯でも上げるかな。」

伸びをしながらクリストフがカイザの隣に並んだ。

「…おい、やっぱり俺も行った方が…」

二人が振り返ると、不安そうに俯くフィオールがいた。クリストフはそんな彼に強気な笑みを見せる。

「もしもの時のためにお前には留守番を頼んだんだろうが。そんなしけた顔するなよ。」

「…でも、俺は！」

フィオールが顔を上げると、目の前には少女の顔があった。驚いて言葉を詰まらせる彼を、少女はじっと見つめる。

「妖精一匹と娘一人を助けるくらい、本来ならあたし一人でも十分だ。根暗なカイザなんてただの開錠係だし。」

「おい、聞こえてるぞ。」

カイザが肩越しに少女を睨む。

「あたしを信じる。必ず帰るから。」

クリストフは小さく微笑んでフィオールの手を握った。少女の笑顔を見てフィオールは困ったように笑い、頷く。その様子を感じと見つめるカイザ。

「…やっぱりお前ら、そういう関係なの？」

カイザの言葉に、フィオールはあたふたと何か言い始める。

「いや、その、心配で！」

「ふーん。すぐ帰るから。」

何やら理解のいいカイザに、フィオールはホッと胸を撫で下ろして頷いた。単純でよかった、そう考えながらカイザに歩み寄るクリストフの背中を見送る。少女は、門の前に立ち、振り返った。

「じゃ、」

カイザも軽く手を上げて言った。

「ミハエルのこと、よろしく。」

二人が門を潜ると、門は炎をあげて空に消えた。フィオールはそれを見つめながら、ふっと小さく息をつく。

「…まだ、心配ですか？」

ニアが切株に寄りかかるミハエルに歩み寄りながら言った。フィオールはじっと立ち尽くし、門のあった場所を見つめる。

「…いや、あいつらなら大丈夫だと信じてはいるけど…」

森の端から、朝日が昇る。

「男ならやっぱり、女に頼りきりじゃあいけないような気がして。」

そう言うフィオールの背中を見つめて、ニアは微笑んだ。

16・たとえそれで世界が終ってしまったとしても

「おい、まだか。」

「もう少しだから急かすな。」

塔の前で伸びている兵士を足蹴にしてクリストフが苛立っている。カイザは門の鍵を開けようと何やら作業をしていた。

「早くしろよ、待つのは嫌いなんだ。」

「静かにしろ。手元が狂う。」

クリストフは深く溜息をついた。

「こんな門いつもなら叩き割ってるのに……」

「そんなことしたら目立ってしまうがないだろ。」

カイザが気だるそうに作業を続けていると、大きな南京錠がガチャリと音をたてた。

「……開いた。」

「よし。」

クリストフが慎重に門に手をかけた。男二人でも開くか不安になる大きさだが、少女は難なく押し開く。カイザはもうその光景に慣れてきたのか、開門は少女に任せて隙間の向こうをじっと見つめている。

「待て。」

「なんだよ!」

少女が手を止め、カイザを睨んだ。

「人が来る。」

カイザの言葉に、少女も隙間から中を覗き見た。塔から出てくる兵士が一人、こちらへ向かってくる。

「来るぞ、とりあえず寝てもらうか？」

「馬鹿！門を閉める！」

馬鹿呼ばわりされて渋々クリストフは音をたてないように閉め、開かぬように抑えつけた。

「どうすんだよ。」

「こいつらは門の鍵を持っていなかったし、開閉の申し出はできない。おそらく、外への伝言だ。やり過ぎす。」

カイザとクリストフは息を潜めて兵士が来るのを待った。そして、門を叩く音がした。

「……」

「……おい、返事をしろ。」

中から呼びかけられ、クリストフはカイザの頭を殴った。

「は、はっ！失礼いたしました！」

カイザは頭を抑えながら返答する。

「しつかりしろ。最上階より伝言だ。サラ様にご懐妊なされた。国王陛下にそうお伝えしろ。」

カイザとクリストフは顔を見合わせた。

「か、かしこまりました！」

カイザが返事をする、兵士が去ってゆく足音がした。

「…サラ様って、」

「様付けするんだから、ニアの娘のことじゃないのか？」

クリストフが、眉を顰めて言った。

「懐妊って、父親は誰…」

「あー、そうだ。」

兵士の声にかイザは慌てて言葉を飲み込んだ。

「医師が城へ戻る。鍵番も呼んでおけ。」

「はい、」

そして、兵士の足音は遠くなり、聞こえなくなった。

「…これから医者も来るぞ。門番を伸すのは医者を通してからの方がよかったかもな。」

カイザがうんざりした顔で言うと、クリストフは門をゆっくり開き始めた。

「いいだろ、娘の居場所も明らかになったことだし。さつさと助けてずらかる。」

「はいはい、」

人が通れるだけ開くと二人は中には入り、クリストフは門を閉めた。そして、塔の入口へと駆け寄る。

「どうだ。」

「今度は中から閉まってる。南京錠が…3つ。一つは複雑に鍵と絡まってる。」

扉の隙間を覗きながらカイザは言った。クリストフは渋い顔をして舌打ちした。

「開くか？」

「やれないこともないが…」

カイザは扉から離れて塔を見上げた。

「あ、あそこから入る方が早い。」

カイザが指差すのは、塔の中間門側にポツンと一つだけある小さな窓。

「じゃあそっから…」

「でもたぶんあそこは看守室だ。飛び込んでったら大騒ぎになる。」

クリストフは腰に手を当てて溜息をついた。

「盗賊ならなんとかしろ。」

口元に指を当てがうカイザがクリストフを睨んだ。

「それを今考えてんだよ。山賊ならどうするんだ？」

「普段ならバーンと入って脅しつけてる。」

カイザは少女と初めて出会った時のことを思い出した。

「つまり、考え無しに突っ込むと。」

カイザの言葉にクリストフの目つきが鋭くなる。

「考え無しとはなんだ。山賊はお前ら盗賊なんかと違ってコソコソしないんだよ。」

「それが考え無しって言うんだ。無鉄砲とも言っ。簡単に言えば馬鹿。」

「あー…その綺麗な顔をボッコボコに殴りたい…」

クリストフはカイザに背を向けて貧乏揺すりを始めた。そんな少女を他所にカイザは塔を見上げて考え込む。医者が降りて来るとなると鍵を開けている時間はない。医者を出してまた鍵を閉める兵士もいるだろうから入れ違いに入るのも難しい。門番に変装するにしても、やり過ぎて鍵を開くにしても、三つの南京錠が行手を阻む。その上、城と反対側である門側には看守室と思われる窓しかない。

「…医者が来るぞ。」

苛立つクリストフは、腕組みをして貧乏揺すりをするばかり。

カイザは無言で塔を見上げるばかり。

ミハエルの横に腰掛け、膝に頬杖をついて貧乏揺すりをする
フィオール。じーっと火の門があつた場所を見つめていた。

「随分と苛立っている様子ですね。」

フィオールがふと横を見ると、ニアが盆を持って立っていた。
盆には透明な水が入ったコップが二つ、並んでいた。

「苛立つてるわけじゃあ…。」

フィオールは再び前を見た。

「そのわりには、落ち着きがありませんよ?。」

ニアの言葉に、フィオールの貧乏揺すりがピタリと止んだ。
ニアはクスクスと笑いながらフィオールに水を差し出した。

「…ありがとう。」

フィオールはそれを受け取った。ニアはもう一つを手に取り、
ミハエルの横に置いた。

「…ニアが飲むんじゃないのか?。」

「?...エドガー様に用意したものですから。」

首を傾げてニアは微笑む。フィオールも釣られて首を傾げ、
そう、と呟いた。

「…クリストフ様が、心配ですか。」

フィオールはコップを落としそうになり、慌てて両手で持ち
直した。

「し、心配とかじゃなくて…！」
「恋仲なのでしょう？」

ニアの微笑みに、フィオールは言葉を失ってしまった。困っ
た顔をして、水を一口飲み込んだ。

「…心配、とかじゃないんだ。ただ、なんか引つかかって…」
「恋仲は否定なさらないのですね。」

フィオールはうなだれて力無く呟いた。

「…しないけど、まだハッキリした関係とも言えないから勘弁して
くれ。」

ニアはクスクスと小さく笑う。

「ごめんなさい、とても仲がよろしいようでしたので…」
「…女の勘は鋭いな。」

フィオールも、小さく笑った。そして、風が吹き抜ける森の
影を見据えた。

「俺、いいのかな、ここにいて。」

「…女性の誰もが守ってもらうことを望んでいるとは限りません。」

何故か得意げなニア。フィオールは視線を空へと移し、言った。

「そうだな…あいつは自分で自分の身を守る。」

ニアは、真剣な表情でフィオールの横顔を見つめた。彼は呆然として空を仰ぐばかり。

「…何も、わかってらっしやらないご様子ですので、恐れながらも言わせていただきます。」

フィオールがニアを見ると、ニアはその赤く艶めく唇を一字にして彼を見つめていた。それが、ゆっくりと動き出す。

「自分を愛してくださる方がいる、苦しい時に支えてくれる方がいる、喜びを分かち合える方がいる…それだけでいいのです。難しく女だの男だの考える必要はないのです。互いに、そういった相手であれば。」

「…」

「クリストフ様のような高貴なお方ならなおさらのこと、守ってくださる男性より、ただ一向に愛してくださる男性が恋しいのです。」

「…」

フィオールは目を点にしてニアを見つめていた。微動だにせず、じつと。ニアは彼がなんの反応も示さないので、何やら不安になっておろし始めてしまった。

「あ、あの、お気に障ったことを…わたくし、」

「…いや、ありがとうな、ニア。おかげで目が覚めた。」

フィオールは勢いよくコップを置き、立ち上がった。帽子に手を添えてかぶり直し、決意めいたような強気な笑みを浮かべている。ニアは何がなんだかわからず、困った顔をして彼を見上げていた。

「やっぱり、ここにいちやいけねんだよ、俺。」

「え…？」

「ニア、門を開けてくれ。」

フィオールは商売道具が詰まっていたいつもの荷物を手に、歩き始めた。

「ま、待つてください！」

ニアが止めると、フィオールが振り返った。

「わたくしの話、ご理解いただけたのではなかったのですか?!」
「した。」

「でしたら、なんで行くのです!クリストフ様はあなたがいてくださるだけでよろしいのですから、あの方を信じてここで…」

「俺がここに残ったのは作戦上の理由だ。あいつがどうこうなんて話じゃない。」

フィオールは、何処で覚えたのか不敵な笑みを浮かべて言った。

「カイザはエドガーのために、クリストフは世界のために、俺はあいつらと生きていく道を探すために旅をしてるんだ。今ここで留守番なんかしても、俺の旅の目的は果たせない。あいつらと生きるか、あいつらと死ぬかのどちらかでしか、終われないんだよ。」

「だから、ご自分のお役目を放棄するとおっしゃるのですか？」

ニアは驚いたような顔でフィオールを見つめる。彼を哀れだとか、滑稽だとか、そんな眼差しではない。

「一人生き残ったところで、あいつらと生きてくための俺の旅は…意味を成さないだろ？だから行く。エドガーや世界を背負うあいつらには悪いが…俺は、俺の目的のために動く。」

ニアの眼差しは、尊敬の眼差しだった。いや、共感とも言える。命と夫を秤にかけて、彼女は夫をとったのだから。

ニアが涙目になって見つめていると、フィオールは何かを思い出したかのように青ざめてゆく。

「あの、何か…？」

「いや、作戦なんてくそくらえだーなんて言っただけで俺が留守番放棄したら…後が怖いなと思って。クリストフのゲンコツ痛いんだよ。」

身震いをして怖がるフィオールを見て、ニアはクスクスと笑った。あいつらが死ぬなら俺も死ぬ、なんて言っておきながら死ぬことなんて毛頭ない彼。あの二人を心底信頼している。してはいるが、彼にとつては共に生きてゆくことにこそ意味がある。保険のお留守番なんて彼にはなんの価値もない。

「…わかりました。」

ニアは涙を流しながら笑う。

「門を開きましょう。」

「おう、よろしく。」

「その前に…」

ニアは、につこりと笑って立ち上がった。

「わたくしから、せめてもの贈り物をさせていただきたいのですが。」

首を傾げるフィオール。ニアは、ニコニコと微笑むばかり。

「…一か八か。」

苛立ちがピークに達しているクリストフは、呟くカイザを横目に睨んだ。

「で、どうする。」

「その前に…」

カイザは塔の天辺から目を逸らしてクリストフを見た。

「お前ってどのくらい強いんだ？」

「象5、6頭よりは強いな。」

「…よくわからない。一個小隊相手にできるか？」

「なめるな。5分もあれば小隊くらい木っ端微塵だ。」

「へえー…」

カイザは再び塔を見て、言った。

「じゃあ、始めようか。」

17・予期せぬことにも平常心を失ってはいけない

二つの足音。鍵を開ける音。そして、扉の開く音。

「では、失礼いたします。」

「お疲れ様でした、先生。」

兵士はぺこりと頭を下げて扉を閉め、ガチャガチャと鍵を閉める。その音を背中に聞きつつ、白衣の男は門へと歩き出した。男はどうか浮かない顔をして肩を落としている。

男は門の前で立ち止まり、トントんと2度、門を叩いた。

「私です。城へ戻りますので開けてください。」

返事がなく、男は眉を顰める。

「門を開け……」

「おやすみ。」

どこからともなく現れたクリストフが男のみぞおちに深く拳を沈めた。男はそのまま動かなくなった。少女は男が起き上がらないことを確認して、門の外から鍵を持ってきた。

「カイザ！」

クリストフに呼ばれて周囲を確認しながら門へとカイザが走ってくる。カイザはクリストフから鍵を受け取り、内側から門に鍵をかけた。

「できた。行くぞ。」
「待ちくたびれた。」

二人は塔へと走り、壁の前で立ち止まった。カイザは荷物から鉤爪を取り出し、アーマーの甲に取り付ける。それをじっと見つめるクリストフ。

「…お前、よじ登る気か？」
「当たり前だろ。」
「そんなことしなくても飛んで行けばいいだろ。」

少女に腕を掴まれ、何やら嫌そうな顔をするカイザ。

「飛ぶって、まさか…」
「そのまさかだよ。」

少女は地面を蹴った。地面はへこみ、砂埃を立てている。それを真上から見ているカイザは、少女に腕を掴まれ空高く飛び上がった。いた。

「ちよっ…高い！」
「もう到着だ！」

クリストフは窓を叩き割り、中へと飛び込んだ。一緒に転がり込んだカイザは向こうの扉に投げつけられ、思いきり頭をぶつける。

「なっ、何者だ！」

頭を抑えながらカイザが立ち上がると、そこには数人の兵士がいた。やはり看守室だったようだ。窓ガラスが散らばるテーブルに立

ち、クリストフは不敵な笑みを浮かべている。

「賊だ！捕らえろ！」

兵士が剣を振り上げてカイザとクリストフに向かってきた、が。兵士は次々と二人の前に倒れてゆく。見兼ねた一人の兵士が窓の外へ向け、大きく笛を吹き鳴らした。城に異常事態を知らせていたのだろう。背後からクリストフに蹴り飛ばされ、兵士は窓の外へ落ちていった。

静かになった看守室で、カイザは鍵を探していた。

「…見当たらない。」

「こいつらも持っていないぞ。」

兵士の持ち物を漁るクリストフがカイザに言った。カイザは少し考え、ある事に気がつく。そして、慌てて窓の外を見た。

「まさか…」

クリストフも外を見ると、門の前で伸びている医者が目に入っていた。

「あいつか…」

「あたしが行く！」

「待て！これから増援も来る！今は先に…」

「その足止めのために門の内側から鍵をかけたんだろっが！」

「あれは時間稼ぎのためにしたんだ！それに、取りに行っても鍵がある確証なんてない！」

クリストフが窓に足をかけると、看守室の扉が勢いよく開いた。

「賊か！この塔へ何をしに来た！」

数人どころか、塔からぞろぞろと兵士が集まってきた。クリストフは舌打ちをして雪崩れ込んで来る兵士に向かってテーブルを投げつけた。

「わかったよ！先を急ぐぞ！」

先頭を切ってクリストフが走り出した。兵士を薙ぎ倒して扉から出ると、大きな螺旋階段が続いていた。上までは暗くなっている事ができない。

階段の下と上から兵士が集まってくる。クリストフはカイザの腕を掴んだ。そして、上に向かって大きく飛び上がる。クリストフが踏んだ階段はガラガラと音を立てて崩れてゆく。

「帰りはどうするんだよ！」

「飛び降りればいい。」

「俺が死ぬ！」

飛び石のように上まで昇り、二人は最上階へとたどり着いた。そこには木製の扉一つしかなく、あとは石の壁が続いている。クリストフはその扉に向かってカイザを投げ飛ばした。

「いてっ！」

再び頭を打ち付け、その場に蹲るカイザ。

「早く開ける。」

「…もう少し丁寧に扱えよな。」

カイザはブツブツ文句を垂れながら鍵穴を覗き込む。

「これ、どうなってるんだ？」

開錠の道具を鍵穴に差し込み、カイザは言った。

「…スカスカだ。何もない。」

「だったら開いてるんじゃないのか？」

クリストフが扉をガタガタと動かすが、扉は確かに鍵がかかっている。

「どうなってるんだよ！」

「たぶん、この鍵穴は偽物で本物がどこかに…」

カイザは扉の周りを見回した。しかし、それらしき物は見当たらない。

「面倒だ！開けるぞ！」

「待て！」

カイザが止めに入るが、クリストフは大きく拳を振り上げて扉を叩き割った。木が破れる大きな音が塔に響き渡る。そして、その部屋は開け放たれた。

「…」

城が見える窓が一つだけある拾い豪華な部屋。白いレースのカーテンに、本革のソファ。そして、天井つきのフワフワしたカーテ

ンが靡くベッドの上で枕を抱き締め、驚いている少女が一人。赤い髪、赤い瞳…間違いなく、ニアの娘だ。

クリストフが中に入ろうとすると、娘は怯えながら窓際の瓶を取り上げて抱き締めた。その中には、それまた赤い蜥蜴が入っていた。

「…父親は何処にいる。」

扉の前でクリストフが聞くと、娘は怯えた顔で瓶を隠そうとする。

「この子はあなた方を怖がっている。それに、舌を抜かれておりますので話すことができません。」

籠った男の声がした。カイザは振り返って見るが、下層で騒ぐ兵士の声しかない。

「何用ですか。私達親子に。」

カイザは声の主を探していた。そんな彼の頭を驚掴みにして、娘へと向けるクリストフ。

「あの蜥蜴が、ニアの旦那だ。」

「…」

カイザは目を細めて瓶の中を見つめた。蜥蜴は数度瞬きをすると、クルリと回った。

「なんと、ニアを知ってらっしゃるんですね。」

「…蜥蜴がしゃべってる。」

カイザは驚きの声をボソリと垂れ流す。クリストフは部屋に歩み

入り、娘から無理矢理に瓶を取り上げた。娘は泣き目になって奪い返そうとする。

「大丈夫、この人達はお前のお母さんの知り合いだ。」

蜥蜴がそう言うと、娘は少し不安げな表情をしながらもおとなしくなった。クリストフは瓶を見て眉を顰めた。

「…複雑な魔法で封じられているな。」

まだ扉の前で呆けていたカイザは、やっと我に返ってクリストフに歩み寄った。

「魔法？」

「ああ、これ程の封印…誰がやったんだ。」

「お前、どうにかできないのか？」

「無理だな。ダンテにでも見てもらわないと。」

二人が瓶を見回していると、蜥蜴が言った。

「以前城にいた魔女が国王に命ぜられてしたものです。確か、ダンテ様の弟子だったと申しておりました。」

「面倒なことじゃが…」

「魔法といえば、その扉にも国王が何か細工をしたようでしたが…」

蜥蜴の言葉に、クリストフはピクリと眉を動かした。少女は瓶をカイザに押し付け、扉があった場所へと歩いて行く。そして、ゆっくりとその場所に手をかざすと…

「…やられた！」

クリストフは何もない空をドンドンと叩く。異変に気付いたカイザも、出口に手をかざした。そこには、見えない壁のようなものが出来上がっていた。

「何だ、これ。」

「だったら窓から……」

窓に向かうクリストフに、蜥蜴が言った。

「窓も開きません。この部屋は国王の魔法で封じられています。」

「部屋に入る前に言えよ！」

「賊かと思いましたので。」

確かに賊だけど……カイザは溜息をついた。

「こんな田舎でまさか魔法に出くわすなんて……」

クリストフが動かない窓を叩きながら叫ぶ。

「国王がかけたので簡単な魔法のはず……お二人のどちらか、解除魔法をご存知ないのですか？」

「……」

沈黙が流れる。すると、クリストフがカイザに振り返って言った。

「なんで盗賊のくせに解除魔法も覚えてねえんだよ！」

「お、俺は魔法の存在自体知らなかった！お前こそ、ダンテと知り合いなら習つとけばよかったじゃないか！」

「宴でしか顔合わせない、殆どツチノコみたいな奴からどうやって習えってんだ！」

言い争う二人を娘は心配そうに見つめる。

「せめてこの瓶から出れたなら…私がどうにかいたしましたのに。」
「…間抜けな蜥蜴だな。」

クリストフが瓶を睨んだ。その時、外で大きな爆発音が響いた。
カイザとクリストフは顔を見合わせる。

「門を開けたようだな。」

「何か手はないのか、クリストフ…」

「さつき階段をめっちゃめっちゃにしたからまだ上がって来ないだろうが…ここから出る手段を見つけないことにはな。」

少女はツカツカと壁に歩み寄り、石の壁を殴った。やはり、扉や窓同様にびくともしない。

「その壁は力技で突破できるような代物じゃない。」

知らない男の声に、クリストフとカイザは振り返った。

「…賊と聞いていたが、女の方は上玉じゃないか。」

怪しく笑う男を見て、娘はベッドの布団に丸まって隠れた。クリストフは男を横目に睨んで、鼻で笑った。

「偉そうに。ここから出たらそのニタニタ顔を泣き顔になるまで殴ってやるよ。」

「強気な女は嫌いじゃない。」

男が杖をコン、と一回床をつくとき、カイザとクリストフはよろめいた。

「なんだ……？身体が痺れて……」

「……くそっ！」

クリストフは近くのスタンドを扉めがけて投げたが、男の手前で壁に弾かれ、スタンドは絨毯の上に転がった。

「おとなしくしている。もうすぐ兵がくる。」

男はそう言っただけで階段を降りて行った。カイザとクリストフはその場に倒れ込んでしまった。床を転がる瓶の中で、蜥蜴が叫ぶ。

「皆さん、しっかり！サラ！サラ！大丈夫か！」

狭い瓶の中でちよろちよろと落ち着きなく動き回る蜥蜴を見ながら、カイザはクリストフに話しかけた。

「……魔法って……便利、だな。」

「そんなこと言ってる場合か！お前なんて舌まで痺れてんじゃないか！」

カイザはふっと笑って、目を閉じた。

18・何にも囚われてはならない

人が沢山行き交う橋の上で、カイザは口をあんぐり開けて川の向こうを見つめていた。

「大きい…」

「そうね、国一番の橋だから。」

驚いているカイザを見てミハエルは微笑んだ。カイザは振り返って橋の上を見渡す。

「出店もあるし、大道芸人までいる…祭でもあるのか？」

「いいえ、ここはいつもそうなのよ。」

「いつもって…毎日？」

「…ええ。」

こんなお祭騒ぎを毎日しているというのに、ミハエルの笑顔は少し、悲しそうだった。カイザはそれが気になったが、ミハエルが何かに気付いたようにカイザの肩を抱いて向こうを指差した。

「ほら、アレ。見たことある？」

ミハエルが指差したのは、とある出店。ノース名物の菓子を売っているようだ。

「ない。」

「食べてみない？」

「うん！」

喜ぶカイザを見て、彼女は満面の笑みを浮かべた。

「よかった。好きなんだけど一人だとなかなか買っ気になれなくて。」

「食べたかったら俺のこと呼んでよ。」

「そうね。」

いつもの憂いを秘めた笑みとは違い、子供のように照れ笑いをする彼女。カイザは、ミハエルには不思議な雰囲気だけではなく、こういった女の子らしい一面もあるのだと気付く。

「甘い物好きなのか？」

「たまに食べると美味しいのよ。」

「俺は甘いのもいいけど辛い物も好き。」

「あら、大人ね。」

他愛ない会話をしながら、二人は店に向かって人混みを抜けてゆく。お祭騒ぎの、橋の上。

そこは塔のちょうど中間程にある牢の中。狭いところに手枷をかけられた男が十数人集められていた。

「入れ。」

兵士にそう言われてカイザは大人しく中に入った。兵士はそれを確認して牢を閉め、鍵をかけると、おそらくすぐ上の階にあるであろう看守室へと戻って行った。

「捕まったのか、兄さん。何したんだ？」

顎鬚を蓄えた汚らしい男がカイザに話しかけた。カイザは男を見下ろし、溜息をついて男の前に胡座をかいた。

「窃盗。」

「窃盗？！それでここにぶち込まれたのか。そりゃあ随分な大物を狙ったもんだ。」

「そうなのか？お前は何をしたんだ。」

男は思い出し笑いをした。

「殺人だよ。あっちの男はマフィアの幹部、向こうの男は手足を切ったり繋いだりした女を見世物小屋でこき使ってた。」

「それはまた…」

カイザは牢を見渡して苦笑いした。

「で、この塔はどういった仕組みなんだ。」

「ここか？最上階の連中のために死ぬまで奴隷のように働く、死刑囚と重罪人が押し込められる塔さ。」

「最上階の連中？」

「ああ。ずっと上に住んでいる、この塔を仕切る看守長やその部下共。他には、国王がかこつてる愛人も住んでるって噂だけだな。」

カイザは少し考え、言った。

「そいつらは普段何をしている。」

「看守は下層の作業場で監視をしたり、牢の見回りをしたり…飯を持ってきたり。」

男が頭を掻くと、そこからプーンと虫が出てきた。カイザはそれを見て身震いした。

「…で、その見回りや飯は何時頃だ？」

「見回りは仕事の交代の時くらいで、飯は一日に二度。さつき兵士が来たから、次の飯まではゆっくりできる。」

「そうか。」

カイザは立ち上がって牢の格子に歩み寄った。そして、キヨロキヨロと外を見渡す。この塔、看守室のある階から下が二重螺旋構造になっていた。内側の階段は看守室と最上階へ続いているが、外側の階段は看守室の一つ下の階までしか行けない、監獄になっていたのだ。その一つに、カイザは入れられた。こんな窓一つなく、表に門まで構えた閉鎖空間だ、そんなしょっちゅう見張りをする必要もないらしい。見渡しても誰もいない。

男が不思議そうにカイザを見ていると、彼の手枷がガチャリと外れて床に落ちた。男は驚いて、言葉を吃らせた。

「おっ、お前…！」

「すまないが、俺は忙しい。」

カイザはブーツに隠していた開錠の道具を取り出し、牢の鍵穴に差し込む。同じ牢に入っている囚人達が、手枷を外して鍵まで開けようとするカイザに気付いて集まってきた。

「お、俺のも外してくれ！」

「俺も！」

カイザは振り返って囚人達を睨んだ。

「…俺達は世間に出るべきじゃないクズだ。諦めてここで一生過してくれ。」

「だったらここにいろ！何自分だけ自由になろうとしてんだ！」

さっきまでいろいろ教えてくれていた男がカイザに掴みかかる。カイザはその手を払って、言った。

「ここから出して利用することもできるが…面倒なんだよ、もうお前らみたいなのと付き合うのは。」

「お前…」

「こいつの腕章…ブラックメリーの…」

「ギールの盗賊！」

囚人の一人が叫ぶと、牢の中はざわついた。カイザは俯いて、小さく笑う。

「…さすがマスター、こんな僻地にまで噂が届いてやがる。」

男は黙って膝まづき、カイザに言った。

「…頼む、出してくれ。出してくれたらお前の子分になる。なんでもする。頼む！」

「無理だ。俺はもう、ブラックメリーの盗賊じゃない。」

カイザは男に背を向けて再び作業を始めた。しかし、男は食い下がる。

「頼む！これは何かの縁だ！俺は、ギールさんに命を救ってもらったことがある！」

「マスターに？」

カイザの手が、ピタリと止まった。

「昔、ウェゴの街で…その、追われてたんだ。他の盗賊団に。その時、助けられて…」

男は肩を震わせて俯いた。

「もう足を洗えと言われた。捕まるようなことをしなくても生きていける奴が簡単に盗賊を相手にするなと…それよりなら全うに生きると…言ってくれたのに、俺は…」

男は泣いていた。

「頼む！ギールさんにこの首を差し出せるなら、もう一度外に出たいんだ！だから…！」

「マスターはもういない。」

カイザが言うと、男は顔を上げた。

「マスターは俺が殺した。」

「…何で、それなのにアーマーを…」

「…俺が、マスターから後継者の証を受け取ったからだ。殺したのは俺だが、俺はマスターの意志を受け継ぐことにした。それだけだ。」

そう言うと、ガチャリと牢の鍵が開いた。

「扉は開けておく。だが、手枷は外さない。それでもよければここ

から出るなり好きにしろ。」

「…あ、ありがとう…」

「だが、」

カイザは、囚人達を睨んだ。

「お前らの顔は覚えたからな。間抜けにも捕まってるのをせっかく自由にやってやったのに、また追われるような罪を犯しているようなら…俺がお前らを殺す。」

囚人達は黙り込んだまま、立ち尽くす。

「マスターがよく言っていた。悪さして捕まってるような奴は死んだ方がいいと神に判断されたクズ。捕まらずに生きながらえる奴こそ、神に見放されて悪魔にその身を守られている本当の悪党だってな。わかるか？この言葉の意味。」

囚人達は物言いたげな顔をしつつも、黙り込む。

「…こんなところにいる本当の悪党でもないお前らは、善良に生きるか、クズらしくとっ捕まって死ぬかのどちらかしかないんだよ。」

カイザの言葉に、囚人達の表情は険しくなつてゆく。しかし、カイザは続けた。

「ここから出してやるんだ、神に代わって俺がお前らの命の価値を見定めるくらい、いいだろ？」

「自分も捕まったくせに、偉そうなこと言っな！」

囚人の一人が叫ぶと、カイザは笑った。

「俺は自分で出られるからな。捕まっても生き残れるんだ。こんな塔の中で死ぬまでひーこら働く予定だったお前らと一緒にするな。」

カイザは囚人達に背を向けて牢を出た。

「待ってくれ！」

振り返ると、男がカイザを見つめていた。

「…わかった。ギールさんがいないんだ、あんたにこの首を捧げる。」

「いらない、そんな髭だらけの汚い首。死んだ方がいいと判断したら殺しに行くから、それまでは好きに生きればいい。」

「あんた、名前は！」

「…カイザ。」

牢から出ているカイザを見て騒がしくなる通路。そこを堂々と歩いてゆくカイザの背中を、男はじっと見つめていた。

「…お前ら、どうする？」

「外に出てもギールの後継者が目を光らせてるんだろ？嫌だよ、俺…ここを出たらまた組織に連れ戻されるだけだ。」

「俺もだ…」

鍵が開いた牢の中で、囚人達がざわざわと話し出した。そんな中、カイザに言い寄っていた囚人の群から外れて一人隅で座り込んでいた少年が立ち上がった。

「…行くんでしょ？バツテンライさん。」

少年は、カイザに首を捧げると叫んでいた男に話しかけた。バツテンライと呼ばれた男は、少年を見て少し驚き、困ったように笑った。

「…そうか、お前もこの牢だったな。」

「僕も行く。あの人に凄く興味が湧いた。」

「カイザはお前に興味はないと思うぞ。」

「いいよ。恋も両想いより片想いの方が楽しい。追われるより、追いかけてい。」

少年は深くかぶったフードの下で、ニヤリと笑った。

「…カイザに一番最初に殺されるのはお前じゃないかと俺は思うぞ、シド。」

バツテンライは溜息混じりに言った。シドと呼ばれた少年は、ニコニコと笑っばかり。

カイザは階段を上がり、看守室がある階へ続く扉の前で止まった。慎重に鍵を見て、仕掛けがないかを確認する。確かめたところで魔法の知識もないが…引かかるよりはマシだ。鍵穴の仕組みと扉に繋がりのあることを確認して、そつと、道具をその穴に差し込んだ。

テーブルに並んだ豪華な料理、積み上げられた衣服や宝石。クリ

ストフはそれらをじーつと怪訝な目で眺めていた。

「…なんだかなあ、変な感じた。」

クリストフがそう言うのと、料理にがつついていたサラは食事する手を止めて少女を見た。どうしたの？とでもいう風だ。

「国王は大層あなたが気に入ったようです。サラと同じようにここに住まわせるつもりなのでしょう。」

サラの近くに置かれた瓶の中で、蜥蜴が言った。クリストフは嫌そうな顔をしてフォークを手取る。

「さっきの魔導士が国王か？まだ若いようだし、女が好きで当たり前か。」

「しかし、国王がここにサラとニア以外の人間を入れたのは初めてですよ。」

「…実の娘とその娘をここに住まわせるのは何故だ？」
「…」

クリストフが聞くと、蜥蜴は黙り込んでしまう。何も話さなければただの赤い蜥蜴になりきってしまう。その様子が、逃げられたように少し腹立たしいクリストフ。少女はフォークを大きな鳥の丸焼きに勢いよく刺して蜥蜴を睨んだ。

「おい、なんとか言ったら…」

その時だった。轟音がしたかと思うと階が少し揺れて、何やら下が騒がしくなった。サラは気にせず食事を続けていたが、蜥蜴は扉の方を見ている。クリストフも、席から立って扉に耳を当てがった。

「
…」

…イザ！

「
…？」

…ストフ！

少女は強く耳を扉に押し付ける。

「カイザ！クリストフ！何処だ！」

聞こえた。その声は紛れもなく…

「フィオール！なんでここに！？」

驚くカイザの声も聞こえてきた。別室に囚われた彼も無事に脱出していたようだ。クリストフは呆然として、もといいた席に戻り、震える手で煙管を手にした。

「…如何なさいました。」

蜥蜴の問いかけに、クリストフは小さく笑う。

「いや…カイザは放っておいても出てくるとわかっていた。でも…あいつが来るなんて。」

俯きながら笑うクリストフ。

「何でだろうな…言うことも聞かずにここへ来たことを叱りたいのに…凄く嬉しいんだ。」

「…気丈に見えて、やはりあなたも女性ですね。」
「うるさい。」

クリストフはキツと顔を上げて蜥蜴を睨んだ。少女の鋭い視線に慌てたのか、瓶の中でチヨロチヨロと動き回る蜥蜴。そんな蜥蜴を笑いながら、クリストフは煙を吸い上げる。囚われの身でありながらも喜びが溢れかえる、その胸に。

19・流水の如く至る場所へ落ち着く

轟音と共に、何やら騒がしくなる扉の向こう。カイザは耳を澄ませてその場に立ち尽くす。

「また賊だぞ！」

「さっきの奴らの仲間か！？」

バタバタと兵士が走る音が聞こえた。そして…

「カイザ！クリストフ！何処だ！」

カイザは眉をピクリと動かし、慌てて鍵を開ける。そして、勢いよく扉の向こうに飛び出した。

階段の下を見ると、そこには兵士達と荷物一つで応戦するフィオールがいた。

「フィオール！何でここに！？」

カイザが下に向かって叫ぶ。遠くて顔は見えないが、フィオールの帽子頭は確認できる。その頭がカイザの方を見た。

「無事か！」

「ああ！だが、クリストフが…！」

気配を感じてカイザが後ろを振り返ると、一人の兵士が剣を振り上げていた。

カイザは振り下ろされる剣を紙一重で避けて、距離をとる。兵士は兜の下で、何やら笑い始めた。

「昨夜はよくもやってくれたな、盗賊の若造。」

「……?」

カイザが首を傾げると、兵士は兜を外した。兵士は昨晚カイザに金の腕章や剣を奪われ、クリストフに蹴り飛ばされた男だった。不気味に笑う男を見て、カイザは、あ、と小さく声を出した。

「……お前は、」

「一対一で正々堂々!」

兵士はカイザに斬りかかった。殺気を纏い、激しく剣を振る。やはり、兵を率いていただけあってその太刀筋は鮮やかだ。ナイフや道具を奪われた丸腰のカイザは、一向に避けた。すると、先程の扉まで追い詰められ、逃げ道を塞がれてしまった。

「くそっ!」

左手のアーマーで兵士の剣を受け止めたカイザの視界に、兵士のあいた左手に握り締められている、もう一本の剣が飛び込んできた。カイザはハッと息を飲む。

「終わりだ!」

剣の切先が、カイザの心臓目掛けて伸びてくる。カイザは動けずに、素手の右腕一本で凌ごうとした。その時、

「どけ!」

フィオールの声がした。兵士とカイザが思わず横を見ると、下層

から最上階まで火柱が上がった。そして、その中からフィオールが飛び出して来た。

「うわ！」

驚きのあまりよろめく兵士。カイザは、兵士の緩んだ手元を蹴り上げた。左手の剣が弧を描いて手摺を越え、火の海になっている下層へと落ちてゆく。

「…くっ！」

兵士が右手の剣を握り直す…が、続け様に繰り出される蹴りによるめき、手摺を越え、真つ逆さまに下層へと身を落としてしまった。そして、危機一髪のところまで形勢逆転し、男の悲鳴を耳にしていたカイザに…

「…どけて！」

フィオールが突っ込んできた。正面からぶつかりそのまま壁に激突する二人。

「いってえ…」

「わりーわりー…」

フィオールはよろよろとカイザの腕を掴んだ。

「いや…助かった。」

カイザは腕を引かれながら立ち上がり、下層を見下ろした。火はだいぶ小さくなり、パチパチと音を立てて石の壁に焦げ目をつけて

ゆく。

「この火…お前がやったのか？」

「ああ。ニアが教えてくれたんだ。火の魔法、だそうだ。この指輪が俺の魔力を増幅させてくれる。」

フィオールは左手の甲を向けてその小指に光る金の指輪をカイザに見せた。

「糞みたいな魔力しかなくても、この指輪があれば…」

フィオールは左手をギュツと握り締めて、階段の向こうに拳を向けた。カイザはそれを見つめていた。フィオールは、その拳をゆっくりと開く。すると、彼の手の中で小さな火が円になってぐるぐると走り、それは一気に大きく燃え上がった。

「ちょうどいいところへ兵士が来やがったな。」

階段の向こうから兵士がぞろぞろとやってきた。フィオールは左手に火を宿したままニヤリと笑う。火に照らされて影を帯びるその横顔が、カイザには恐ろしく見えた。金の指輪をしたフィオールが何か、人外のものになってしまったような気がしたのだ。

「さて、一気に蹴散らして…」

フィオールが踏み出そうとした、その時、

「カイザ！」

「ぶっ…！」

後ろの扉が勢いよく開いた。フィオルは開いた扉に挟まれ、一瞬にしてカイザの視界から消えた。驚いたカイザが声の主に目をやると、そこにはフードを深くかぶって嬉しそうにニコニコ笑う少年と、牢で会った男がいた。

「お前らは…」

「よかったあ、まだここにいてくれて。」

少年は手枷をガシャガシャ鳴らしながらカイザに歩み寄ってその手を取った。カイザは困惑気味に男を見た。男も困ったような顔をしている。そこへ、扉の裏から額を抑えたフィオルがゆつくりと出てきた。

「いってえな…いきなり開けると危ないって母ちゃんから習わなかったのか?! え?!」

フィオルが少年に向かって怒鳴るが、少年はニコニコと笑うばかり。見兼ねた男が話し出す。

「悪った…こいつはシド、俺はバッテリー。カイザに話が…」

「シド?」

フィオルの表情が、変わった。

「そんなのはあとにしようよ。あいつら、やればいいんでしょ?」

シドと呼ばれた少年は階段を下りてくる兵士を指差した。カイザは面倒くさそうに溜息をついた。

「俺に構うな。脱出するなら今すぐここを出ろ。下層はフィオル

が粗方片づけたから。」

「そう言わずに。僕があいつらをやるから、カイザは看守室に行きなよ。どうせ持ち物全部とられて丸腰なんでしょ？」

「…」

兵士の群れを見ているシドを、カイザは訝しげに見つめる。バツテンライも複雑な顔をしてその汚い頭を掻いていた。シドはニッコリと頬笑み、踵を翻した。

「…なんだあいつ。」

手枷をしているとは思えないほど軽やかに階段を駆け上るシドの背中を見つめ、カイザは首を傾げる。そんなカイザに、バツテンライは言った。

「あいつは、殺し屋だ。」

バツテンライは嫌そうな顔をしてシドの背中から顔を背ける。

「カイザ、あんたのことを気に入ったらしい。」

「俺？何で。」

「知らないが…関わらない方がいい。」

「…」

カイザはバツテンライの真っ直ぐな視線を正面から受け止めた。

「…俺に、何かできることは。」

「ない。」

「そうか。じゃあ、俺は行くよ。どこかでまた会えることを願っている。」

「…その時は、酒の一杯くらい、付き合ってやるよ。」

カイザはそう言ってバツテンライに背を向けた。バツテンライは少し驚いた顔をして、小さく笑った。カイザの背中から滲む、かつての恩人の面影を見ているかのように。バツテンライは何も言わずに、階段を下って去って行った。背を向け合ったとしてもまた正面を向いて言葉を交わす運命にある二人は、こうして出会って間もなく、別れたのだ。

「…で、看守室に行くんだろ？それはいいとして、クリストフとニアの旦那と娘は。」

フィオールがカイザに話しかけた。カイザの視線の先では、シドが戦っている。軽快な身のこなし、狙いの正確さ、そして、残忍な笑顔。

「…看守室には、俺が一人で行く。フィオールはクリストフ達をなんとかしてくれ。」

「クリストフ達？」

「あいつら3人は最上階の一室に閉じ込められている。しかも、魔法で封じられた部屋だ。解除魔法というのが必要らしいんだが…」

「…わかった。解除魔法は知らないが、なんとかしてみる。」
「頼む。」

フィオールは力強く頷いて、ふっと小さく息を吐いた。すると、火の橋が最上階に向かって伸びてゆく。

「気をつけてな。」

そう言って、フィオールは火の橋に足を掛けた。彼が乗ると、火

は彼を乗せたまま最上階に向かって消えていった。

「…本当に、魔法って便利だな。」

カイザは無表情でそう呟き、看守室へと向かって走りだした。すると、何やらもう一つ足音が聞こえてきた。さらに、ガシャガシャと鉄が擦れる音もする。嫌な予感がしながらも、カイザはゆっくりと振り返った。

「僕も行く。」

やはり、シドがニコニコしながらついてきていた。カイザは眉を顰めて前に向き直る。

「来るな。バッテンライはもう行ったぞ。」

「僕は君について行こうと決めてたから。あのおっさんはどうでもいいよ。」

カイザは看守室の前に立ち、扉に手を掛けた。その後ろにぴったりとくつつくシド。

「…おい、どうか行け。お前が何をどう決めようと勝手だが俺に関わることは許さない。」

「なんで？」

カイザはシドを見下ろした。

「俺はお前に興味ない。」

「僕はあるんだ。」

「邪魔なんだよ。」

「そんなことないよ、僕は役に立つと思うなあ。」

カイザは舌打ちをした。

「いい加減にしろ！ついてくるな！」

そして、カイザは看守室の扉を荒々しく蹴り飛ばした。飛び散る木片、窓から差し込む光。

「…なんだ、これ。」

血が飛び散る室内。四肢が散乱し、天井まで赤く染まっている。かつてクリストフが投げ飛ばした机の上に、一人の人影が見えた。逆光だが、明らかにその横顔は…

「化け物？」

シドが呟くと、その人影がカイザの方を見た。その手には長い刀剣と、血が滴る兜が。中には、きつと…

「…」

やりあつてはいけない。カイザは盗賊の勘でそう感じていた。しかし、ここに来たからには奪われた荷物だけは取り返さなくてはならない。その中に、ブラックメリーも含まれている。カイザは立ち尽くしたままに、人影を見つめていた。その狭い視界の中で、荷物を探す。

「…カイザ、僕がとってきてあげる。」

カイザがシドを見ると、少年はにっこりと笑っていた。

「やめろ、」

カイザの呟きも聞かずに、シドは部屋に駆け込んだ。そして、部屋の奥の棚にある荷物を手にした。

「シド！」

カイザが身を乗り出した瞬間、人影は机から飛び上がって兜をカイザに投げつけた。カイザがそれを払うと、シドの背後で刀剣を振り上げられている。

「カイザ！」

シドは荷物をカイザに投げ渡し、振り下ろされた刀剣をその手枷で受け止めた。しかし、少年の笑顔は、消えた。ギツと小さく音がしたかと思うと、鎖はバラバラに砕けてしまったのだ。

「死んじゃう。」

シドは、やはりニッコリと笑った。その小さな身体が頭から裂かれると思われた、その時。人影の頭に兜が飛んできて人影は棚に向かって倒れ込んだ。バサバサと棚に収められていたものが人影の上に落ちてゆく。その隙に、シドはカイザの元へと戻った。

「ありがとう、カイザ。」

「……」

カイザは荷物からブラックメリーを取り出して、構えた。

「もういい、行くぞ。」

「僕も一緒に行ってもいいの？」

「……」

カイザは少し考えた。もともと人影が動き、キラリと刀剣が陰の中で光る。

「わかったよ、とりあえず今はついてこい。」

「やったあ！」

シドは無邪気に笑って走り出すカイザの後を追いかけた。

「……」

窓から光が差し込む部屋で、唯一息をしている人影は、ゆっくりと立ち上がった。そして、その仮面を外して窓の外を見た。

「見つけた。運命の至る場所……俺の、至るべき場所。」

肩まで伸びた黒い髪の前頭部はまだ白く、光を激しく反射している。そして、男は仮面をつけた。

20・刺客は敵を同士と呼ぶ

フィオールは最上階に降り立ち、辺りをキョロキョロと見渡した。すると、その階には扉は一つしかない。そこだ。フィオールは扉へ駆け寄り、手のひらを扉につけた。

「燃えろ、」

手のひらから火が走り、扉を燃やしてゆく。パラパラと灰になって崩れてゆく扉の向こうには…

「フィオール、入ってくるなよ。出られなくなるぞ。」

豪華な料理を目の前にしてふんぞり返るクリストフがいた。

「おい！てめえ！人が必死こいてここまで来たってのに何くつりでんだ！」

「あ！」

怒り心頭のフィオールが部屋に足を踏み入れると、クリストフが声を荒げた。フィオールは驚いてその足を止めた。

「お前！入ってくるなって言ったのに…」

クリストフは頭を抱えて頂垂れた。サラはもくもくと料理を食べている。

「…」

事を察したのか、フィオルは振り返って部屋から出ようとしたが、もう遅い。

「…出れねええええ！」

馬鹿みたいに見えない壁を叩くフィオル。

「だから言っただろうが！馬鹿か？！お前は馬鹿なのか？！」

クリストフはテーブルを叩いた。サラがびくつとして食べる手を止めた。フィオルは肩を落として苦笑いしながらテーブルに歩み寄った。

「ご、ごめんな。留守番放棄した上、こんなことに…」

この時、彼は決意していた。クリストフに半殺しにされることを。しかし、少女はぶいっとそっぽを向いて、言った。

「…やってしまったものは、仕方ないだろ。」

「…クリストフ、お前…」

フィオルは少女の肩を掴んで自分の方を向かせた。突然のことに頬を赤らめて驚く少女。

「なっ…！」

「…この料理の毒に当てられたのか？そんな、鬼のクリストフが仏のような言葉を…」

結局、フィオルは殴られた。

「それは…ニアの指輪！どうしてあなたが！」

床で伸びているフィオールに蜥蜴は聞いた。その声に驚いて我に返るフィオール。

「男?!」

「これだ、これ。」

椅子に座ったクリストフが瓶を掲げて見せた。フィオールは殴られた頭を撫でながら立ち上がり、瓶を手取る。

「始めまして。」

「喋ってる…」

フィオールは目を丸くして瓶を見つめた。

「その指輪、我が妻の物です。どうしてあなたが？」

「これは、出発の前にニアがくれたんだ。ついでに俺に火の魔法も教えてくれて…」

「そうでしたか。それはよかった。どうにか出られそうですよ、クリストフ様。」

蜥蜴がそう言うと、クリストフはウィンググラスをテーブルに置いて蜥蜴を見た。

「本当か。」

「ええ。彼に私が解除魔法を教えます。」

「フィオールじゃないと駄目なのか？」

「はい…残念ながら、クリストフ様とカイザ様には魔力を感じられませんでしたので。指輪をした彼なら、なんとか。」

蜥蜴はフィオールに向き直り、言った。

「では、いきますよ。」

「あ、ああ。」

フィオールは緊張気味に頷いた。

「では、まずあの窓に手をつけてください。」

フィオールは指示通りに窓へと向かい、そこに手を当てた。

「そして、火の魔法を使う時と同様に精神を集中させ、丹田に溜まった魔力をその手に集めてください。」

「

大きく息を吐き、フィオールは閉じた目を開いた。

「最後に、硝子に杭を刺して割るイメージをして、呪文を。」

蜥蜴が呪文を言おうとした、その時だ。窓ガラスが割れて、室内に破片が飛び散った。フィオールは咄嗟に瓶を庇い、クリストフとサラは立ち上がった。

「……こいつ、」

フィオールが顔をあげると、目の前には一人の男がいた。上から片手で何かにぶら下がり、窓の枠に足を掛け、中を見ている。その顔には、おぞましい怪物の仮面。

「烏天狗…?!」

クリストフが呟いた。男のマントが風に舞いあげられた。靡く袴に、腰に携えられた刀剣。そして、その背中には…

「…カイザ!」

フィオールとクリストフが振り返ると、そこには傷だらけの少年が肩で息をして立っていた。その表情は、仮面に優るとも劣らぬ形相だ。

「彼は僕のだ…返せ!」

二人は少年の言葉に再び男を見た。その背中には、ぐったりとしたカイザの姿があった。

「カイザ!」

フィオールが彼を救うべく解除魔法を施そうとした時、シドは部屋に飛び込んで窓に向かってきた。しかし、見えない壁に阻まれてその場に倒れ込んでしまう。

「シド!」

「シド?こいつが?!なんで…!」

シドを抱きかかえるフィオールにクリストフは混乱気味だ。そこで、男は動き出した。あいた手を見えない壁に向け、小さく何かを呟く。すると、硝子が割れるような音が響き、キラキラと破片が散らばった。それはとても薄く、触れない。散ったかと思うと、空気の中に消えていった。

「解除魔法……」

蜥蜴が言っと、フィオールは暴れるシドを抱いて後ずさりした。

「何者だ、お前。」

クリストフが窓からゆっくりと室内へ入ってくる男を睨んだ。男は背負っていたカイザを壁に寄りかからせて、クリストフを見た。サラは怯えながらクリストフに抱きつく。

「……」

何も答えずに刀剣を抜く男。クリストフは言った。

「それ、東の国の戦士が使ってる刀ってやつだろ。それに、そのなり……ヤヒコの家の人間だな。」

「……」

「……何をしに来た。烏天狗の面なんかしてこんなところまで。」

「……」

「答える！」

男は無言でクリストフに歩み寄る。クリストフはサラを庇うように立って男を睨む。

「寄るな。」

「……」

フィオールがクリストフの前に立った。男は立ち止まり、じっとフィオールを見つめる。その背後では、シドがカイザに駆け寄ろう

としていた。男はそれに気付いて脇差を投げた。シドはそれをする
りと避けると、カイザの腕を掴んだ。男は踵を翻してシドに向かっ
てゆく。シドは必死にカイザを動かそうとするが、痩せた少年の力
ではびくともしない。少年は意を決して投げられた脇差を手にした。

「お前の相手は俺だ！」

フィオールが後ろから殴りかかった。男は軽い足取りでそれを避
けて流れるように切り上げた。フィオールはアーマーで刀を受けた
が、鉄をも切り裂く刀だ。防ぎきれず、その腕に切り傷を負ってし
まった。フィオールはよろめきながら、口から炎を吹き出した。す
ると、男は後方に避けながら仮面を少しずり上げて、フィオール同
様に火を吹き出した。互いの炎は部屋を中心にぶつかり合い、激し
く燃え上がって消えた。

「……こいつも、火の魔法を。」

「……あの男の小指、見えますか。」

蜥蜴に言われてフィオールは仮面の位置を直す男の手を見た。そ
こには、またしてもフィオールと同じ金の指輪があった。

「……どういうことだ。」

「わかりません。しかし、あれは確かに火の妖精と契約した者の指
輪です。」

「契約？」

「ええ。業輪のようなものです。あれがあれば火の魔法が使えます。
しかし……炎の指輪は父がダンテ様に、私がニアに与えた2つしかこ
の世に存在しません。もしかすると、あの指輪は……」

最悪の状況がクリストフとフィオールの頭を過る。男の小指で光

る指輪は、ダンテのものかもしれない。すると、彼女は男の手に掛けられている可能性が高い。そうすると瓶の封印を解いてもらうどころか、業輪探しの協力を仰ぐことすらできなくなる。

「お前、本当に何者なんだ。ヤヒコの差し金か？」

「イトサマは関係ない。」

仮面の下から籠った低い声が響いた。

「イトサマ、ねえ。ヤヒコはイトサマになったのか。それも予言通りだな。」

見下すように笑うクリストフを、じっと見つめる男。

「クリストフ、どういうことだ。」

「後で説明する。とにかく今はここから出るぞ。瓶と娘は任せた。」

クリストフはそう言つと、背後に隠れていたサラを引っぺがしてフィオールに押し付けた。そして、拳を大きく振り上げた。

「まさか……」

「そのまさかでしょうね。」

顔を引き攣らせるフィオールと諦めたような声を出す蜥蜴。クリストフは、その剛腕を赤い絨毯に向かって振り下ろした。

「やっぱり！」

「崩れます！サラ！」

石の壁に罅が入り、床は絨毯や家具諸共落ちてゆく。ガラガラと

天井からも瓦礫が落ちてきた。フィオールは瓶を抱きしめるサラを小脇に抱えて外に向かって火の橋をかけた。落ちてくる瓦礫を擦りぬけて石埃の中なんとか脱出したフィオール。近くの森に身を隠し、崩れる塔を見ていた。

フィオールが脱出を図っていた時、男はカイザのもとへと走っていた。崩れる床を高下駄で渡り、今にも落下しそうなカイザに手を伸ばす。

「触るな。」

カイザの近くで宙ぶらりんになっていたシドが男の手を脇差で傷つけた。男は怯むどころか、シドがぶら下がっている手に刀を突き刺した。シドはぐつと息を飲んで痛みに耐えようとしたが、刀を抜かれるのと同時にその手を放してしまった。睨みつけながら落ちてゆくシドを見届け、男はカイザに手を伸ばした。しかし、その手は突如止まった。何故なら、カイザが血を吐き出しながら男を鋭く睨んでいたのだ。

「……」

二人が立っていた床も崩れ、ふわりとその身が空に放たれた。男はカイザに手を伸ばしたが、届かない。男は魔法を使おうと左手に炎を作り上げる。が、

「残念、死ね。」

男の目の前には、シドとカイザを抱えて笑うクリストフがいた。少女は軽やかに落ちてくる瓦礫を足場に上へと昇り、天井であったであろう大きな石の上に飛び出した。そして、それを下に向かって

蹴り飛ばした。

フィオルが見ていると、塔は不自然に潰れるようにして崩れ去った。隕石が墜ちたかのような強い突風が吹き荒れ、外壁までもが崩れてゆく。木陰に隠れてサラと瓶を守るフィオル。サラは小さくなって瓶を抱きしめていた。

風がおさまり、フィオルはおそるおそる塔を見た。そこは、石屑が積み重なる荒れ地と化していた。その荒れ地に立つ、一人の少女。

「…クリストフ！」

フィオルはサラの手を引いて駆け寄った。クリストフもフィオルに気付いて笑顔で歩み寄る。

「カイザ！シドも無事か！」

「当たり前だろ。」

「あの男は？」

「…これで生きてたら褒めてやるよ。」

瓦礫の山を見てクリストフは言った。フィオルも、辺りを見渡してみる。

「…よくも、よくも私の塔を！」

二人が振り返ると、兵士を引き連れた国王がいた。

「誰だ、あいつ。」

「国王様だと。」

クリストフが鼻で笑って言った。

「さあ、約束どおり、その顔を泣き顔になるまで殴ってやるよ。」
「…その必要はない。約束は生者同士でのみ成立するものだ。これから死ぬお前との約束など、破綻だ。」

国王が杖を振り上げた。

「…また魔法かよ。」

クリストフが舌打ちをして後ずさる。

「もう目的は果たした。引こう。」

「ああ、」

フィオールに言われて渋々頷くクリストフ。二人は森に向かって走り出した。

「逃がさん！」

国王が杖をつくと、瓦礫が浮いて二人めがけて飛んできた。二人はチヨロチヨロと逃げまどいながらも森へと向かう。国王はぶつぶつと呪文を唱えて杖をついた。

「…いてっ！」

「フィオール?!」

クリストフが振り返ると、額を抑えて尻もちをつくフィオールがいた。

「どうした！」

「か、壁が…」

「壁?!」

クリストフが駆け寄り、フィオルの足を蹴りあげると、そこには最上階の一室と同じ見えない壁ができていた。

「くそっ！」

クリストフが壁を蹴るが、やはりびくともしない。フィオルは閉じ込められ、二人は壁で隔たれてしまった。

「一人逃がしたか。しかし、サラと蜥蜴を捕える事ができただけいいでしょう。」

そろそろと兵士を引き連れて国王が笑いながらフィオルに歩み寄る。

「お前達は何故ここに来たのかは予想がつく。ニアに頼まれたのだろ? あの娘はどこにいる。」

「…教えたところでどうにもなるまい。」

クリストフが国王を睨んで言った。サラを抱きしめ、フィオルも立ち上がった。

「どうにかなるさ、妖精の門を開かせるために、その蜥蜴を生かしてあるんだからな。」

「…腐ってるな、お前。」

国王は壁の向こうのクリストフを放ってフィオルを見た。

「その方、火の魔法が使えるそうだな。」

「…」

「私に使用すれば此度のことは不問に処す。」

「…」

フィオールはサラを抱き寄せ、国王を睨んだ。

「どうだ？私がさらなる魔法を伝授しよう。」

「…うるさい。」

国王がフィオールに手を差し出すと、フィオールは口から火を噴き出した。国王は驚いてよろめくと兵士が国王を庇って前に出てきた。そして、剣を抜いた。

「貴様！国王様に逆らうか！」

「別に俺の国じゃねえからなあ、ここは。そんな奴がどうなろうと知らねえよ。」

フィオールのつり上がった口の端から残り火が尾を引く。

「死にたくなければどっか行け！ほら！」

「いいぞフィオール！全員消し炭にしてさっさと出る！」

クリストフに煽られ、フィオールは前方に向けて激しく火を吹いて見せた。火は瓦礫の下に家具や死体に燃え移り、メラメラと威力を増してゆく。国王は退散しようとする兵士の手を振り払い、叫んだ。

「やれ！あの男を！サラと蜥蜴を取り戻せ！」

「
…」

兵士達は顔を見合わせる。国王よりも強力な魔法を使う男が相手では、闘う気すら起きない。しかし、国王は声を荒げて杖を振りまわした。

「やれと言っている！私の命令が聞けぬのなら…！」

「俺が、殺してやろう。」

低く籠った声。国王の背中に戦慄が走る。その瞬間、瓦礫と共に周りにいた兵士が空に舞い上がった。驚いたフィオールは口に含んでいた火を飲みこんでしまった。

「な、なんだ？！」

「…あいつ！」

クリストフの目には映っていた。火の海を刀一本で舞う、烏天狗の姿が。悲鳴と恐怖が渦巻く壁の中で、国王は立ちつくしていた。一人、また一人と血を噴き出し、空中へと投げ出される兵士。姿の見えない、敵。ついに、その場に立っているのは国王ただ一人になった。がたがたと震えて辺りを見渡すが、サラを抱くフィオールと壁の向こうのクリストフ以外、誰もいない。

「…な、何者…」

「…最後だ。」

背後からの声。振り返った国王の目に、烏天狗の面が映った。かと思うと、視界がぐるりと一回転した。そのまま、鈍い音がしたかと思うと視界は地を這い、暗くなった。

首が落ちてそのまま崩れる国王の身体。それをじっと見つめる仮

面の男。フィオールとクリストフは息を飲んでそれを見ていた。男が二人を見る。サラを抱きしめるフィオールの手に、力が入った。

「…その男と女をよこせ。」

「…誰のことだ？わからないな。」

クリストフは冷や汗を流しながらも笑った。

「お前と、その脇に抱えているブロンドの男だ。運命の至る場所へ誘う鍵。」

「何なんだよ！お前は！」

フィオールが叫ぶと、男は刀をフィオールに向けて言った。

「お前こそ、何者だ？」

「俺？俺は…西の情報屋だ。」

男はフィオールを少しの間じっと見つめて、言った。

「…お前に用はない。しかし、死にゆく同士に敬意を払い…この名を明かす。」

「同士…」

男は左手の甲をフィオールに向けた。輝く金の指輪が同士である証だと言いたいようだ。

「蘭丸、と申す。名も聞かずに切り捨てること、勘忍願いたい。」

そう言うと、蘭丸と名乗る男はフィオールの懷に飛び込んできた。

「逃げる！」

クリストフが叫ぶが、そんな余裕はない。かといって蘭丸の刀はアーマーでは防げない。フィオルは苦し紛れに蜥蜴が入った瓶をサラから取り上げ、それで刀を受けた。すると、瓶は見事にその太刀筋を捕えて見せた。驚いて身を引く蘭丸の左頬に、フィオルはカウンターで渾身の拳を浴びせた。蘭丸は吹っ飛び、瓦礫の中に倒れ込んだ。

「よくやった！今のうちに……！」

クリストフが出るように急かすが、フィオルは頭を抱えてしゃがみ込んでしまった。心配そうにおろおろするサラ。

「どうしたんだ、フィオル！」

「あ、頭が……」

すると、蘭丸の仮面の下から呻き声が聞こえてきた。彼もまた頭を抑えている。フィオルに殴られた左頬ではなく、頭。

「……何を、した。」

蘭丸が苦しそうに聞くが、フィオルは答えられる状況ではない。蘭丸はよろよろと立ちあがった。

「……」

そして、フィオルを少し見つめて瓦礫の向こうへ消えて行つた。

「フィオル、フィオル?!」

「…クリ…ストフ…」

フィオールがゆっくりと倒れ込む。それと同時に、目の前の壁が音を立てて割れた。キラキラと空で光る破片。硝子のぶつかる音が小さく響く。クリストフはシドとカイザを横たわらせてフィオールに駆け寄った。

「しっかりしろ…フィオール！」

小さな光がぶつかり合い、空気に消えてゆく瓦礫の上。少女の悲痛な叫び声だけが聞こえていた。虫の息の3人の男と一匹の蜥蜴。そして、唯一その足で動くことができる少女が二人。

「勝ったんだぞ…あたし達は！おい！起きろよ！」

少女の涙がフィオールの頬に落ちる。それでも彼は目覚めない。魔法のようなことは、起きない。

21 少年はそれでも笑う

いつも感じていた。自分の価値や生きる意味、愛する人との幸せを求めている誰や彼もが…なんと哀れな存在であるか。その命に何の意味もないなんて知らずに、必死に生きて、呆気なく死ぬ。それはまるで蠟燭の火だ。燃え続けて…ふと、消える。そこに残るのは垂れ流れる蠟と、仄かな香だけ。なんて哀れな存在であるか。なんて哀れな存在であるか。感情という毒に蝕まれてもがき苦しむ。誰も知らない。それこそが、神が与えた最大の罰であることを。誰も…いや、あの方は知っていた。

「これからエドガーとお名乗りください。」

黒い瞳の、白いお方。

「…ええ。わかりました。」

柔らかな笑顔の向こうで揺らぐそれは、諦めと、憂。彼女はわかっていたんだ、全て。だからこそ、神も…

彼女が言葉を無くしてしまった今、誰も真実を知ることとは叶わない。これから始まる長い長い輪廻の物語すら、意図するところも知らずに人々は巻き込まれてゆく。なんの、意味もないのに。

- - - - -

誰の声だろうか。それよりも、ここはどこで、自分はどうなってしまったのだろうか。目の前が真っ暗であることに気付き、これは瞼であると悟る。それを開けば何かが見えるはず…彼は、ゆっくりと瞼を開いた。

「…カイザ！」

目の前には、見慣れない少年の笑顔。何度か瞬きをして、彼はゆっくりと身体を起こした。節々が痛い。どうにか生きているようだが、そうとうな無理をしてしまったらしい。

「シド…まだついてきていたのか。」

「よかった！よかったよ！」

シドは鎖が千切れた手枷をガチャガチャ鳴らしながらカイザの手を取って喜ぶ。状況がわかっていないカイザはまだ混乱気味だ。頭の中で記憶を整理するが、どうしてもこの妖精の隠れ家まで戻って来た記憶がない。

「俺は…」

「記憶喪失か？」

顔を上げると、酒瓶片手に扉に寄りかかるクリストフがいた。

「クリストフ…」

「なんだ、ちゃんと覚えてるじゃないか。」

「…そうだ、あの男は！サラと蜥蜴は無事なのか！」

大声を出して傷に触ったのか、カイザは胸を抑えて俯いた。シドが背中を擦ればいいのか迷っておどおどしている。

「あの男は去った。サラと蜥蜴は無事だ。」

クリストフがそう言って近くのソファに座った。

「そうか…じゃあ、お前とフィオールが俺をここまで運んでくれたのか。」

カイザは苦しそうに笑い、部屋を見渡した。クリストフに、シド。隅の椅子にはミハエルが座っている。

「…フィオールは、どうした。」

「…」

「…クリストフ？」

クリストフは眉を顰めてそっぽを向いている。その様子に、カイザの顔から血の気が引いてゆく。

「嘘、だろ？そんな…」

「おい！俺の酒持って行つたら！」

勢いよく開かれた扉。そこに立っていたのは…

「あれ、カイザ起きてたのか。」

「フィオール…」

骨付き肉を片手に仁王立ちする、フィオールだった。カイザはクリストフを睨んだ。

「生きてるじゃないか。」

「そうなんだよ、生きてたんだよ。」

クリストフは嫌そうな顔をして酒を飲んだ。

「なんだよ！二人して俺が死ねばよかったみたいな態度して！」

フィオールが骨付き肉を握りしめてカイザを見下ろした。そんな彼の後ろから、クスクスと小さな笑い声が聞こえてきた。

「みんな死んでしまった、とクリストフ様は子供のように泣いてらして大変だったんですよ？」

フィオールの後ろから、瓶を抱きしめて笑うニアがひょっこりと顔を出した。クリストフは酒を噴き出して顔を真っ赤にする。

「ひ、人が死んだら悲しいだろ！」
「勝手に殺すな。」

フィオールが開き直ろうとするクリストフにピシャリと言いつつた。ニアは楽しそうに笑いながら部屋に入り、カイザの近くに座った。

「体調はいかがですか？」
「ああ…おかげさまでなんとか生きている。」

ニアはにっこりと笑ってクリストフを見た。

「本当に、ありがとうございます。」
「礼はいい。あたし達の方こそ、大事な指輪を貰ってしまっ…悪いな。」

「気になさらないください。ろくに使いこなせぬ私が持っているより、才のある方が有効に使ってくださる方が指輪も喜びましょう。」

クリストフは困ったように笑ってフィオールに言った。

「オのある方、だってよ。」

「ニアは見る目があるな。」

得意げなフィオールを呆れたように見つめるカイザ。その隣で、シドはニコニコと笑っていた。

「しかし、気になりますね。」

ニアが表情を曇らせた。

「東の使者が何故…クリストフ様とカイザ様を狙ったりなど。」

「東の使者…あの男か。」

カイザが聞くと、クリストフが言った。

「ああ。蘭丸と名乗っていた。あのなりは東の装束だし、あの武器は東の戦士が使う物だ。それに、あの烏天狗の面は…ヤヒコの家にあつた物。間違いない。」

「ヤヒコって、美女の一人だろ。」

フィオールはクリストフの隣に腰掛けて聞いた。

「そういえばお前、予言通りだとかなんとか言ってたけど…」

「…カイザは寝ていたから知らないと思うが、蘭丸はヤヒコをイトサマと言っていた。イトサマってのは東の国王を指す呼び名なんだ。」

「伝説ではヤヒコは東の女王と謳われてる。それがどうした。」

「どうしたも何も、あたしが会った時ヤヒコはまだ王位を継いでい

なかった。今だって、ヤヒコが女王になったという報告は入っていない。」

フィオールとシドは顔を見合わせて首を傾げた。カイザは何か考え込んでいる。そして、ゆっくりと口を開いた。

「…ここ最近で伝説の通り、ヤヒコは女王になって…それを機に蘭丸という男が何らかの目的で送り込まれた可能性があるってことか。」

「蘭丸はヤヒコとの関連性を否定していたがな。」

クリストフは面倒臭そうに言った。フィオールは頭を掻きむしって叫んだ。

「あー！いつもいつもお前らだけで理解して！俺はちっともわからねえ！」

「いつもいつも、お前は馬鹿だな。」

クリストフが横目にフィオールを見た。

「とにかく、目的はわからないがヤヒコは敵である可能性が高い。それに、ダンテのことも心配だ。」

「何かあったのか、北の魔女に。」

カイザが聞くと、クリストフは溜息をついた。

「理解のない男に、大事なところで伸びてた男…それに、赤の他人。」

クリストフが面倒くさそうな視線を送る中、シドはニコニコと笑

っていた。クリストフはカイザが気絶していた間にわかったことを一から説明した。ついでに、そこから導き出されたこともフィオルにわかるよう、丁寧に。まだ王位を継承していなかったヤヒコが最近になって伝説のとおり女王になったこと、蘭丸がヤヒコの家臣であること、その蘭丸の狙いがカイザとクリストフであったこと、蘭丸の指にはダンテとフィオルしか持っていないはずの指輪がはめられていたこと…

「わかったか？フィオル。」

「…まあまあ。」

フィオルは難しい顔をして頭を掻いた。

「運命の至る場所へ導く鍵…とか言ってたな。あの言葉は。」

「知らん。」

クリストフはフィオルの問いかけに即答した。

「ダンテの安否も定かでないなら、急いだ方がよくないか。ヤヒコが敵だとしたら業輪がまだ大陸にあるうちに手にしてしまわないと…」

カイザが眉を顰めて言うと、クリストフは酒瓶に視線を落とした。

「ああ。何もわからないうちにヤヒコの手に業輪が渡ることだけは避けたい。」

クリストフは不安そうにしているニアを見た。

「再会できたところ悪いが、その蜥蜴借りていくぞ。」

「……」

「どうせダンテにでも見せないと瓶から出られないんだ。あたしに任せておけ。」

「……はい、」

悲しそうに俯くニア。

「僕も行く。」

「そうだ、忘れるところだった。なんでお前がいるんだ？シド。」

笑いながら元気に手を上げるシドをクリストフは冷やかに見つめる。

「クリストフ、知り合いなのか？」

カイザが聞くと、クリストフは小さく溜息をついた。

「まあな。」

「僕は知らない。カイザ、この人誰。」

シドが問いかけると、カイザは言った。

「あいつはリノア鉱山の山賊を束ねるマザー・クリストフ。ついでに、伝説の美女の一人だ。」

「あ、そうなんだ。前に僕、あの人に殺されかけたんだ。」

シドの言葉にクリストフの目が吊り上がった。

「お・ま・え・が！あたしを殺そうとしたんだろうが。」

「……何があった、この二人に。」

間に挟まれて迷惑そうにしているカイザ。フィオールが骨付き肉の骨をゴミ箱に投げ入れ、言った。

「聞いたことがある。鉱石の商談で失敗した連中がクリストフを恨んで優秀な殺し屋を送り込んだって。計画は失敗したらしいけどな。」

「返り打ちにしてやろうと思ったのにまんまと逃げやがって、このクソガキ。」

舌打ちをしてシドを睨むクリストフ。

「返り打ちにして半殺しにした拳句、僕の事調べ上げてガトーとかいう強い人送りつけてきたじゃん。ひどいよ。」

「てめえだつてあたしを殺そうとしただろ！」

「でも恐怖で逃げ出したいいけな子供に追手を払うなんて、非人道的だよ。」

「どの口がそれを言う。」

言いあう二人にフィオールが割って入った。

「シド、お前の事調べてクリストフにちくつたの俺なんだけどよ、」

「あ！ひどいよ。殺していい？」

「殺し屋組織、ホワイトジャックでも一目置かれてたお前が何であるなところに捕まってたんだ？」

シドの無邪気な脅しを受け流し、フィオールが聞いた。すると、シドの笑顔が引き攣って固まった。

「ホワイトジャックのシド？このガキが？」

カイザが驚いてシドを見た。シドは黙ったまま、何も言わない。

「そうだよ、あの小さな死神ってのはこいつのことだ。」

シドを睨みながらクリストフが言った。ニアは少し怯えて身を引いている。

「…一晩でシアトリアムのマフィアを一人で全滅させたっていう、小さな死神だろ？」

「ああ。」

「…小さいって、単に身長のことじゃなかったのかよ。」

カイザは驚きが隠せないらしく、じつと目の前のシドを見つめた。ついに、シドの笑顔は消えて無表情になってしまった。

「そんな奴が、なんであの塔に。」

「だろ？俺も気になってたんだ。」

カイザとフィオールが話していると、シドがその重たい口を開いた。

「ホワイトジャックの人に、はめられたんだ。」

幼く小さな声が響く。

「…みんなも、僕を殺すの？」

カイザが振り返ると、少年は俯いている。

「みんなも僕が…邪魔なの？」

少年が顔を上げると、部屋の温度が一気に下がった。無表情。しかし、その目には確かな殺意があった。殺意と、不思議な威圧感。まだ11、12歳の少年が放つそれは、確かに培ってきた殺し屋としての力量を物語る。カイザは後ろ手にブラツクメリーを探していた。フィオールも、小脇の荷物に手を伸ばした。ニアは、恐怖で動けない。それぞれが少年の殺意に対し、無意識に動き始めていた。そんな中、

「次、あたしを殺そうとしたらその時こそぶち殺すけどな。」

酒を飲みながらクリストフが言った。怖気づくことを知らない、不敵の聖母は少年の殺気にも動じない。その雰囲気には安心したのか、カイザとフィオールは臨戦態勢を解く。先程までの冷たい雰囲気はどこへやら、少年は拗ねたように俯いた。

「あれは仕事だったから…もうホワイトジャックにも戻れないし、しないよ、そんなこと。」

「だったら邪魔どころか役に立つんじゃないのか？カイザ。こいつはお前に懐いてるんだろ？」

クリストフがカイザに聞くと、シドはチラッとカイザを見て再び俯いた。

「…」

「カイザ、僕…」

シドは顔をあげ、ニッコリと笑った。

「居場所がないんだ。」

その笑顔は、悲しかった。

「行く場所もなくて仕方なくホワイトジャックにいたけど…僕、カイザに会って初めて思ったんだ。この人と一緒にいたいって。ここを居場所にしたいって。」

カイザの脳裏を、バツテンライの言葉が過った。

「あいつとは関わらないほうがいい…」

死神と言われる少年は、カイザの目には孤独に怯える哀れな少年にしか見えなかった。しかし、バツテンライの言葉の意味を知るのは、次の瞬間。

「誰と一緒にいてもみんな死んじゃうから、結果的には何の意味もない無駄な願いだとはわかってる。」

少年は何の悪意もなく言う。

「カイザが明日死んじゃうとしても、誰に殺されるとしても…それでも僕、一緒にいたいと思ったんだ。」

笑顔で俯く少年を、呆れたように見つめる3人。

「…おいクリストフ、シドは本当にカイザに懐いてるんだろうな。」

「何で俺が明日死んだり誰かに殺されることが前提になってるんだ。」

「

クリストフは溜息をついた。そんな3人を見て、シドは首を傾げる。シドがおかしいのは、死生観だ。少年には生きている者の死が真っ先に目に映る。動いているものや人は全て、”まだ死んでいない者”に他ならないのだ。

「…お願いだよカイザ。僕を連れて行つて。きっと役に立ってみせるから。」

カイザは塔でのシドを思い返した。

…死んじゃう。

そう言ったあと、蘭丸に刀を振り下ろされて笑っていた少年。フィオールは部屋に飛び込んできたシドの顔を思い出していた。

…彼は僕のものだ…返せ！

へらへらと笑っている今とは違う、鬼気迫る雰囲気。
クリストフは崩れる塔の中のシドの姿を振り返っていた。

…触るな。

手を刀で刺されても、その身が瓦礫と共に落ちてゆくことも、悲鳴一つあげない少年。

3人にはやはり、少年は狂気に満ちた存在に思えた。生まれながらの殺し屋であり、幼いからこそ残酷で無慈悲な価値観を植え付けられている。そんな少年を、連れてゆけるのか。

「…お願い、だよ。」

笑顔の少年の目が、潤んでゆく。

「…わかったよ。」

カイザが小さくそう言うと、少年は驚いたように固まった笑顔を解いた。その瞬間、その目からは静かに涙が流れた。

「連れていく。旅が終わっても、とりあえず俺が面倒みてやるよ。」
「カイザ！」

クリストフが立ちあがった。カイザが少女を見ると、その顔は極めて険しい。

「なんだよ、お前がシドは役に立って言ったんだろ。」

「鍵戦争でなら…まず、戦力として申し分ない。ただな、育てるっていうなら別だ。ペットじゃないんだぞ。そんな軽々しくそいつの人生を背負うなんてお前は馬鹿か。」

「いいだろ。俺は独身だし…結婚する予定もないし。」

「女の問題じゃねえ。ガキは金もかかるいろいろ大変なんだよ。」

涙を拭って俯くシド。それを見て、カイザは憐れむようにシドの頭を撫でた。

「どうせ世間に出たところでシドには居場所はない。だったら、俺と一緒にいれば寂しくもないし敵から逃げるにも協力しあえる。一人にしてしまう方がよっぽどためにならねえよ。こいつにも、世間にも。」

「だから…こいつや世間のことを言ってるじゃねえんだ。お前自身のことだよ!」

クリストフが声を張り上げた。隣のフィオールも驚いている。

「ガキ一人を育てあげたあたしが言うのもなんだけどな、子供ってのは結構な重荷にもなるんだよ！そいつがしたことはお前の責任にもなる！自分の時間がなくなる！まだ若くて、ましてや死体に拘ったりするお前が、誰かのために自分を犠牲になんてできない！」

「……」

カイザはシドを見た。シドは、不安そうに俯いている。

「……だ、そうだ。」

「……」

「……そう言われても、なあ。」

カイザは困ったように笑った。

「クリストフ、それでもお前はガトーを育てた。マスターも、俺を育ててくれた。ミハエルだって……そうだ。」

守ってもらったばかりだった少年は、もう、青年になっていた。

「そろそろ、俺が誰かを育てる番なんじゃないか。みんなが苦労したことを、俺が担う。」

「お前な……」

「誰かが必ず、自分を犠牲にして何かを守っている。業輪だってそうだ。お前らなんか、顔も知らない世界中の人間を生かすためにその身を犠牲にしてきた。」

「……」

「業輪に比べたら、俺がこの無邪気な殺人鬼をもう少し人らしく育

てることくらい…どうってことないだろ。」

カイザは知っていた。悪事に手を染めねば生きてゆけない幼子が多様な思いをその胸に秘めているのか。シドも、生きるために恐怖や罪悪感を押し殺して生きてきた。自分を押し殺して生きてきた。それによって歪んでゆく価値観や道德観。しかし、そんな真つ黒に染まりかけた心の中核では幼いながらの本能、愛情を求める本能が脈打っている。手を差し伸べられるだけで、抱き締められるだけで、それが黒を白に変えてくれることも。

「とは言っても、自信はない。俺が嫌になったら、いつでも離れていいからな。」

「ううん、その時はカイザを殺して僕も死ぬ。」

嬉しそうに笑う少年の頭を、カイザは苦笑いをしながら撫でた。それを不満げに見つめるクリストフ。

「いいじゃねえか。好きなようにやらせてやれよ。」

フィオールがそう言うのと、クリストフは鼻を鳴らしてソファアに座りこんだ。

「殺されてもしらねえからな。」

「カイザなら大丈夫だろ。それに…あいつは変わったよ。」

「…まあ、最初に比べれば…」

クリストフは諦めたように溜息をついて、シドと話すカイザを見つめた。

22・親子喧嘩が激しい程に絆も深い

「皆、国王の死でそれぞれの役目を果たすため忙しく、見送りは私とサラだけになってしまいました。」

「構わない。お前も忙しいなら無理して見送りなんてしなくてもいいんだぞ。」

小鳥が囁る爽やかな朝。表で荷物をまとめながらクリストフが言った。

「それより、フィオルの指輪…本当にいいのか？」

クリストフが申し訳なさそうに言うと、フィオルも荷物をまとめるのを中断して顔を上げた。ニアは、悲しそうに笑う。

「指輪はフィオル様を選びました。これでよかったのです。それに…大事なのは、心、ですから。指輪がなくなっても、私の夫への愛は変わりません。」

「…そうか。」

クリストフは小さく笑ってニアが手配した馬に跨った。

「じゃあな、また会おう。」

「本当にありがとうございました。」

ニアがぺこりと頭を下げた。その目には涙が溜まって赤い瞳を艶めかせている。

「…クリストフ様、少しだけ…よろしいでしょうか。」

クリストフが腰にぶら下げていた瓶を手に取り、頷く。少女はニアにその瓶を差し出した。ニアは悲しい顔をしながらそれを受け取り、瓶の中の蜥蜴を見つめる。

「ニア、すぐに戻ってくる。」

「ええ…この命の火が燃え尽きる前に、必ずお戻りになってくださいね。」

「必ず。…愛しているよ、ニア。」

ニアは唇を震わせて涙を流し、小さく笑った。

「火の妖精より、心ばかりの…祝福を…」

瓶の硝子越しに口づけをする赤い女と赤い蜥蜴。そこにいる誰もがゆっくりと流れるその時間の中で二人の幸せを願っていた。額縁の中の絵を見つめるような感覚。絵本でも眺めているような気持ち。切なく、そして、美しいそれを静かに見つめていた。

- - - - -

「なあ、ヴィエラ神話ってどこの国の話なんだ？」

夜の墓地。墓の周りの草をむしりながらカイザは聞いた。少年の背後で同じく草むしりしていた彼女は小さく唸りながら言った。

「私の国では有名なお伽話よ。カイザ、知らないの？」

「知らない。名前の由来しか聞いていなかったから。」

「そう。素敵なお話よ。カイザは戦士だから沢山の敵と闘うのだけれど、旅の途中でいろんなものに変身するの。」

「…変身？」

カイザは眉を顰めて後ろをチラツと振り返った。内心、変な話だと思ったのだ。しかし、彼女は振り返ることなく楽しそうに話しかけた。

「そうよ。吸血鬼になったり、異国の怪物になったり。はたまた、心優しい天の使いになったり。」

「…結局、その戦士は何者なの？」

「…それなのよ。」

彼女の声が、低く濁った。その変化にカイザが振り返ると、彼女は空を見上げていた。

「私にもよくわからないの。でも、物語の最後はこう綴られていたわ。神が地上に残した宝を手にした戦士は、次の闘いの時まで長い眠りにつく。その時世界に夜が訪れ、戦士が眠る大地の裏では朝が訪れる…」

「裏つて、この星は丸いんだろ？どこが裏？」

「昔はね、この世界は半球状だと思われていたのよ。その反対側、私たちが辿りつくことができない何かで隔たれた大地が裏だとこの物語は言っているの。そして、戦士が眠りにつく場所は”運命の至るべき場所”と呼ばれているわ。」

「運命つて、戦士の？」

「さあ。きつと、そこでの彼が本来の彼なのよ。あるべき姿、望んだ形で彼は長い眠りにつく。次の闘いが始まるまでね。」

この時やつと、彼女はその頬笑みを少年に見せた。少年は疲弊しきったような表情でむしった草を集めだした。

「よくわからない話だな。」

「そうね。でも面白いわよ？人魚に食べられそうになったりするんだから。」

「人魚って人を食べるのか？！」

少年は驚いて集めた草を蹴散らしてしまった。彼女は再び小さく唸りながら考えている。

「…さあ。その時戦士は異国の怪物だったから…人魚は怪物を食べるってことになるわね。」

「よくわからない…」

「家に行けば本があるけど、読んでみる？」

「…読んでみたいけど、ちょっと緊張する。」

突拍子もない物語に变にドギマギしている少年を見て彼女は笑った。そんな彼女の笑い声を背中に聞きながら、カイザは草むしりをしてすっきりした墓石を見つめた。

「…なあ、ミハエル、」

「何？」

彼女は笑いすぎて滲んだ涙を拭いながら振り返る。少年は彼女に背を向けたまま、俯いた。

「俺、今は何なんだろう。」

「…」

彼女の表情が、真剣になる。

「貴族だったのに、盗賊になって…今はミハエルと一緒に墓守みた

いなことしてる。俺って、何者なの？」

「…私も、今は墓守だけれど昔は違ったわ。」

少年は振り返った。彼女は優しく笑って、言った。

「みんな、そうして新しい自分と巡り合いながら毎日を生きている。そんなものよ。カイザだって、いつまでも盗賊でいれるわけじゃない。」

「…俺も、戦士になれる？」

「なってるじゃない。」

自信満々な彼女の言葉に、カイザは首を傾げた。

「あなたはもうとつくに、戦士なのよ。」

意味がわからなかった。いつもは幼いカイザにもわかるよう沢山のことを教えてくれていた彼女の言葉が、その時ばかりはわからなかった。しかし、カイザは感じていた。微笑む彼女の眼差しが、自分の向こうにいる知らない誰かを見つめているような違和感を。そこにいるのが、“運命の至る場所”へ辿り着いた人物なのだろうか、なんて思いを巡らせてみるカイザ。それでも、やはりわからない。彼女も、何も言わない。誰を見つめているのか、誰を戦士だと認めたのか、わからないままに月は傾く。

- - - - -

北の入り口、ベリオット。職人の街と呼ばれるそこは、失われた技術を取り戻そうとする異端者達が集まる別名ロストスペルの都。

「着くぞ！」

クリストフの目に、その門が映る。そして、一つの人影も。門に近づくにつれて、その人物の表情が明確になってゆく。カイザとフィオールが、あ、と小さく声を出した。

「ガトー！」

「お久しぶりですね、皆さん。」

門に着くなり馬から飛び降り、再会を喜ぶフィオール。ガトーは相も変わらず穏やかに出迎えた。

「遅くなってすまないな。」

「いえ、俺もここへ着いたのは2、3日前ですし。」

クリストフも馬から降りてガトーに歩み寄る。カイザもミハエルを背負ったまま、3人に駆け寄った。

「何でガトーがここに？」

「山賊共を粗方まとめて一仕事したら、ここで落ち会えるよう約束をしていたんだ。」

クリストフがガトーの肩を叩いて笑う。その様子はまさに親子。よく見れば顔も似ていることにカイザは気付く。そして、もう一人、不穏な空気に気付いた男がいた。

「…何やってんだ、お前。」

フィオールの視線の先をカイザを見ると、馬に跨ったままニコニコと剣を抜いているシドがいた。カイザは呆れたように言った。

「大丈夫だよ。ガトーは味方だから。」

「カイザの味方でも僕の敵かもしれないでしょ？」

面倒な奴：自分も昔はあだつたかもしれない、と、カイザは思った。その後ろでは、ガトーがクリストフにシドのことを聞いていた。

「…ああ、あの時の殺し屋ですか。いつぞやの無礼をここで悔い改めていただいても？」

ガトーが笑顔で槍を構えたがために、カイザとフィオールはぎよつとしてあたふたと二人の間に割り込んだ。

「ガトー！もうあいつは反省してるから！今は俺らの下僕だから！」

フィオールが身振り手振りでガトーに弁明をする。ガトーは、そうですか、と言って大人しく槍をしまった。

「シド！何でそうお前は血の気が多いんだ！俺が許可するまで武器を握るのは禁止だ！」

カイザが武器を取り上げて叱りつける。シドは少し不満そうにながらも小さく頷いた。なんとかその場をおさめた二人はホツと肩を撫で下ろす。クリストフはそれを見て笑っていた。

「いいなあ、お前ら。楽しそうで。」

「楽しくねえよ！」

笑う少女に腹を立てるフィオール。一瞬即発の北の入り口で、ガトーと一人の少年を除いた3人は喜ばしい再会を果たした。

「…これは…」

ベリオットの宿で瓶の中を凝視するガトー。

「蜥蜴だ。」

「私はルージユです。何度も言わせないでください。」

窓際で煙管を咥えるクリストフを瓶越しに睨むルージユ。

「はぁ…喋りますね、この蜥蜴。」

「反応薄いな、お前。」

ベッドでぐったりしながらフィオールは小さく笑った。

「で、彼をダンテ様に見せなくてはいけなくなっただんですか。」

「そういうことだ。ノーラクラウンで面倒事にも巻き込まれてな。」

ふっ、と煙を細く吐きだし、クリストフはノーラクラウンでの出来事をガトーに話した。すると、ガトーは難しい顔をして、言った。

「それは…ダンテ様の身が心配ですね。」

「ああ。急いで探しだしたいところなんだが…あのツチノコ女はいつ姿を現すのやら。」

クリストフが面倒くさそうに煙管を振りまわす。

「…実は、俺もその烏天狗の男…蘭丸、といいましたか。彼の噂を

耳にしました。」

「蘭丸が？なんて。」

クリストフはガトーが座るテーブルに駆け寄った。ぼんやり聞いていたフィオールも勢いよく身体を起こした。

「それが、ノースに向かっていたバンディの盗賊団が伝承者と名乗る東の国の男に襲撃されたらしいのです。なんでも、化け物のような強さで…その顔を覆う面も鳥の化け物であったと。きっと彼でしょう。」

「バンディがノースに？」

フィオールが聞くと、クリストフが顔を顰めて言った。

「ノースは、エドガーが生前住んでいた街だ。おそらく、鍵の手掛かりを探しに行ったんだろう。」

「その鍵についても、彼は言葉を残して行ったそうで…」

ガトーは一枚の紙切れをテーブルに出した。フィオールもそれを見ようとテーブルに歩み寄る。

「…なんだ、どういう意味だ。」

「わかりません。」

クリストフとガトーが紙切れを見つめたまま固まる。フィオールはそれを見て、ソファアに座っているミハエルを見た。その寝顔はいつ見ても飽きない程に美しい。死んでいるとは思えない。思えないのだが、脈拍も、呼吸も止まっている。それは確かなのだ。確かなはずなのだ。

「…おい、蜥蜴。お前は何を知っている。」
「ルージュです。」

クリストフは瓶を持ちあげ、中のルージュを覗んだ。

「お前らは確か、火の精霊と繋がりがあるだろ。そいつに会わせろ。」

「私もお会いしたことはありません。実在するのかどうかすら知りません。」

「あたしのところには土の精霊がきたぞ。名も名乗って、あたしにクリストフという忌々しい名前も与えて行った。姿は見ていないが、実在する。会わせろ。」

「精霊は神と同じく神格化された妖精です。その存在はほとんど概念に近く、あなた方が接することができたのは神の寵愛を受けたからに他なりません。地に縛り付けられた妖精が呼び立てすることなど、不可能です。」

ルージュはぷいっとそっぽを向いた。その瞬間、ガトーとフィオルには少女の中の何かがぶち切れる音が聞こえた。

「本気だせ！本気！長のせがれだろ！」

「あなた様の方があのお方達に近いのですから、クリストフ様が本気を出されたらよろしいでしょう！」

「こん…っの蜥蜴…焼いて食うぞ！」

「私は火の妖精ですよ、焼けるはずがないでしょう。」

「もういい！踊り食いしてやるこいつ！」

瓶をテーブルに叩きつけようとするクリストフをガトーが抑えつけた。がちゃがちゃとテーブルの上が荒れる中、フィオルはじつとミハエルを見つめていた。

「?…エドガー様に用意したものですから。」

ニアのあの言葉の意味が、この紙切れに記された言葉なのか。

「ただいま!」

「さっぴー…」

元氣よく部屋に飛び込んできたシド。ガタガタ震えながら、カイザもその後に続いて入室した。シドは羽織をひらひらさせてぼうつとしているフィオルの前に立った。

「カイザが買ってくれた羽織とブーツだよ。」

「あ、ああ…似合ってるな。それよりお前、そのぶつ壊れた手枷外さねえの?」

シドは手首に巻きつく鉄の塊を見つめて、忘れてた、と笑って見せた。フィオルは呆れながら、カイザに取ってもらえ、と言った。

「何してんのお前ら。廊下まで騒ぎ声が聞こえたぞ。」

カイザは椅子に腰かけて羽織にくるまり、ギャーギャーと騒ぐクリストフとルージュを見た。ガトーが困ったように笑い、言った。

「すみません、母がヒステリ-を…」

「なんだと?!」

クリストフの矛先が、ガトーにシフトチェンジした。

「カイザ、取って。」

「ん？あー、忘れてたな。」

クリストフの罵声が響き、がっちゃんがつちゃんと物が飛び交う音がした。フィオールは瓶を抱えてソファアの裏に避難している。

「よし、取れた。」

「やったあ、軽いよ。」

「よかったな……って、あれ。テーブル……」

作業を終えたカイザが部屋を見渡すと、そこは強盗に入られたのではないかと思うほどに荒れていた。割れた窓ガラスに付属の花瓶、ひっくり返って箆笥に寄りかかるテーブルに、足が折れた椅子。そして、天井に突っ込んだ頭をひっこ抜こうとしているのか、宙ぶらりんになってもがくガトー！

「……本当にお前ら何してんの。」

肩で息をして立ち尽くすクリストフを見つめて、カイザが言った。すると、クリストフは額を抑えて、静かに言った。

「……逃げるぞ。」

「……は？！」「」

ソファアの裏から身を乗り出すフィオールと椅子から転げ落ちそうになるカイザ。身軽になって喜んでいたシドも動きを止めてきよとんとしていた。

「早く荷物まとめろ！」

「ガ、ガトーは？」

フィオールが指差す先には、天井に首だけでぶら下がるガトーがいた。

「大丈夫です！先に行ってください！」

天井裏で声を響かせるガトー。シドはそれを見て笑っていた。

「…悪いな、息子よ。」

「本当にお前は母親か？！」

身動き取れない息子を置き去りにして窓から颯爽と逃げ出すクリストフに、フィオールが叫ぶ。

「ほら、忘れ物ないか？」

「うん。」

シドの身の回りを確認し、ミハエルを背負うカイザ。彼を横目に、茫然と立ち尽くすフィオールは言った。

「…お前らも冷静だな。」

カイザはシドの手を引き、窓枠に足を掛けて言った。

「まあ…こんなにしまっても弁償できねえからな。逃げるが勝ちだ。」

「格好いいこと言ってるつもりか？ふざけてるのか？」

「お前の言つとおり冷静なんだよ。」

カイザとシドもひらりと窓から外へ消えた。瓶を抱きしめてガトーを見つめるフィオール。

「…大丈夫か？」

「は、はい！もう少しで、外れ、ますから！」

ぐいぐいと首を引っ張っていたガトーが、今度は天井を殴り始めた。抜くのを諦めたらしい。

「…行くか、ルージユ。」

「はい。」

フィオールも荷物をまとめ、部屋を出ようとした。

「…」

去り際に、先程ガトーが出した紙切れを拾い上げたフィオール。それをじっと見つめ、ポケットにしまった。そして、瓶を抱えて窓枠に足を掛け、天井に罫を入れるガトーを見た。次、ああなるのは自分かもしれない…と死の覚悟にも似たような切ない眼差しで。

23・全て迷路のように一つの出口へ繋がる

「ただいま帰りました。」

「…うわぁ！ガトー！」

窓際で資料をまとめていたフィオールが驚いて紙を床にぶちまけた。ガトーは頭からドバドバと血を流しながら窓から部屋へ入って来た。

「ガトー！一体誰に！」

酒瓶を投げ捨ててガトーに駆け寄るクリストフ。憐れむように息子の頭を撫でた。ガトーはへらへらと余裕そうに笑いながら、言った。

「母さんですよ…」

「…こんなになるまで暴れたっけ。」

「正確に言えば、首が抜けなくなつて天井を殴っていたら負傷しました。まあ、母さんのせいです。」

「…すまん。」

無表情で謝るクリストフと、流血しながら微笑むガトー。見つめ合つて立ち尽くす二人を、フィオールは不思議そうに見ていた。

「シド、俺の荷物から適当に物出して応急処置してやってくれないか。」

ベッドの上でブラックメリーの手入れをしながらカイザが言った。テーブルの席についてルージュと話していたシドは、ニッコリと微

笑んだ。

「嫌だ。」

「……」

「ガトーなんて死ねばいいのに。」

テーブルに頬杖をついて、ねー、と楽しそうに瓶に向かって同意を求めるシド。

「そんなこと言っていると、またクリストフがヒステリ-起こすぞー。」

「やる。」

カイザの言葉にシドは迅速に席から立った。クリストフは目を吊り上げて二人を睨む。

「……カイザ、お前はいい父親になれるだろうよ。」

「ああ、お前がいい脅し文句になってくれるおかげだな。」
「もう一回、暴れてやろうか……」

既に表情が強張っているクリストフに駆け寄り、激しく首を横に振るフィオール。

「苛立つのはわかるけどな、八つ当たりはよくない！」

「だったらあの蜥蜴を締め上げて知ってること全部吐かせろ。」

ぶいっとそっぽを向いてクリストフが言った。少女とフィオールのやり取りをきいて、カイザの手が止まる。

「やっぱり、何かあったのか？」

「まあな。」

クリストフは荒々しくテーブルの席についた。

「お前は大事なところでいつもいない。」

「俺がいない間に大事な話するなよな……」

すっかりご立腹のクリストフ。カイザは手入れをやめてベッドから離れ、クリストフの正面の席へと歩み寄った。

「……ねえ、痛い？」

笑顔でガトーの頭を包帯で締めあげるシド。

「いいえ。」

笑顔で返答をするガトー！。

「これは？」

「全く。」

「これでも？」

「全然。」

「死ねばいいのに。」

見兼ねたカイザは呆れたような顔をしてソファァーで言い合う二人の方を見た。

「いい加減にしろ、シド。ガトーに恨みでもあるのか。」
「あるよ。」

包帯を手放し、服を捲って腹を出すシド。その右胸の少し下の辺りに何やら刺し傷のようなものがあつた。カイザは目を細めてそれを見つめた。

「思いつきり槍で刺された。」
「仕返しです。」

ニツコリと笑うガトーに、カイザは首を傾げた。

「仕返し？」
「あ、いえ……」
「僕はガトーに何もしてないよ。クリストフにだって何もできなかったし。」

頬を膨らましてくれるシド。殺し屋である少年が自分の敗北を語っているのだ、おそらく、嘘はついていない。ガトーは困ったように笑いながらシドの頭を撫でた。

「以前はすみませんでした。これからは仲良くしましょう。」
「嫌だ。」

笑顔で見つめ合う二人。ガトーは大きく息を吐いて、言った。

「…槍を刺しても悲鳴一つ上げない、そんな可愛げのないところも相変わらずですね。」

今度はガトーが暴れ出すのではないかと、カイザは不安になった。

「…シド、ちゃんと手当してやれ。」

「わかったよ、仕方ないなあ。」

ガトーの言うとおり可愛げのない返事をするシドを横目に、カイザはクリストフに向き直った。

「で、なんだっけ。」

「蘭丸が言葉を残して行っちゃってとこまでだ。」

瓶の上に手を置いて、クリストフは言った。フィオールは逃げる際に拾い上げた紙を出そうとポケットに手を入れる。

「…待ってくれ。それで…ノースは、無事なのか。」

「密偵の話だと、バンディ達はノースに行くのを止めて近場の街に拠点を置いたそうで。」

シドに巻いてもらった包帯を撫でながらガトーが答えた。シドは手当てを終えてそそくさとソファアを離れ、カイザの隣に座った。

「それなら、よかった…」

カイザはグラスに視線を落とし、弱弱しい声で呟く。フィオールはそんなカイザを見つめて、ポケットの中の紙をテーブルに出した。

「これが、その時蘭丸が言い残した言葉だそうだ。」

フィオールが出した紙を覗きこむカイザとシド。

「…どういつ、ことだ。」

カイザは震える手で口を覆い、脱力したかのように椅子の背もたれに寄りかかる。シドは、紙から視線を離してベッドの近くの椅子に腰かけるミハエルを見た。

「あれ、生きてるの？」

シドがそう言うと、クリストフは大きな音を立てて瓶をテーブルの真ん中に置いた。そして、きつくルージュを睨みつける。ルージュは、じっと目の前の紙きれを見つめ、言った。

「…業輪は滅さねばならない。」

箇条書きになったそれを、ルージュは力なく読みあげる。

「部屋を開けてはならない。鍵を持つ西の巫女は火の精霊と共にあり…生きながらにして、死んでいる。」

カイザの心臓が大きく脈を打つ。視界がぼやけ、口にあてがった手も小さく震える。そんな彼を見て、ルージュは言った。

「最後の一言が真実である、とだけしか申しようがありません。」

「じゃあ業輪と部屋に関する言葉をどう考える。」

クリストフが聞くと、ルージュは項垂れた。

「私には、何も…彼が何を知っていて何を考えているかまではさっぱり。精霊様の存在も知っているようでしたし…一体彼は何者なの

か。」

「その、精霊っていうのは何だ。」

震える手を膝元に戻し、カイザは聞いた。ルージュはじつと俯くばかりで何も話さない。すると、クリストフが口を開いた。

「いわゆる、神の使いだ。地上へ戻ったあたし達のもとへやってきて男の名前を与え、鍵と業輪について語っていった。」

「ルージュ、そいつに会わせてくれ！そしたらミハエルは……」

カイザが懇願の表情でそう言うと、言葉も半ばで、ルージュは小さく首を横に振る。

「……先程、クリストフ様に申しましたとおり……私には無理です。」

「……でも、ミハエルは生きているんだよな。」

「それすらも、なんとお応えしているのか……蘭丸という者の言葉が一番適切であると思います。身体は死んでいますが、御霊が眠っているだけにすぎません。」

クリストフは酒を煽り、言った。

「なんで早く言わないんだよ。エドガーがそんな状態になってるってのに。」

「私達は死という感覚が人間とは違うのです。今のエドガー様はあなた方にとっては死んでいるのかもしれませんが、私達にとっては生きておられるのです。」

「……ルージュの言うとおりだ。」

黙っていたフィオールが、真剣な表情で言った。

「妖精の森で留守番していた時、エドガーの隣で一人考え事をして
いる俺のところへニアがやって来たんだ。水が入ったコップを二つ
持つて。ニアは一つを俺に、一つをエドガーの近くに置いた。飲ま
ないのか、と聞いたら…これは、エドガーに用意した物だと、さも
死体を生きているかのように扱って…あの言動の真意がきつと、ル
ージユの今の言葉なんだろうよ。」

「…珍しく飲み込みが早いじゃないか。」

クリストフが不満気にフィオールを見る。フィオールは真っ直ぐ
にクリストフを見て言った。

「悪いが、俺はお前達と違ってエドガーを死体としてしか見れずに
いたからな。妖精達の対応に違和感を感じたんだよ。それに、エド
ガーの生死でもめてる場合じゃない。蘭丸の目的はお前らだけじゃ
なく、業輪をこの世から消すことなんだろう？」

クリストフの酒瓶を持つ手が止まった。

「俺はまだその輪っかが世界を支えているなんて実感もわかないし、
そんな争いの元が消えてくれることにはなんとも思わない。でも、
お前らは違う。」

フィオールの眼差しが、鋭くクリストフを射る。

「…話には出したくなかったが、この際だ。お前らのどちらかが業
輪を手にするとして、どっちが部屋を開くんだ。」

フィオールの問いかけに、クリストフは眉を顰めた。

「今まであいつに苦勞をかけてきたあたしが、エドガーの部屋を開

けられるはずがないだろ。業輪は一度カイザに手渡し、エドガーの墓に供える。そしたら、あたしがまた業輪を回収して使命を果たす。

「…クリストフは、こう言っているが？」

フィオールが隣で考え込むカイザを横目に見た。カイザはその視線に気づかない。

「…カイザ、」

「あ、ああ…」

カイザは慌てて返事をして、また、黙り込んだ。

「…」

ミハエルは人と違う形で生きている。この事実が、カイザの中にある思いを芽生えさせる。それは、彼女の死を見守りたいと願っていたカイザには考えもつかないことだった。

「…ミハエルは、生きてるんだよな。」

カイザの呟きに、フィオールはその思いを察して溜息をついた。

「ミハエルの部屋には、願いを一つだけ叶える木が…あるんだよな。」

「…カイザ、お前、」

クリストフがそう言うと、カイザは俯いたまま、言った。

「死者を蘇らせようなんて、そんなこと…墓守のミハエルが望むわ

けもないし、考えたこともなかった。でも、生きているなら…眠っているだけのなら…その眠りから、覚めさせることはできる…」

クリストフは、額を抑えて俯いた。

「…クリストフ、頼む。俺に、その部屋を譲ってくれ！」

カイザは泣きそうな表情でクリストフに訴えかけた。少女は、苦しそうな顔で下を向くばかり。

「頼む！クリストフ！」

「待て、カイザ、」

テーブルに身を乗り出して頼み込むカイザの肩を、フィオールが掴んだ。

「蘭丸が部屋を開いてはいけないと言った意味もわからないうちに早まったことはするな。なんせ、この鍵戦争はこの世の運命がかかっているんだ。」

「…」

「だが、蘭丸の警告の意味次第では…俺は誰かが部屋を開くことは賛成だ。」

フィオールの言葉に、カイザは顔を上げた。

「木は、一つしか願い事を叶えないんだ、エドガーの部屋を開いてしまえばもう鍵戦争は二度と起きない。」

フィオールはクリストフを見て、言った。

「どうだ、クリストフ。」

「…わかったよ。好きにしろ。」

少女は諦めたように片手をぱたぱたと振ってみせた。それを見て、カイザの表情が明るくなる。

「あたしも…エドガーには会いたいからな。」

「クリストフ…ありがとう。」

「でもな、フィオールという言葉を忘れるなよ。」

クリストフはキッと顔を上げてカイザを睨んだ。

「蘭丸の『部屋を開いてはならない』と言った理由次第だ。お前の願望一つのために、世界を破滅に導くようなことになったら…」

「…わかっている。そんなこと、ミハエルのためとはいえ…できない。」

少女の言葉を遮り、カイザは言った。

「今の俺には、できないよ。」

カイザはクリストフ、ガトー、ルージユ、フィオールを順々に見つめ、最後に、隣のシドを見下ろした。全く話がわかっていないシドは、首を傾げて笑って見せた。そんな少年を見て、カイザは優しく微笑んだ。

「ミハエル以外にも、大事なものができたんだから。」

カイザの言葉に、シドは驚いた顔をした。

「…そうだな。もう、前のお前じゃないんだった。」

クリストフは、小さく笑って酒を口にした。そして、ふと思い耽ったような表情で言った。

「蘭丸は、何か知っている。」

少女の呟きに、緊張の糸が張り詰めた。

「業輪や部屋のことまでか、精霊に、エドガーのことまで…」

「あの指輪のことも気になります。」

ルージユがクリストフを見上げ、言った。

「そうだな。あたしはエドガーの死因も、カイザの墓の意味も、クロムウェル家と接触したらわかると思っていたが…もっと早く、全ての真実が明かされるかもしれない。」

「蘭丸が知っているということか。」

カイザが聞くと、クリストフは酒瓶を見つめながら頷いた。

「もしかしたら、な。」

皆、それぞれに思いを巡らせる沈黙。新しい希望と、真実への手掛かり。それらは複雑に絡み合い、3人の意図するところからはずでに逸していた。もう、進むしか道はないのだ。

そんな中、一人だけ嬉しそうにしていたのがシドだった。少年がカイザについてゆこうと決めたのは、ほんの好奇心だった。それが、思わぬ幸福感を少年にもたらしていた。誰かを大事に思うこと、大事に思われることを少年はその時学び始めていた。血の匂いに塗れ

て信頼や愛情から遠いところで生きてきた少年にとって、カイザの言葉や頼笑みがかけがえのないものになってゆく。かつての、カイザとミハエルのように。そして、少年もまた…その愛情に溺れて、その身を危険に放り出すことになる。ミハエルのために旅をする彼同様、大事な人のために幼い手を血に染めてゆく。

24・酒は歳を重ねないと良さはわからない

夜の雪山。クロムウェル家の軍勢が山を越えようと吹雪の中を移動している。それを遠くから見つめる、銀色の瞳。

「構え、」

マントを翻し、大きく右手を翳した。その背後で、ぞろぞろと軍勢を狙う人影。

「…撃て。」

白い雪道が、赤く染まる。吹き荒れる吹雪の風音。無音の、銀世界。

「どうも、あのお方は読めませんね。」

「誰のことだ。」

夕食の支度をするガトーに、クリストフが聞いた。

「フィオールさんですよ。」

クリストフは、あー…と薄い返事をして、フィオールが残していたシドの資料に視線を戻した。

「こんなことを言っただけ…難ですが。頭の弱い人だとばかり。」

「確かに馬鹿だがたまに凄いんだよ、あいつ。情報屋として一目置

かれているだけはある。」

そのようですね、と笑ってガトーは手を拭きながらティーポッドを取り出した。

「あの方はどちらの出身で？」

ルージユに聞かれ、クリストフは難しい顔をしてガトーの方を向いた。

「…ガトー知ってるか？」

「いえ、俺は…」

クリストフはルージユを見下ろし、言った。

「お前、あいつに興味あるのか？」

「はい…僅かな時間で魔法を器用に使いこなしてらしたので。魔力は一般人より少し上、といったところなのが惜しいですね。強い魔力を兼ね揃えていれば、ヨルダ様にも負けない魔法使いになつていたでしょう。」

「ヨルダ？」

「ダンテ様の一番弟子です。ノーラクラウンで国王の専属魔術師をしていました。」

クリストフは眉を顰めた。そんな少女の目の前に、ガトーはティーカップを置いた。

「ヨルダっていつのか。ダンテの弟子がなんであんな国王に仕えてたんだか。」

クリストフは頬杖をついて資料をテーブルに置いた。

「フィオール様が手にしたあの指輪が目的だったようですが、私は既にニアに渡しておりましてので諦めて国を去りました。なんでも妖精の指輪を探し回っているとか。」

「ダンテは確か、この世の妖精とは契約し尽くしたと言っていたな。」

「あの方は風の精霊様とも契約なさっておられるはずです。」
「精霊と？」

驚いているクリストフのティーカップに、ガトーは温かい茶を注ぐ。立ち上る湯気を見つめて、ルージュは言った。

「ダンテ様だからこそできたのです。あの方が魔術師の最高峰として崇められる由縁でもあります。」

「はあ… あんなチビがね。フィオールもダンテに弟子入りさせるか、次、あいつらが蘭丸と闘って勝てるとも思えないからな。」

「それは名案です。そしたらいつ瓶に閉じ込められても出られます。」

「ははっ… そうだな。」

茶を啜り、談笑をするクリストフとルージュ。喧嘩をしていた二人が仲良く話す姿を見て、ガトーは微笑ましく思っていた。

「あいつ、たまに凄いいけど本当に馬鹿なんだ… ダンテは弟子にしてくれると思うか？」

「大丈夫です。呪いや薬物を扱う魔法はできなくとも、基本的に鍛錬は勉強とは違いますので魔力さえ扱えれば馬鹿でも多様多種の魔法を習得できますから。弟子入りまでとはいかなくとも、役に立つ魔法を彼に授けてくださるでしょう。」

「そうか、馬鹿でも大丈夫か。」

「ええ、馬鹿でも使い道はあります。」

「それはよかった。」

その笑顔の裏で、ガトーはフィオールが哀れに思えてきていた。

「ぶえーつくしよい！」

「…すげえくしゃみだな、」

「ん、ああ…俺程になるところ、現地妻達が心配して俺の噂し始めるんだよ。」

フィオールは鼻を吸いながらへらへらと笑って見せた。カウンタ―で隣に座っている男はフィオールに鼻紙を手渡し、呆れたように笑った。

「情報屋も大変だな。伝説なんかの情報のために寒い中北まで。」

「まあな。伝説だろうが法螺話だろうが、金にするのが俺の仕事だからな。」

フィオールは手渡された鼻紙で鼻を噛むと、酒が入ったグラスを手を取った。

「じゃあ、さつきノークラウンのいい宿屋を教えてやったから1000ペルーな。」

「え?! そんなので金取るのかよ!」

驚く男にフィオールは笑いながら言った。

「なんだよ、今度愛人と旅行するって言うから穴場教えてやったのに。じゃあ金はいいいよ。俺探し物してるから、それについて何か教えてくれれば。」

「調べものに探し物か。うーん…答えれば金は払わなくていいんだな？」

「おう、使えそうなネタならな。これくらいの金の輪なんだ。細かい古代サンクチュアリ風の装飾をされた盗品なんだが、知らないか？」

手で輪っかを作って見せるフィオール。それを見つめて男は小さく唸る。

「わからねえなあ…骨董品には弱くて。」

「そうか…じゃあ、ダンテっていう魔女を知らないか。」

「魔女？ダンテって男の名前だろ。」

「あだ名だあだ名。」

男はぶつくさとか何か呟いている。どうやら、ダンテという名前に聞き覚えがあるようだ。しかし、何やら諦めたような顔をして溜息をついた。

「はあ、どうやら金を払うしかないみたいだ。俺の知ってるダンテっていうと今や革命軍の英雄で…男だし、あいつが魔法を使うかは知らないが、北の魔女共とは面識あるって話だ。」

「魔女達と？」

「頼む！500ペルーに負けてくれ！そしたら俺の嬉恥ずかし赤裸々な半生を…」

「いや、いい。」

フィオルは酒を一気に飲み干し、言った。

「その話、詳しく聞かせてくれ。」

「え、いいのか？」

「ああ、釣りが出るくらいだ。その男について教えてくれたら、俺のとおきのおきの情報をプレゼントしてやるよ。」

笑顔のフィオル。しかし、その眼光は鋭い。男はごくりと唾を飲み込んで、フィオルを見つめていた。

「ねえねえ、次は？」

「そうだな…ベリオットなら小さな盗賊団がいたはずだから、そいつらから巻きあげるか。」

仕事を終えた職人達で賑わう繁華街。その小さな酒場で札束の枚数を数えているカイザと、グラスに注がれたジューズを飲みながらそれを見ているシド。カイザは数え終わるとそれを羽織の内側にしまい、ショットグラスを一気に飲み干した。

「…あつたまってきた。」

カイザは北に来てから気温の低さで震えどおしだった。酒を飲んで頂垂れる彼は決して酔っているわけではない。寒さに耐えて疲れしているのだ。

「ねえ、お酒って美味しい？」

そんなカイザの目の前には、冷えたジュースを美味そうに飲むシドが。その様子を見ているだけで、カイザは寒くなってしまった。

「まあ、美味しいよ。」

「僕も飲みたいな。」

ニコニコと氷が入ったグラスを握りしめて楽しそうに足をパタパタさせるシドに、カイザは困ったように言った。

「……12歳だっけ。飲むのは勝手だが、まだ不味く感じるんじゃないか？」

「そうなの？」

「大人になると美味しく感じるんだよ。子供が飲んでも不味いだけだ。」

「ふーん。じゃあ、カイザはいつお酒好きになったの？」

カイザは盗賊団で飲み明かした日々をふと思い出した。あまり美味いと思えず付き合いで飲んでいたが、いつの間にか美味しく感じていた。気付くとベロベロになるまで仲間と杯を交わしたりと、飲み方を覚えてからはその時間だけは心が少し楽になるのだった。

「……俺は遅かったよ。つい2、3年前だ。」

「そっか。カイザは20才だから……あれ？」

指折り数えてみるものの、シドは難しい顔をしている。子供とは思えない口の利き方をするこの少年、数字には弱いらしい。それに気付いたカイザは、ふっと小さく笑った。

「18だ。」

「じゃあ僕も18才になったらお酒飲む。」

「ああ、そうしろ。俺の国では18から酒を飲んでもいいことにな
ってるし。」

「へえ、そういう決まり事があるんだ。初めて知ったよ。」

とんだ無法地帯で育ってきたのだ、知らなくても当然だ。カイザ
は法律などもある程度教えた方がいいのか、考えていた。

「…カイザ、」

酒をグラスに注ぎながら、とりあえず最低限の教養から叩きこも
うと考えいたカイザは、シドに呼ばれてそちらを見た。

「何だ？」

「僕、殺し屋なんだけど…」

「…？」

「殺し屋って、盗賊になれる？」

空っぽのグラスを握りしめ、中の氷を見つめるシド。カイザは、
少年が何を言わんとしているのかわからなく察していた。しかし、
どう返答したらいいのか、悩んでしまった。

「僕、カイザみたいな盗賊になりたい…」

少しは人らしくなるように育てよう…そう、考えてはいた。でき
れば盗賊などにはしたくない。本当は、普通に日の下で生きてほし
い。それができないことは、わかっているのだが…若い少年はカイ
ザには眩しく、希望で溢れたものに見えるのだ。まだまだやり直す
ことができる、そんな…ホワイトジャックを追われた脱獄囚には夢
すぎる希望。

「…なれるだろ。お前なら俺なんかより凄い盗賊に。」

カイザがそう言うと、シドの表情が明るくなってゆく。

「本当？」

「ああ。なんなら今日盗賊のアジト探してそこからお前が使ったための道具もかつぱらってくるか。」

「やったあ！」

自分は嫌で仕方なかった盗賊という肩書を、この少年は無邪気に欲している。それがカイザは哀れにも思えたが、仕方がないことにも思えた。幼くして神に見捨てられ悪魔にその身を守られる孤独な悪党。そんな少年もいつか、自分が世界でどんな立場にあるかを知らねばならない。少年が酒を飲める歳になるまでには、理解してもらいたい。そう、嬉しそうにしているシドを見つめながらカイザは考えていた。

「ねえ、いつ盗賊になれる？」

「そうだな…」

マスターやフィオールが教えてくれたこの世界で生きていくための気構えを理解した時、カイザはやっと盗賊として生きる決意ができた。それは、つい4週間程前の話。

「酒が美味く感じたらかな。」

「えー…じゃあ、それまで僕は殺し屋のままなの？」

「…せめて盗賊見習いにでもしとけ。」

あ、そっか、と納得してシドはニコニコと笑う。カイザはそんな少年が立派な盗賊になる姿を思い浮かべて、少し笑った。

25・仕事は迅速かつ狡猾に

「いやー、ありがとうな！いい話を聞かせてくれて！」

フィオールは男の手をきつく握り、上下に激しく振った。男も満面の笑みでその握手を受け入れる。

「よかったよ、戦争の話でもネタになるみたいで。」
「ありがとうな。じゃあ、俺からとっておきの情報を。」

フィオールは酒のボトルを手に取り、男のグラスに並々と注いだ。

「こんないい酒、いいのか？」

「いいんだよ。飲め飲め。」

「…悪いな。で？そのとっておきの情報ってなんだ？」

フィオールは張り付いたような笑顔を浮かべ、言った。

「お前の嫁、浮気に気付いて復讐する準備してる。裁判沙汰にしてお前を吊るしあげるつもりみたいだな。」

男はグラスを手に、表情を固まらせた。

「それとお前の愛人な、お前には24歳なんて言っているが、本当は35歳で美人局をして稼いでる。」

「う、嘘だろ？そんなことなんでお前が…」

グラスを持つ手が震え、変な汗をかき始める男の肩を抱いて、フィオールは言った。

「俺は情報屋だ。」

「…そんな、まさか、」

「今度の旅行先、南に下って最終的にラパンに行くんだろ？」

「あ、ああ…」

「ラパンってな、その女に美人局させてるマフィアが根城にしてる街なんだ。」

男の顔が、真っ青になった。

「お、俺はどうしたら…」

「そうだな…俺ならほとぼりが冷めるまで生活できるところを紹介できるが…」

「教えてくれ！」

「紹介料は100万ペルーだ。」

そう言うと、男は黙って俯いた。フィオールはそんな男のグラスに酒を継ぐ。並々と、溢れるのも気にせずに。

「女には気をつけねえと。節操のない付き合い方をしていると、こういう目に合う。」

「…」

「いいだろ、ここの酒代で手を打ってやる。」

フィオールの言葉に、男は顔を上げた。フィオールは自分のグラスに酒を注いでいる。

「男としてはお前に同情しちまうよ。俺も女には何度泣かされたことか。」

思いだして溜息をつくフィオール。そんな彼に、男は悲しげに笑いながら言った。

「…助かる。お前も大変だったんだな。今は女、いないのか。」

「…いないわけじゃないが、」

「上手くいつてるのか？」

「…」

クリストフを思い出してフィオールは、あー、と覇気のない声を出した。

「えらく強気な女でな、しょっちゅう殴られる。」

「カカア天下ってやつか。」

「ああ、俺よりずっと年上の息子とかもいて…いろいろ悩んでるよ。」

「

表面張力でたゆたゆと波打つ酒を啜っていた男は、思い切り嘔き出してしまった。ごほごほと咽る男を、フィオールは呆れたように見つめる。

「…お前っ、どんなババアと付き合ってたんだよ。」

「まあババアなんだけど…その、」

フィオールは頬を赤らめ、そっぽを向いた。

「…可愛いところも、あるんだよ。」

照れている彼を見て、吐き気を催す男。これが俗に言う熟女趣味なのか。35歳の美人局に引かかる自分が、まだマシに思えた。

「…恋愛は人それぞれだな。」

男がそう言うと、フィオールは笑った。

「お前みたいな熟女趣味もいるしな。」

「それはお前だろ。」

男がフィオールを睨むと、フィオールは何かを思い出したかのよう
に険しい顔をした。かと思うと、ゆっくり前を向いて両手で顔を
覆った。

「自覚はないが、俺…少女性愛ってやつかもしれない。どうしよう
…」

「…何を言っているのかさっぱりわからないんだが。」

一人頭を抱えるフィオールを、男は不思議そうに見つめていた。

「開いた！すごい！」
「しっ！」

盗賊団アジトにある小さな倉庫の前。カイザの技術を目の前にし
て目を輝かせるシドの口を、カイザは手で抑えつけた。シドはこく
こくと頷く。カイザはそつと手を離し、倉庫の扉を開けた。真っ暗
で、人がいる様子はない。

「…」

二人は素早く中に入り、扉を閉め、シドは蠟燭に火を灯した。その明かりを頼りに、カイザは再び鍵をかける。

「よし、さて…物色するか。」

「うん。」

シドから蠟燭を受け取り、カイザは奥へと進む。その後ろにぴたりとくっついてシドは武器が並ぶ室内を眺めていた。カイザはその中で一本の剣を手にとった。それを見て、シドが聞いた。

「…それ、持って行くの？」

「ああ。」

剣をじっくりと見つめるカイザ。シドはキョロキョロとあたりを見渡し、下段の剣を手にとった。

「それ、刃毀れてるよ。こっちの方がキレイだよ。」

「うん。でもこの剣にはマーシャル家の紋章がついてる。たぶん、兵士が横流ししたものだ。貴族や王家の物には高い値がつく。紋章がついたものならなおさらだ。」

「ふーん。じゃあ、これは？」

シドはカイザが持っている剣の近くに置いてある剣を指差した。カイザは首を横に振り、言った。

「それは偽物だ。」

「なんでわかるの？」

「…」

カイザは紋章に埋め込まれた石を指差してシドに見せた。

「マーシャル家は本物のルビーを使っている。そっちはただの石ころだろ。」

「…本当だ。」

「この本物を見本にして手下に作らせては金にしてるんだろ。せこいな。」

カイザは剣を袋にしまった。その時、シドの真っ直ぐな視線に気付いた。少年は口を開けてカイザを見つめている。

「…何、」

「…盗賊って凄い。鍵も開けれて、目利きで、何処にでも入りこめて。」

やってることはコソ泥と同じなんだが…カイザはそう思ったが、言わずにおいた。

「お前だつてできるようになるよ。ちゃんと教えてやるから、金になりそうな物を見つけたら俺に見せてみる。」

シドは笑顔で頷き、近くの棚を物色し始めた。カイザも奥へ進み、隈なく金目の物はないか目を光らせる。しかし、こんな小さな盗賊団ではろくなものがない。貴族の剣をよく手に入れたものだと言え、関心を抱いてしまう程。すると、カイザはある物を見つけてしゃがみ込んだ。

「カイザ、これは？」

箱の前でしゃがみ込むカイザに駆け寄るシド。その手には2本の剣と、一本のナイフ。カイザはそれを見て、はあ、と小さく息を吐

いた。

「さすが、小さな死神と言われるだけあって…選んでくるのはどれも殺しに打ってつけの代物ばかり。」

シドが選んだ物を呆れたような目つきで見るカイザ。その中でも刃の黒い短剣を見て言った。

「このルーシアは売れるな。」

「ルーシア？黒鋼のこと？」

「知ってるのか。」

「うん、僕ホワイトジャックでは黒鋼の鎖鎌使ってたから。」

「そんないいやつ使ってたのか…黒鋼はその辺の鋼より価値がある。これはその中でもルーシアって街で作られた短剣だ。ルーシアは剣が有名なんだ。盗賊の間では盗品を作られた街の名前で呼ぶことも多い。」

カイザはルーシアを袋にしまい、シドの頭を撫でた。

「俺だったら見落としてたよ。よく見つけてきたな。」

シドはニツコリと笑った。カイザは微笑み返し、その手を離して箱の中に突っ込んだ。ごそごそまさぐり、一つの鉤爪を取り出す。

「それも売れるの？」

「違うよ。この箱には盗賊の必需品がしまっている。お前が使う分、貰って行くことと思って。」

「本当？」

シドは嬉しそうに箱の中を覗きこんだ。すると、カイザが、あ、

と声を上げた。

「そう言えばお前、アーマー持ってないな。鉤爪もだけど、ワイヤーとかはアーマーがないと使えないんだよ。」

「そうなの？でも僕の水ワイトジャックのアーマーは塔で取られちゃったよ。」

「お前子供だしな。特注で作らないといけないし……」

カイザは困った顔をして頭を掻いた。

「まあいいか。クリストフにおねだりしてアーマー買おう。」

「クリストフ、買ってくれるかな。」

「服とかも買ってくれたし、大丈夫だろ。お前のことを戦力として認めてるからもしかしたら武器も調達してくれるかもしれないな。できればこの職人の街でいい物手にしといた方がいいだろう。」

「そうしてくれたら嬉しいなあ。」

ベリオットに来るまで、クリストフの財布の紐がこぶ結びになっていることを思い知っているシドは少し不安そうだった。しかし、二人はそれぞれおねだりが失敗した時のことを考えていた。カイザはクリストフに渡す金と別にへそくりをする計画を、シドは適当な通行人を殺して金を奪うという計画ともいえぬ荒技を。この二人、本当の親子なのではないかと思う程思考が稼業に浸食されていた。

「……こんな感じか。」

道具をまとめた専用の入れ物を腰に右腰の少し後ろに取りつけてもらい、シドは飛び跳ねて喜んだ。

「あとはアーマーと……ギバーだな。」

難しい顔をするカイザを見上げるシド。

「ギバー？」

「上級の解錠器具だよ。それがあれば複雑な鍵も開けられる。でかい盗賊団のブラックメリーでも使いこなせる奴が少ないからあまり出回ってないんだ。こんなしけた盗賊団が持つてるわけないとは思ったが、ベリオットでも作れる職人がいるかどうか……」

カイザは出口へ向かいながら言った。シドは浮かない顔をしてその後が続く。

「そんな道具、使えるかな……」

「お前は使えると思う。」

「何で？」

「勘。」

えー、と不満げな声をあげるシド。カイザは扉に手を伸ばした。すると、外で数人の足音が聞こえた。カイザは手を引っ込めて後ろ手にシドに向かって差し伸ばした。シドは立ち止まり、黙り込んだ。近づいてくる足尾と話声。

「まったく、頭にも参ったもんだ。ダンテ相手に金儲けできるかったの。しかもあんなマーシャル家の偽物で。」

耳を澄ましていたカイザは、ダンテという言葉にはっと息を飲んだ。

「戦争中なんだ、幾ら武器が必要だからってわざわざ高値のついた貴族の剣を買うか？」

「そうだよな…せめてルーシアもどきを格安で売りつけりやいいのに、ケチって少量で大金稼ごうって腹だ。失敗したらこの盗賊団も終わりだな。」

「俺実家に帰るわ。」

笑い声と共に、足音は確実に近づいてくる。

「…カイザ、カイザ！」

シドの囁き声で、男達の会話に夢中になっていたカイザは我に返る。振り返ると、シドは剣を抜いて握りしめ、カイザを見上げていた。

「お前って何処で生まれたんだ？」

「知らねえ。俺捨て子だったからよ。盗賊になる前はラパンのスラムで美人局の手伝いしてた。」

鍵穴に鍵が挿し込まれる音がした。カイザは蝋燭の火を消し、シドの手を引いて扉の近くにある棚の陰に身を隠した。鍵が回され、扉が開く。ランプを手にした男を先頭に3人、入って来た。カイザが隙について出ようとした時、一人の男が立ち止まった。

「なんか、焦げ臭くないか？」

カイザは顔を顰めてブラックメリーに手をかけた。それを、じっと見つめるシド。

「確かに、蝋燭みたいな…」

「でも俺らランプだろ。火薬か？」

カイザの目の前には、弾薬を積んだ箱が。ランプを持った男が、カイザ達に近づいてくる。殺すか、いや、大事になつては面倒だ。カイザはブラックメリーを握りしめて立ち尽くしていた。その時、ランプの光が不自然に蠢き、ガチャンと硝子が踏み碎かれるような音がした。そして、部屋は暗闇に包まれた。入り口の近くで立ち尽くす男二人。目の前には、扉から差し込む月明かりの下で倒れ込む男と…男が持っていたランプを踏みつける、フードをかぶった少年。その足元を、鮮血がじわじわと染めてゆく。振り返る少年の黒い瞳が、暗闇で赤く光る。

「う、うわぁ！」

悲鳴を上げて逃げ出そうとする男を、後ろから一突きにするシド。剣を抜くと、そのうなじから血が噴き出し、少年の顔を真っ赤に染め上げた。男はばったりと地に這いつくばり、動かなくなった。少年は声も出せずに立ち尽くしているもう一人の男を冷やかに見つめ、ニツコリと微笑んだ。

「…やめろ！行くぞ！」

一瞬のことに啞然といていたカイザはやっとその足を踏み出してシドを担ぎ上げた。そして、立ち尽くす男を突き飛ばして倉庫を飛び出した。

「いいの？あいつも殺した方が…」

「こんなクズ盗賊団相手に、命のやりとりなんてするつもりはない。」

「

走っていると、男の悲鳴を聞いたのか外に団員が出てきていた。門から出るのは無理だ。カイザは踵を翻してアジトの裏に回り込む。

「皆殺しにしたらいいんじゃないの？」

「……」

カイザはシドの呟きを無視して、裏手の壁の前でアーマーに鉤爪をつける。そして、シドをおぶって壁を登り始めた。シドは、じーっと騒がしくなる背後を見つめていた。

「まだ近くにいるはずだ！探せ！」

男の声。カイザは舌打ちをして登る足を速めた。そして、上まで登り壁を越えようとした時。

「いたぞ！」

見つかった。シドは剣を握りしめて向かい打とうと身を乗り出す。カイザはその手を引いて、壁から飛び降りた。

「裏だ！」

アジトは工場に隣接しており、鉄の冷たい壁が並ぶ通りをカイザとシドは駆け抜ける。すると、背後から爆発音がした。周囲は一瞬明るくなり、強い爆風が二人の羽織を靡かせる。カイザが振り返ると、先程よじ登った壁に穴があき、黒い空に灰色の煙が立ち上っている。

「……脳なしが。そこまでするか、普通。」

そこから人が雪崩れるようにしてこちらへ走ってくる。

「行くぞ。」

カイザはシドの手を引いて細い路地に入った。光も差し込まない、暗い道を二人は走る。目の前の光が見える出口を目指すが、そこに人影が見えた。カイザは立ち止まり、辺りを見渡す。そして、一つの扉を見つけた。カイザが素早くその鍵を開け、二人はその扉の中に入った。そして、再び中から鍵をかける。扉に耳をあて、外の様子を伺うカイザ。

「何処に行った！」

「このあたりは職人共の工場が並ぶ。中に逃げ込まれたら面倒だ。」
「早く探し出せ！マーシャル家の剣とルーシアが盗まれたんだぞ！」

ばたばたと人が駆けてゆく足音が、だんだんと遠くなりついに、聞こえなくなった。

「……」

カイザは扉に寄りかかり、深い溜息をついた。シドは、そんな彼を見つめて言った。

「皆殺しちゃえばいいのに。」

「……」

そう、思っていたことがカイザにもあった。その方が早い、と。

「……殺しと盗みは違う。確かに武器を交える機会もあるけどな、貴族の剣とルーシアなんて殺しをしてまで手に入れる価値もない。」
「そうなの？」

「ああ。世の中にはもっと凄い宝もある。それにな、俺は基本的に

隠密行動が好きなんだ。バンディみたいに派手に殺して物を奪う盗賊もいるが…」

「派手な方が、恰好よくない？」

カイザは無表情でシドを見つめた。

「…派手だと宝に辿り着く前にばれるから相手次第では失敗に終わる。その点、俺は人も殺さず誰にも気付かれず取ってくる事ができる。バンディより、俺の方が凄い。」

しかし、カイザは後継者であることも明かされずに若衆団長、バンディは副総団長だった。

「そうなの？」

「ああ。ブラックメリーでも俺の方が評価が高かった。」

確かに腕を見込まれ、大きな仕事を押し付けられることも多かった。つまり、こき使われていた。

「へえ、さすがカイザ。」

少年は血みどろの顔を歪ませてニッコリと微笑む。カイザは変な虚しさでいっぱいになった。バンディなんか張り合って、自分は何をしているのだろう…と、カイザは項垂れながらそう思った。

「…もう行くか。」

「うん。」

二人が立ち上がろうとしたその時、部屋の明かりがついた。眩しさに驚いた二人は、目を細めて前を見た。

「…あれ、」

そこには、眼鏡をかけた男がいた。男は目をぱちくりさせて二人を見ている。

「…血？」

男は、返り血を浴びたシドを見ている。カイザがどうしようか考えていると、シドはすらりと剣を抜いた。それに気付いて、カイザはシドを止めようと手を伸ばす。しかし、シドはその手をすり抜けて男に向かってゆく。その幼い足は力強く踏み込み、細い腕が剣を振るう。

「やめろ！」

カイザが叫んだ。その声は鉄の壁を反射し、緩く空気を波立たせて消えてゆく。

「…ついに、嗅ぎつけてきたんだねえ。結構早いね。」

小さく震えるシドの剣先。少年に睨まれる男は、ペンチでシドの剣を挟みこんでいる。

「でも、残念。革命軍の物資はもうダンテさんのところに運んだからここには何も無いよ。死にたくなければ早く退散しな？」

「…何言ってるの、おじさん。」

ピシッという耳をつく音。シドの剣に、罅が入った。

「僕、盗賊見習いなんだけど。」

「…あれ、君は？」

男は立ち尽くすカイザを見て、聞いた。

「…盗賊。」

シドの剣が、ぽつきりと折れた。二人はそのまま向かい合う。シドは剣を放り投げて、ニコニコと笑う。

「おじさん、革命軍なんだね。」

男はニコリと笑い、言った。

「眼鏡屋さんだよ。」

「弁解の余地ないぞ、あんた。」

カイザが言うと、男は困ったように笑う。そんな男を、カイザは呆れたように見つめていた。シドの悪い癖が、こんな優男の本性を引きずり出した。

「…まあ、なんだ、よくやった。」

シドに歩み寄り、その頭を撫でるカイザ。男は首を傾げている。

「そのアーマー、ブラックメリーの人か。えーっと、眼鏡でも買いに来たの？」

まだ少し焦っている様子の男。カイザは真剣な表情で言った。

「…話がある。」

「話、ね。はいはい、とりあえず、工場じゃなんだから中に上がって。お茶くらい出すから。」

場を和ませようとする男の手を掴み、カイザは言った。

「革命軍のダンテについて、教えてくれ。」

「…」

冷え切った空気に満たされる、鉄の工場。パチパチと消えかけた明かりが、3人の影を点滅させる。表では盗賊達が戻って来たのか、走る足音がせわしなく聞こえていた。まだ、外に出られないカイザとシド。口走ってしまい、後に引けない男。3人は一先ず、同じテールブルを囲むしかないようだ。

26・その身は月下に曝される

夜も更けた。宿ではガトーが朝食の仕込みを、クリストフがシドの資料を眺めている。ルージュは瓶の中でまるまり、すやすやと眠りについていた。

「…シドの出生は不明、か。」

クリストフは舌打ちをして煙管を手にした。

「随分と彼に熱心ですね。」

ガトーがそう言うと、クリストフは煙を吐き出して窓の外を見た。

「鍵とは関係なさそうだけどな、少し気になって。」

「…何がです？」

「あいつの目が、赤く見えただ。」

「…真つ黒だった気がするのですが。」

「だよな。でも、この資料にもいつもフードをかぶった赤い目の子供と書いてある。」

トントンと小気味よい包丁の音。僅かな沈黙の後、その音が止んだ。

「…まさか、」

「そのまさかかもしれない。」

クリストフは次のページを開いた。

「シドの兄貴っていうのも、きっと同じだろうな。」

「…ホワイトジャックのサイですか。」

「カイザも面倒なのに懐かれたもんだ。」

クリストフは資料をテーブルに投げだし、溜息をついた。

「神に見放され、悪魔にその身を守られる本当の悪党、ね…ガトー、ギールも鍵戦争の関係者だったのかもな。」

ガトーが振り返ると、クリストフは背を向けたまま煙管を咥えていた。

「いや、あいつこそ、ただの鍵集めをここまで複雑にした張本人かもしれない。カイザを誘拐し、後継者を選んで、エドガーを見つけさせた。そして、何も語らずに死んだ。」

「…語れなかったのでは？ギールさんも、クロムウェル家の動向についてにはわからずじまいで。」

「…そうだな。考えすぎか。」

クリストフは俯いて、煙を吐き出した。紫煙が部屋の中を細く薄くなりながら流れる。そして、蠟燭の明かりのもと、ふっと舞い上がって空気に溶けた。

「これ、着替えね。」

「ありがとう、おじさん。」

「おじさんじゃないよ、お兄さんだよ。」

男から着替えを受け取り、笑顔で部屋を出ていくシド。

「…悪いな、風呂まで借りて。」

不法侵入に殺人未遂。そんな二人を快くもてなす男に、カイザは申し訳なさそうな顔をした。男はシンクに立ってカップを探し出す。

「気にしないで。俺の方こそ、疑って悪かったね。さ、立ってないで座りな。」

暖炉の明かりが揺らめく部屋の中心に、丸い木製のテーブルがあった。その大きさからして、男は一人暮らしなのだろうか。そんなことを考えながら、カイザは席についた。男は温かい茶が入ったカップをカイザに差し出した。

「ありがとう。」

「いえいえ。そういえば君、名前は？」

男は自分の分の茶を手にも、カイザの正面に腰かけた。眼鏡に光が反射し、淡く色づいている。

「カイザ。」

「カイザ…最近聞いた名だな。なんだっけ。」

小さく唸りながら思いだそうとしている男を見て、カイザは慌てて話した。

「あ、あんたの名前は？」

「俺はオズマ。しがない眼鏡屋だよ。」

オズマと名乗る男は茶を飲んで、はあ、と温かい息を吐いた。

「ブラックメリーの紋章も知っているようだし、革命軍には相当な情報が流れ込んでくるみたいだな。」

「全部革命派の情報屋からの提供さ。応援してくれるのは嬉しいけどね、何でも垂れこめばいいと思っっているようで…戦争と関係のない話も多くてね。最近だと、あれかな、ノーラクラウン国王惨殺事件とか…あ、そうそう。大盗賊ブラックメリーのマスターも死んだそうじゃないか？大丈夫？」

カイザのカップを持つ手が、ぴくりと止まる。

「…ああ、なんとか。」

「そういえば、そのマスターを殺した賞金首の名前…」

オズマはじつとカイザを見つめた。カイザは、カップの底を見つめて動かない。その表情からは何の色も伺えない。ただ、見ている錯乱、後悔、懺悔…何を言われようともう迷わないと決意した彼の眼にはゆらゆらと暖炉の火が蠢いている。オズマは頬杖をつき、言った。

「君がしたことと、君が今から聞こうとしてること…関係あるの？」

カイザは視線を上げ、真っ直ぐにオズマを見た。

「ないとも言えない。マスターがきっかけで、俺は今旅をしているんだ。」

「そう。で、何が聞きたいのかな。」

「…革命軍のダンテって、どんな奴なんだ。」

オズマは困った顔をして、言った。

「立場上、巷の評判くらいしか教えられないけど…革命軍の英雄さ、勇猛果敢な背の高い屈強な男なんだそうだ。」

「男？」

「ああ。彼の凄いところは、魔術を駆使した戦術だ。北の魔女達とも交流があつて、そこから支援をうけているらしい。噂じゃ、実は煙の塔に住む伝説の魔女ダンテの夫で妻の名前で武勇を上げているんじゃないか、なんて言われているよ。名前が同じだから。」

男：

カイザは少し考え込み、口を開いた。

「あんたは会ったことないのか。」

「ないねえ。俺下っ端だから。」

「なんとか…ならないのか。」

「カイザ君、ダンテさんを探しているの？」

カイザは再び考え込んでしまった。その間、オズマは茶を飲み干し、カップをシンクへ運ぼうと椅子から立ち上がっていた。

「…噂で言うなら、その、ダンテの妻を探している。」

「…妻って、伝説の魔女？」

シンクにカップを置き、驚いた表情で振り返るオズマ。カイザは渋い顔をしている。

「本気なの？彼女は伝説上の存在だよ？そりゃあ、最近は鍵戦争とかなんとか、伝説の鍵を探し回っている連中もいるようだけど…」

こう言われるだろうと予想していたカイザは、小さく溜息をついた。

「俺は関係ない。とにかく、伝説だろうがなんだろうが俺はそいつを追ってるんだ。噂頼りで情けないが、藁にもすがる思いなんだ。そのダンテという男が何処にいるのか、教えてくれ。」

オズマは席に戻り、鼻から大きく息を吐きだすと、細い中指で眼鏡をくいと上げた。

「…本当に、関係ないの？」

「…」

「君も、鍵戦争の参加者なんだね。」

黙り込むカイザに、オズマは微笑んだ。

「だったらなおさら、教えられないなあ。」

カイザの表情が固まった。微笑むオズマと見つめ合う。すると、扉が開いた。

「あがつたー。血とれてる？」

ほかほかと湯気を立ち上らせながら、シドがやってきた。その瞬間、オズマは包丁でカイザに斬りかかった。仰け反って避けるカイザ。包丁の切っ先が、カイザの鼻先をかすめて靡くブロンドの髪を数本切り落とす。カイザはテーブルを掴んでオズマに向かってひっ

くり返し、倒れる椅子と共にそのまま後転して距離を取った。床に落ちて割れるカップ。きょんとして立ち尽くすシドの隣で、カイザはゆっくりと立ち上がる。

「…お前も、鍵を狙っているのか。」

カイザが聞くと、オズマは後ろポケットからペンチを取り出し、言った。

「手に入れられたら楽しいだろうねえ。でも、俺はそんな物には興味ないよ。」

「だったら、なんで…」

「君は鍵を奪う側の人間。だったら俺は…」

オズマは、怪しく笑う。

「鍵を守る側の人間さ。」

掴んだ。ダンテへの手掛かり。直接的な、近道。

「カイザ、」

立ち尽くしているカイザに、シドが話しかけた。シドは、カイザの前に立ち塞がり、剣を抜いた。

「よかったね。こいつを生け捕れば、カイザが探している物に近づくんでしょ。」

「シド…」

「僕が相手する。クリストフ達を呼んで来て。」

「待て、俺が…」

「呼んで来て。」

シドはカイザに剣を向けて、鋭く睨んだ。

「雑魚には手下を当てるのが、ゲームのセオリーだよ。それに…」

シドはその鋭い目をふにやっと細くしてオズマを見た。

「カイザに武器を向けたこと、後悔させたいんだ。」

「…殺すなよ。」

「わかってるよ。」

カイザは羽織を手に、シドを心配そうに見つめながら部屋から出てった。オズマは眉を顰めてシドを見ている。

「シド…小さな死神か。死刑になったと聞いたが？」

「生憎、転職したんだ。」

「増援なんて無駄だよ。」

「僕が負ければね。どうせ僕らを殺してここからずらかろうって腹だったんでしょ？」

「俺も忙しいからね。」

オズマはテーブルを蹴り飛ばしてシドに歩み寄った。シドは構えもせずにとだ立っている。オズマは包丁を構えて、シドに突っ込んでいった。大きな音を立てて破壊される扉。木屑が飛び散り、ガラガラと天井の壁が崩れる。オズマがゆっくりと振り返ると、暖炉の光を背負ってシドが立っていた。逆光でよく見えないが、彼の口元は軽く緩んで見える。

「おじさんもなかなか腕が立つようだし、たぶん、僕やカイザより

強いんじゃないかな。」

「二人とも俺から見れば子供だからね。」

オズマはそう言つて数本のペンチをシドに投げつけた。シドは右下を俯き、かわす。ペンチは暖炉に当たつて煉瓦に食い込んだ。

「でも、僕が子供だなんて思わない方がいいよ。そんな可愛いものじゃないから。」

ゆっくりと顔をあげ、ニツコリと微笑むシド。すると、暖炉の火がふいに消えた。驚いたオズマはその場に立ち止まり、包丁を構えた。

「子供じゃない僕なら、勝てるよね？」

暗闇で響くシドの声は、どこか深みが増えて聞こえる。そして、罅が入るような音がしたかと思うと、暖炉が崩れ、冷たい風と月明かりが部屋に差し込んできた。

「……子供でも、死神でもなかったか。」

黒い片翼の翼、鋭く伸びた爪。

「久しぶりだよ、この姿になったのは。それ程、おじさんを強いと認めたつてことだから、僕に負けても誇りに思つていいよ？」

真っ暗なフードの下で、少年は瞼を開いた。赤い瞳が、オズマを捕える。

「おじさんじゃなくて、お兄さんだよ。」

包丁を構え、距離を取りながらオズマそう言つと、少年は笑つた。その口元で艶めく白い牙をぬって漏れる黒い吐息。それらは空気中に揺らめき、部屋を満たす。

「殺さないように、気をつけなきゃ……」

その瞬間、黒い風が部屋を吹き荒れ、壁に開いた穴から漏れ出した。月だけが浮かぶ暗い夜空を、更に黒い、漆黒の風が吹き抜ける。それらは踊るように駆け抜けて、夜空に溶けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4141z/>

Akashic Records ~ Edgar ~

2011年12月31日22時50分発行